

京都府立総合資料館所蔵



持
992
31
3

○北村先生編 丹波誌 一部拾五卷
先生に請ひて二部を淨寫し
京都帝國大學圖書館と京都
府立圖書館に各一部を寄託
す

大正拾四年七月一日

北村龍象先生喜壽會

(北村先生喜壽會結末報告書を添附す)

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

保津村

天保度
北戸百三十三軒
南戸二百六十九軒
四十軒特種

保津村 古稱はづ今猶ほらづ

地勢ハ郡ノ東部ニ在リテ東面山城國葛野郡ニ隣
接シ西南大川ヲ隔テ、龜岡町ヲ眺矚シ北方十年
村ト接シ南方亦大川ヲ隔テ、篠村ニ際ハル目
然ノ形勢ニ由リ南北ニ分居ス愛宕川其ノ今界ト
ナル

元禄高二千十八石九斗四合三勺天保二千三百二
十石一斗九升四合三勺之ヲ南北ニ分カテ南保
津元禄千六百十石天保一千二百六十一石八斗北保
津元禄九百七十石天保九百五十八石三斗九升四
合三勺人口合四百三十四人南三百二十四北百十
明治二十七年 北保津高ヨリ荒引砂入引堤附添引沙

敷地引請田社地引等ニテ賣收五百四十七石七斗
 一升一合七勺トナル
 明治ニ至リ町村合併自治制度施行ノ際本村ハ單
 獨ニ舊格ヲ維持シ得テ只南北ノ區別ヲ取り去リ
 シルノミニテ舊村名ヲ保留セリ此ノ如キハ外ニ
 馬路アルノミナリ古稱德津保ナルガ何時カハ保
 津トナレリ寶津ノ字ヲ用フルハ文士ノ筆端ヨリ
 スル風流文字ナルベシ康正ニ年内裏造營アリ其
 引付ニ三貫文結城越後入道丹波德津保殿錢ノ文
 アリテ室町將軍府月並ニ出ヅ
 請田大明神 主神 大山咋命 九月廿五日祭
 舊曆 末社 稻荷大明神九森大明神御靈費布福

山王于守大明神合五社 別當保國山神護院山門
 正覺院ノ末寺ニテ豪亨上人開基以後維新ニ至ル
 上古此ノ邊ハ一面ノ泥濘ナリシヲ出雲大神八柱
 ノ神ト治水ノ事ヲ談シ大山咋命ハ鋤ヲ持テ山
 石ヲ穿テ孽キ玉ハハ湛水一時ニ東流シ土顯ハレ
 圓成ル大蛇ノ害アルヲ以テ八神協力シテ之ヲ斬
 殺ス其ノ血嚙ハテ流シテ八神山土ヲ切り流セバ
 血亦流シ去ル其ノ迹ニ田浮ビ出ヅ之ヲ浮田ト云
 フ文字ニテハ請田ニ作ル
 八幡宮 請田明神御旅所 寛永年中洪水ノ際小
 倉籠北栗田郡細川村ヨリ流シ來リ此所ノ松枝ニ繫
 カル村人村上三右衛尉取り卸シ一福ヲ建テ、之

丹波志

レヲ祭ル此、社コレナリ末社天満宮 鳥居ノ文
奉寄進石川草春貞享元年甲子三月吉辰

八幡宮

社領之事

請田大明神

龜山領内於保津村從來之内敷石之事任先規
之旨令寄附之訖全社納不可有相違者也

天保十四年十二月十五日

信篤 爲

兩社別當 神護院

請田大明神山林竹木下草等ニ至ル迄採伐輩
於有之者可爲四事者也

卯十二月十五日

丹波國桑田郡龜山領保津村佛性寺嶺山南者

谷川北者東谷際西者北保津村際任先規令寄
附之畢全可有御支配者也仍如件

天保十四年十二月十五日

松平紀伊守信篤 爲

愛宕山威徳院

不動堂 本尊不動明王 觀音堂 本尊觀世音菩薩

春徳山養源寺 妙心寺末 本尊釋迦如來 立像

八寸 開山法山和尚

紫雲山照光寺 妙心寺中隣院末 本尊觀世音菩薩

薩一尺五寸 鎮守公若大明神

光巖寺 小庵 山門正覺院末 高三石村除地

地藏堂 本尊地藏菩薩立像四尺惠心作靈佛靈了

京都府立総合資料館所蔵

リト云フ 天台禪兩宗
 今日堂 小菴 本尊觀世音菩薩
 寶蓋山光福寺 天台宗 本尊觀世音菩薩 立像
 二尺三寸五分 北野高林寺末除地
 不動堂 石像三尺瀑布上ニ立ッ 暖宕道ニ傍ッ 文
 覺上人嚴行ノ古迹
 峯堂 俗稱ムネンド 山城水尾ニ越ニル所ヲム
 ネンド越ト呼ゲ今ヤ其ノ堂無シ山神ヲ祭レル所
 ト云フ 篠村老坂記事參看アルベシ
 制札 併性寺山用木者不及申下草ニテモ一切刈
 取申間敷者也 丑五月
 清和天皇ヲ水尾帝ト稱スルハ隣邑ナル山城ノ水

保津川

尾ニ御假寓アリ又御廟モアルニ因ル遺勅ニ由リ
 御廟守ニ琮姓ヲ賜フ之ニ與リタルハ此ノ村人ト
 馬路川原尻井關及ヒ關ノ黨類ナリ
 大永天文ノ際ニハ細川右京大夫氏細ノ家臣水尾
 源兵衛爲此ノ地ニ在リテ桑田郡守護代タリ
 地藏洲 洲上ニ山アリ山上ニ地藏堂アリ由リテ
 此ノ名アリ大士立像四尺惠心ノ作此ノ地斷崖ニ
 シテ下ニ大川アリ大雨毎ニ崩壞シ今ヤ夏迹無ク
 名ノミ残レリ
 大川水原北桑田郡ニ出デ北桑田郡ノ船井郡ニ入
 リ船井郡ノ本郡ニ流レ山城國ニ注グ其ノ間ニ
 於テ大小諸流ヲ容ル、下數多ナリ各水原地ニ於

丹波誌

ケル記事及ビ沿岸諸村ト、記事ヲ互照併見セバ
 其ノ流系ト川史トヲ知ルベシ
 往昔ハ一大湖沼南來船并ニ郡ノ大半ヲ浸ス大山
 昨命等八神辛苦經營シテ之レヲ疏通シ以テ平地
 ヲ得タリ其ノ迹ノ残レルモ、此ノ一箇ノ派系ト
 ナレリトカヤ前記諸田神社記事ト龜岡之ヲ此ノ峽
 却山神社ノ部ニ出テス
 上ニ祭レルハ其ノ德澤ヲ尊崇スレバナリ 竹筏
 ハ古來コレヲ流シ來レルガ其ノ初ヲ詳ニスルハ
 難シ木筏ハ殿田ヨリ派ス丁慶長年間ニアルモノ
 、如シ同元年ノ頃ニ黒田村山國村協議ノ上川造
 リヲ決定シ大庄屋大野村ノ六左衛門コレガ元役ト
 ナリ同二年七月ニ至リ山下高瀬ノ大堀川作り山

門足京ノ棚作り同ク迂リノ水戸ヲ開キ堀戸ノ切
 戸ヲ開キ猿飛ヲ作ル五箇所ノ工事ニ斧役百八人
 出役シ費目莫大ナリ上弓削村人足五十人下宇津
 村ハ十五人ト酒一斗周山村ヨリ見舞トシテ酒一
 斗五升近傍諸村ヨリ相應ノ贈物アリ同十年山間
 ノ堀戸宇津ノ

京都府立総合資料館所蔵

保津村

阪下周山外ノ森等四ヶ所ノ工事アリ石工二百七十人
 人足百五十人ヲ使用シ寛政五年寛文四年寛
 永五年同七年正徳二年寶暦三年ノ數回ニ石工五
 十人乃至七十五人人足五十人乃至百二十人ヲ使
 用ス村内々川ノ經費ハ村辦トシ周山郷ノ境ヨリ
 上世木迄ハ郷割ノ規定タリ
 慶長十年ノ頃ニハ了以ノ工事成就ノ見込立テ奥
 又ハ山方ト呼ブ五十二個村ト口ト稱スル嵯峨梅
 津桂ノ三村ト取引開始セラレヨリ延寶四五年
 ノ山間浚深ニ山方ト口三村協議ノ上一貫文ニ付
 奥ハ七百匁ヲ出ケシ口ハ三百匁ヲ出タス七三ノ
 割出ヲ定ム

木筏ハ慶長八年豊臣氏ノ奉行ヨリ通筏免許状ヲ
 下付セリ運上法ハ二十分ノ一ナリ其ノ法タル筏
 杖ニ十本ヨリ一本ヲ取ル其ノ數ハ初ノヨリ二十
 本目ニ當ルノ一本ヲ取ルニ由リ大杖ニ當レバ大
 杖ヲ取リ小杖ニ當レバ小杖ヲ取ル雙方ノ利不利
 ハ時ノ運トス若シ一大巨杖ヲ嵯峨ノ杖木屋ニ賣
 ラントシテ筏ニ組ミ其ノ杖ガ二十本目ニ當ルノ
 不運アトシニハ大損失タルヲ以テ兼テ改役人
 ニ頼ミ其ノ筏ハ頭木ヨリ數ハ始メ又ハ尻木ヨリ
 數ハ始メ度ト袖ノ下ヲ使ハバ隨分頸意ヲ通ズル
 丁モ出来ル此ノ稅杖ヲ古來代木ト唱フ左ノ書面ハ
 大高ヲ料紙トス

丹波いりさりのり

一 二十人 うつ上下 一十五人 保津村 一十五人

山と村 合五十人

右之通序用木其所より嵯峨迄可差出也

七月八日

秀吉 朱印

石川伊賀守殿

山田基兵衛殿

諸役令免除ハ上ノ筏ノ後浦向後可入替と也

十月廿一日

秀吉 判

丹波保津庄

筏士十五人

諸役免除ノ特典ハ保津山本ノ二村ニ限リテ宇津

保津村

丹波志

ニ及バス升ハ宇津ヨリ流筏ヒタレドモ御用筏ヲ
 下サカリシ故トグ 寛保ノ初年筏先口幅一間ニ
 尺長二十八間ヨリ長三十間ト爲ル文政年間ニハ
 幅一大五尺長二十七間延寶四年六百四十五衆天
 保年度ニハ一千衆明治初年一千五百衆同二十四
 五年ニハ二千衆大正年初ニハ三千衆トナレリ
 延喜年間 樽一枚椀功錢一文半 慶安二年保津
 山本ヨリ嵯峨梅津桂マデ十尺七分寛永四年十三
 尺正徳二年十七尺享保十一年十八尺ト差價ノ昇
 騰ヲ見ル 同年水揚四尺ヲ加ハ嵯峨マデ十七尺
 梅津マデ十七尺五分桂マデ十八尺元文二年二十
 八尺三分トナリ寛延ニハ二十尺トナリテ訟訴ト

保津村

ナリ二十尺ニ度ル 明治二十年嵯峨マデ百六十
 五尺梅津マデ百七十五尺桂マデ百八十五尺トナ
 ル 大正年間トナリ宇津ヨリ船升ノ天若マデ三
 里一日程金壹圓五十錢天若ヨリ保津マデ九里二
 日程二圓八十錢保津ヨリ嵯峨マデ三里二日程三
 圓五十錢元和元年過書船定書ナルモノ出テ京都
 伏見間高瀬船通行支配人ナル木村惣左衛門及ビ
 丹波運送船支配ナル角倉與市ハ左ノ利権ヲ附與
 セリ

一過書船上米之軍

右百石ニ付銀子六匁宛ニ相定上ハ爲兩人受取
 也木村惣左衛門角倉與市方ハ可納之并ニ船數

兩人次第數多可申付事

一從伏見下り舟乘人荷物之上米事

如先規兩人方へ可納之船數目前 但船賃可為

前々之通者也

元和二年八月

筏差料定

一木筏一乘ニ付保津ヨリ嵯峨迄十八匁六分内

四匁五分差子賄

一同 保津ヨリ梅津迄十九匁三分内

四匁五分差子賄

一同 保津ヨリ桂迄二十匁内四匁五

分差子賄

一竹筏一乘ニ付保津ヨリ嵯峨迄六匁内二匁差

子賄

一同 保津ヨリ桂迄六匁五分内二匁

差子賄

以上

運上所ハ 山本濱ニ在リ之ヲ今津ニ移シ遂ニ保

津濱トナル材木ハ前示二十分ノ一薪ハ一束ニ鉄

一文竹筏ハ運上無シ 材木薪柴ノ運上岳ヲ購買

スル商人アリテ時々入札ス賣上高二十分ノ一ヲ

幕府勘定奉行所へ納ル維新前ニハ龜山藩ヨリ宇

津根ニ下吏一名ヲ出カシ山本ヨリ一名保津ヨリ

一名出張シテ看督納税ノ丁ヲ掌レリ 寛政度ノ

保津村

丹波志

制左ノ如シ

角倉手代トシテ村人ナル村上五郎助宇津根ノ庄
 左衛門カ舟荷預リト云フ各種ニテ往來船改ヲ掌
 ル 當時水上程ヲ定ム但陸路ヲ標準トシテナリ
 殿田河内間 五十町 殿田鳥羽間 二里 殿田
 宇津根間 五里 殿田保津間 五里半 船數ノ
 定 殿田四艘 柴薪ヲ主トス米穀ヲ從トス平水
 十八石薪重コレニ準ス 中村三艘 上河内四艘
 平水二十石 鳥羽六艘 同上 宇津根二艘 二
 十四石以下 保津十五艘 山本十艘 漕手二人
 舵主一人
 寛政定船價 殿田嵯峨間八里 四升六合水主 三升六合運上ノ八升

河内嵯峨間七里 三升六合水主 三升六合運上ノ七升
 鳥羽嵯峨間六里 二升六合水主 二升六合運上ノ六升
 宇津根嵯峨間四里 一升九合水主 二升四合運上ノ四升三合
 保津嵯峨間 三里 一升六合水主 一升九合運上ノ三升五合
 漕米 寛政度調査凡一年ニ壹萬五千五百石

一六百石 仙洞女院等御米 一三千四十七石 御代官所米 一二千五百七十石 龜山米
 一二十石 篠山米 一六百石 杉浦米 一七百五十石 諸旗本米 一三千六百石 商人米
 人舟 殿田ヨリ宇津根又ハ山本迄一人乗賃十錢 明石
 二十九年 嵯峨迄又十錢 買切ハ金貳圓外國人ニハ高
 賃ヲ貪ルトノテ不平アリ因リテ三十八年左
 ノ如ク定ム山本保津宇津根ノ出船ヲ止メ龜岡渡
 一所トシ一艘一等六圓二等四圓五十錢三等一圓

保津村

五十銭但二三等ハ午後二時以後舟夫一名ニ付二十五銭増又水量多キ時ハ舟夫ヲ増ス一名壹圓トス

保津舟株十四艘 寛政度定 久次郎 孫惣 小左衛門 興作 六右衛門 加之助 六助 門助

市助 吉助 俄兵衛ニテ三艘不足ス右ノ人名ハ初代ノ舟持ニテ後人コレヲ準用シ所有主改マ

レドモ名ハ代ラズ改造スル際ニハ新舟ノ艫ニ記名シテ船主ニ給フ

船製 長サ七間半幅七尺許深三尺許河流浅クシテ船底ヲ嚙ミ沙石ニ膠セラルヽヲ以テ故ニ船體ヲ脆弱ニシ宛然幾枚ノ附ケ木ヲ貼リ合ハセタル

如キ薄板製ノモノニテ底平カナリ舳艫共ニ高レ富士川木曾川ニ泛バル船隻モ同一製法ナルハ同一人ノ意中ヨリ出デタル結果ニ因ル 甲斐國 嶽澤ヨリ駿河國岩瀨河岸ニ至ル水程十八里ヲ六時間ニ下ルニ比スレバ遅緩ナルモ三里ノ水程一時餘間兩岸ノ風色ヲ看賞スルニ足ルハ僅ニ八九町間ノ風色アルニ比スレバ同日ノ談ニアラズ下示ノ詩文コレヲ證ス

二堰アリ内膳堰ト呼グ上流ニアルヲ上内膳ト曰
 二下流ニアルヲ下内膳ト曰フ岡部内膳正ガ龜山
 二候タル時築造シタルモノニテ水勢ヲ殺キ通舟
 通符ニ一大便益ヲ興ヘタルモノトス事ハ慶長年

間ニアリ通舟開始當時ナリ
 通舟通笈ハ舊曆八月十五日ニ始マリ翌年四月八
 日ニ終ルヲ例限トス然レモ水源地方ニ猶下スベ
 キ物件多ケレバ下流ノ村々ト悞議シテ終限ヲ伸
 張ス是レニ付キテハ關係諸村ハ贈典スル所無カ
 ル可ラズ而後田養水トシテ引注スベキ妨礙タレ
 バナリ
 保津村ハ諸役免除トテ賦課ナカリキ升ハ前示運
 上木ノ運送ヲ擔當スレバナリ
 清和天皇ハ水尾村ニ隱棲シ時々出テ、峽間ヲ道
 遙シ遊奠ヲ見ソナハセナドシ玉ヲ天皇ヲ水尾帝
 ト申シ奉ル四歳即位在位十八年ニシテ釋ニ入り

血年山年夏六十石
 石柱下葉、村方自
 由訖錄、許可并録
 ハ不被許
 山見二人扶持

諸國ヲ歴觀シ玉ヒ觀音ノ靈場ヲ巡拜シ終ニ水尾
 ニ入り崩シ玉ヲ水尾モ古ハ丹波ニ属セリ歌枕秋
 ノ寢覺ニモ水尾ヲ丹波ノ名所ニ入レアリ爲家ノ
 歌ニ りりり水乃尾川子きき年のみまれば迹もくまむむ哉
 古ハ鴛ニテ鮎ヲ捕リシテ雍品府志ニモ見ハ峽間
 鴛飼ノ壁ト名ヲ遺セリ古ノ价ハ酌鮎ノ爲ニトビ
 タリ酌鮎トハ溪流ノ狭キ瀬ニ跳ネ揚ガルモノヲ
 小網モテスクヒ取ルナリ
 妙澤アル馬蹄硯ヲ産スレドモ極メテ少ニ好事ノ
 士之ヲ得レバ秘藏愛玩ス
 峽ノ春色ハ世人之ヲ知レドモ保津峽ノ躑躅花
 ハ知ルモノ少カリシヲ維新後世人ノ口耳ニ上ル

保津村
 峽ノ春色ハ世人之ヲ知レドモ保津峽ノ躑躅花
 ハ知ルモノ少カリシヲ維新後世人ノ口耳ニ上ル

京都府立総合資料館所蔵

丁トナリ遊覧人次第ニ多クナレリ龜岡町ノ北端
ナル一部落宇津根ヨリ乗船スルモノハ水勢ノ緩
ナルヲ以テ初期ニ違フテ暫ク心情ヲ慰ムルノ所
ナキモ前途多望ナルヲ以テ疾ク進マ、ク欲スル
ガ山本ヨリ乗ル人ハ此ノ指味無シ 龜山城ノ天
守臺ナル公孫樹轟カニ立キ乗客ヲ送ルカト訴ル
別仕立ノモノハ夫文ノ準備アリテ乗客ニ満足ヲ
與ヘ楫主楫取モ亦待遇ニ意ヲ注ス 通常ノモノ
即チ並仕立ノモノハ長筵一枚敷キタルマ、ニテ
諸事不自由ナリ荷船ノ上乗ナランニハ薪炭ノ間
日坐ヲ作ツテ躊躇スルニ過キス 甲ヨリハ乙々
ヨリハ丙ノ方風雅趣味アリテ古ノ伎ツノマ、ナ

リ俄ニ山ト山ト相迫リ舟ノ間ヲ奔ル巖稜石尖
數ノルニ違フテ水花ビ舟跳ル此處ヲ早瀬ト云
フ手藪岩坂主岩アリこくりノ瀬ニ出デ、一瀉千
里ノ勢ニ乘ル 奔流當石忽騰散舟過飛珠未落間
ノ二句モテ形容シ得テレヤ否 記者ハ此處ニテ危
険ニ遭遇シタリ舟底ノ板ガ尖岩ニ截テレテ急ニ
水ノ滲入シタルナリ左ナキダニ乗客ヲシテ魂ヲ
失ハシムル處舟ト岩ト才毫ノ間ヲスレ、ニ下リ
舟底砂石ト相磨スル音アルハ水濁スルノ時ナリ
浮々泛々タルハ水ニ富ムノ時ナリ記者ノ遭難ハ
渴水ノ時ニアリ漸ク測ノ處ニ至リ舟ヲ岩ニ倚セ
舟子ハ疾ク出ヨト命ゼリ己ニ携帶品ヲ手ニシ今

保津村

丹波志

ヤ跳り出デント用意シタルトテ直ニ扁石ノ上
 ヲ跳リ立ケヤレト胸撫デ却ス折柄一舟一舟
 次第ニ無難ニ下リ来ルアリ慰問ノ聲ト相答スル
 ノ話トヲ交換シツ、行ク舟ヲ呼留ノヲ又乗リ又
 此ノ時早シ彼ノ時遅シ艦ニ居ルモノ舳ニ立ツモ
 ノ同氣相應シテ舟ヲ操ル所一廻半轉一昇一降一
 瞬半里風起リ波飛ヒ危嶮極マル屋形岩ニ至ルソ
 レ測ソレ潭ソレ瀬ソレ漣薄板一葉ニ身ヲ寄セ不
 測ノ難地ヲ渡ル想起ス前年龜田ニ聘セラレタル
 音楽隊ノ一行ガ歸路ヲ此ノ舟ニ取ラントス舟人
 云ハク爾後水多シ舟出ス可ラズト一行ハ少年影
 伴曰ハク水多クテレバ舟平日ヨリモ快駛セン増賃

何程ニテモ給典マン出セト強談已マズ舟子モ
 奇利ヲ危地ニ獲ントヤ迷ヒケン遣レノ一二言
 ニ舟ハ岸ヲ離レ平常ナラバ瀨モアリ漣モアルニ
 水ノ多キ到處皆測見ル間モ無ク下リ飛矢ヨリモ
 早ク銃丸モ及バヌ速度ニテ小家ノ測ヲ過キ忌マ
 ハシキ名ノ落岩ノ壁ヲ後ニシ高瀬ヨリ聞クモ怖
 ロシキ獅子ガ口ニ至ル頃ハ危険ノ絶巔ニ攀ガタ
 ル邊リニテ口ニ言ハネド心ニハ佛名唱フル舟子
 ノ情音楽隊ノ壯士モ此ニ至リテハ稍後悔ノ色ヲ
 顯シタルモ如何ニカセン舟體一時ニ破摧シ了リ
 又舟子ハ慣レタルトテ性命ヲ保チ得シガ少年
 十餘名ハ游泳ニ術無ク翌日ニ到リ搜索隊ノ手ニ

何レ世何ノ人カ名ッ
 ケン峡間ノ地名石名
 ハ九ノ如シ
 坊主岩 手鞠岩
 烏帽子岩 車岩
 鏡岩 八疊岩
 屋根岩 茶屋石
 三ツ石 蛙岩
 そめさ岩 犬尻
 腰岩 象鼻
 蜂巣 七ツ石
 金ガ石 徳住女岩
 屏風岩 獅子舞岩
 時雨岩 書物岩
 蓮華岩 高麗狗
 赤岩 岩

於テ彼方ニ一巖是方ニニ姿ト捨ヒ揚ゲラレタル
 ヅ哀レナル通舟摩マリテヨリ斯カル悲惨ハ初メ
 テナリト云フ樂器ソ片々漂々流レ下ルヲ見ル川
 下ノモノハ不思議ノ感ニホタレタルモ忬ナレ夫
 ハ扱象ガ鼻ヲ以テ象レル長ク差シ出デタル邊リ
 ラ廻レバ少シク長閑ナル概アリテ水勢巴紋ヲ爲
 シテ藍ヨリ青ク景色ヲ造リテ人ヲ迎ヘ人ニ媚ダ
 此ノ處左右ノ峰密相映ジテ鬱蒼タリ是迄峯ト兩
 峰ノ山トヲ仰キ見ルヲ得又兩岸ノ風光モ次第ニ
 眼睫ニ映リ来ル漁夫ノ釣竿樵夫ノ列行童女ノ草
 ヲ負フ一條ノ細運溪ニ沁テ蛇ノ行クニ似タリ
 廻リ廻ニテ一回レ般ノ瀨長瀨モ己ニ過テ七ツ岩

維新當時ノ
 屏風岩



維新當時ノ
 蓮華岩



京都府立総合資料館所蔵

海峽名石の仰光
標外文字今三石下テ
書き貼シテ

何レ世何ノ人カ名ツ
ケン峽間ノ地名石名
ハ尤ノ如シ
坊主岩 手鞠岩
烏帽子岩 車岩
鏡岩 八疊岩
屋椽岩 茶屋石
三ツ石 蛙岩
そのまき岩 犬尻
腰ノ岩 象ノ鼻
蜂ノ巣 七ツ石
金ガ石 徳住女岩
厚風岩 獅子舞岩
時雨岩 書物岩
蓮華岩 高麗狗
赤岩 岩

維新當時ノ
屏風岩



維新當時ノ
蓮華岩



於テ彼方ニ一巖是方ニニ姿ト拾ヒ揚ゲラレタ
ッ哀レナル通舟聲マリテヨリ斯カル悲慘ハ初
テナリト云フ樂器ソ片々漂々流レ下ルヲ見ル川
下ノモノハ不思議ノ感ニホタレタルモ尤ナレ
ハ扱象ガ鼻ヲ以テ象レル長ク差シ出テタル邊
ヲ廻レバ少シク長閑ナル概アリテ水勢已紋ヲ
シテ藍ヨリ青ク景色ヲ造リテ人ヲ迎ヘ人ニ媚
此ノ處左右ノ峰密相映ジテ鬱蒼タリ是迄峯ト西
峰ノ山トヲ仰キ見ルヲ得又兩岸ノ風光モ次第ニ
眼睫ニ映リ来ル漁夫ノ釣竿樵夫ノ列行童女ノ草
ヲ負フ一條ノ細運溪ニ沁ヲテ蛇ノ行クニ似タリ
廻リ洲ニテ一回レ般ノ瀨長瀨モ已ニ過テ七ツ岩

ヲ迎へ鴨目ヲ迎へ名ニシテ負フ屏風岩ニ眸ヲ凝ラ
 シ鋸尻ノ碧潭難ノ瀬ノ急奔時雨岩蓮華岩ニ本松
 ノ奇勝ヲ見ツ、問ヒツ、大瀬千鳥ガ淵トナリ何
 時ノ間ニカ身ハ山城ノ人トナリ保津川下リノ興
 ヲ終へ悠々タル流ニ岨岨ノ景ヲ迎フ
 屏風岩一名石門関ハ一大長石ニシテ流域ニ横タ
 ハリ湊流ヲ停滞セシメ上流コレガ爲ニ壅塞スル
 ヲ以テ寛政十一年之ヲ破碎シ水流ヲ疏通セシメ
 タルヤ好シ併シ屏風ノ如ク衝立ノ如キ形ハ迹ナ
 ク今ハ僅ニ石痕ノ姿ヲ存スルノミ
 八帖岩八疊岩八丈岩ナド色々ニ書クガ長八九間
 横五間餘水平ヲ出アルニ間餘ニレテ水ニ臨ム峽

中巨石ノ第一位ヲ占ム
 潛リ岩請田ノ下三町計リニアリ船ノ牽綱ノ當ル處
 自然凹ス柔能ク剛ヲ割スルモノ其ノ石質燧石ニ
 似タリ
 後嵯峨天皇寛元二年正月二十一日大井川竭ク其ノ
 異ヲトストアリ此ノ川流ノ貴重セラレタル知ル
 ヲシ
 大堰川系横渡シ所在地 越方 大戸 熊原 産
 部 廣瀬 鳥羽 八木 馬路 宇津根 保津
 其内架橋シタルモノ 保津 宇津根 八木
 保津ニ於テ渡舟ヲ新造スル時ハ領主龜山藩ヨリ
 銀貳枚ヲ給ス修繕ニハ其ノ半額ヲ給ス猶不足ス

ルニ於テ村費モテ出銀ス村人ノ龜山通ヒニハ渡
 錢ヲ要セズ領主用ノ筏ハ御用筏ト唱ヘ半分ハ山
 本ヨリ半分ハ保津ヨリ下ス幕府ノ筏亦同ジ 渡
 舟ニ付千年ニ貫文領主ヨリ下所スル例アリ宇津
 根揚木役所ハ山城國大悲山ノ麓ナル水源地ヨリ
 下ス筏及ビ丹波山國世木殿田弓削知丹大谷佐々
 江其他皆モ此ノ川上ヨリスルモノハ舟筏共二十
 分一ノ運上ヲ徴セリ
 今津ニ改所アリタルヲ寛文四辰九月宇津根ニ移
 轉ス升ハ龜山藩主松平伊賀守ガ築城用材ヲ得シ
 ガ爲ニトノ出額ニ對シ幕府ノ許可アリタルニ由
 ル

保津村

丹波志

嵐ニテ會議
沃定

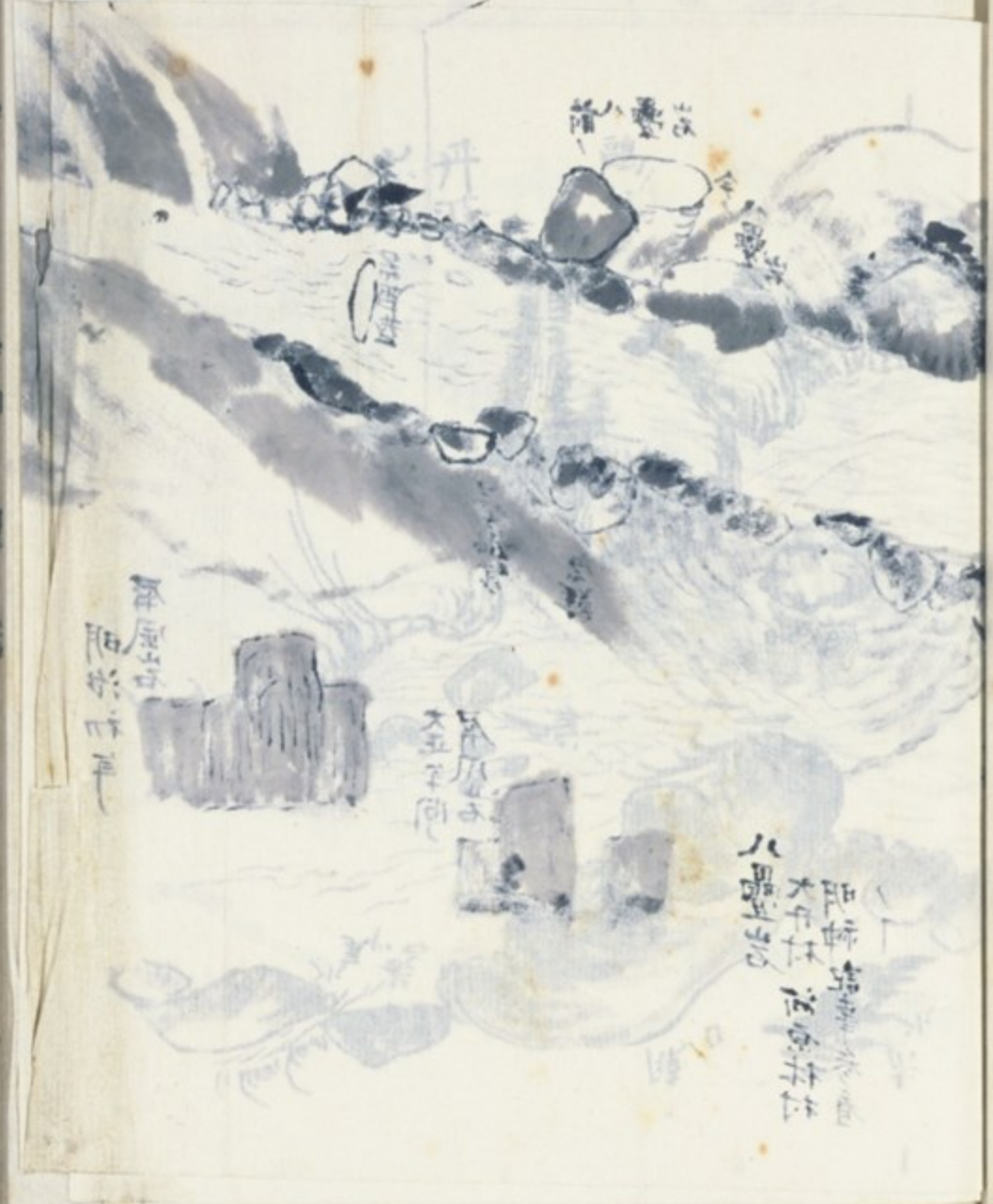
丹波 諸
役人ニ上下アリ上役ハ龜山城主ノ臣コレヲ勤メ
下役ハ村民ノ中ヨリ出勤ス今津ヨリ一人山本ヨ
リ一人ナリレガ保津ヨリモ一人出ルトナリ中
間ニ人藩中ヨリ来リ諸雜用ヲ辨ス此ノ勤番ノ給
米月俸ハ幕府ノ支給ニ係カル運上ハ木ヲ以テ納
ム毎流下スレバ之ヲ番所ノ前ニ整キ檢定ヲ受
慶長御重年棟肆山藩ヨリ撥付梅津挂送候差價十
兩モ今定續永益燬棒棧津若菜通材具後子ヨリ送
本ニ反定ニ賣ル下分年送梅津ヨリ及定辰ヨリ十
及定内番飯ハ米五石大坂城內同金庫ニ納付五分定
濟ノ三敷定役人水定上護シテ享保ヲ大坂ニ送ハ及定内四
及四二分八水上ヲ以テ賃テ終同年保津山本ヨリ嵯峨着十七
及梅津着十七及五分桂着十八及ト定ム

保津村

ニ番所モ毎年兩度ニ開鎖ス
錦襖子知名カシカ俗ニ河鹿ト書ク産地ハ天下中
京都ヲ推ス中ニ就キ鴨川産ヲ上等トシ之ニ亞グ
モノヲ此ノ大堰川産トス嵐山ニ近キ處ノモノ飼
ヒ馴レ易ク川源ニ沂ル程捕獲シ難ク且馴レ難シ
真熊ト稱スルモノ背色熊ノ毛色ニ以テ黒シ之ヲ
上種希品トシ虎色ト稱スルモノ之ニ亞グ是亦虎
毛ニ似タルヨリ名ヅケタルナリ斑文アリ其薄色
茶ノモノヲ次トシ蒼色ノモノヲ以テ下著トス之
ヲ捉ルハ彼岸ヲ好時期トス好事家一籃一笠春色
駱蕩ノ日岩上ニ耳ヲ傾ケテ具ノ聲ヲ再シ或ハ之
ヲ捕ハ愛翫措カ不明治三十年京都ニ河鹿會興レ

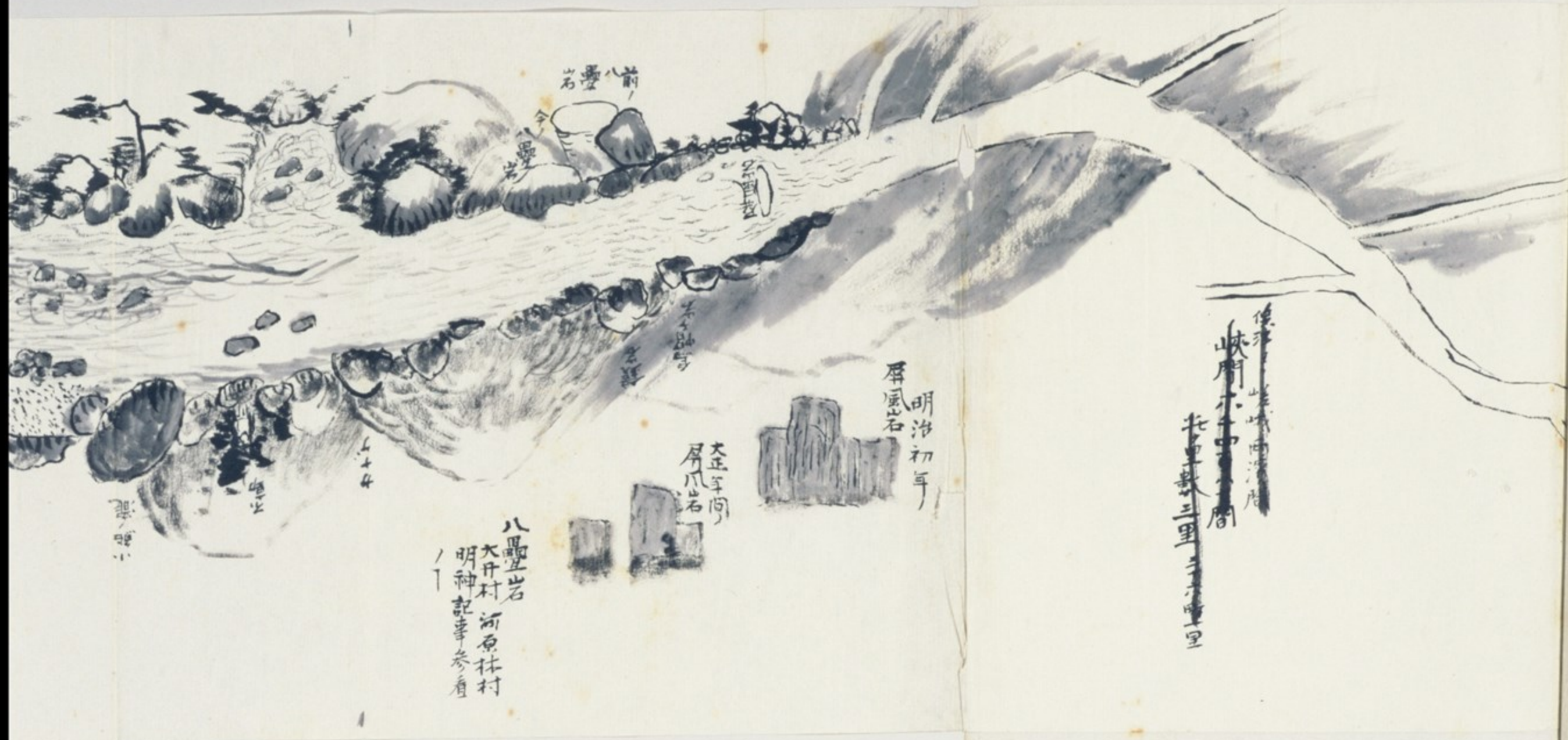
丹波 諸

嵐峽
保津下
舟行三
百源會
奔流疾
兩岸層
中間有
橋稍百
山開山
我聞其
集早海
避風處
春風



ルヨリ此ノ溪中ニ来ルモノ勢カラズ
保津廣ヨリ嵯峨瀆ヲ六千四百八十間三十六所一里ニスルハ三里ト云

京都府立総合資料館所蔵



前八疊石

今疊

石

石

明治初年
屏風岩

大正年間
屏風岩

八疊岩
大井村 河原林村
明神記幸參看

保津川
峽
北里數三里

京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵

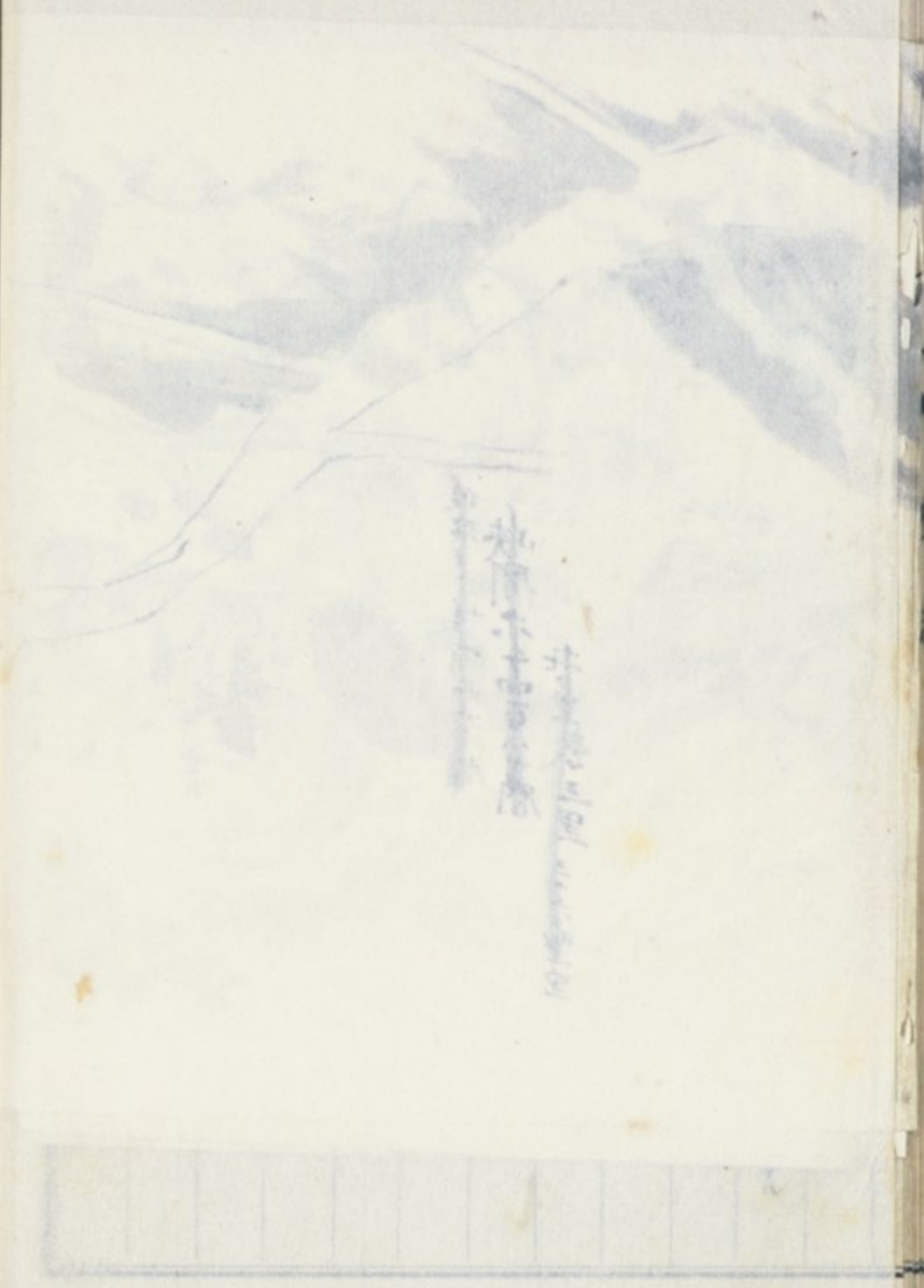
嵐峽行

僧六如

保津下堰水
舟行三十里
百源會一溪
奔流疾如矢
兩岸層岩牆壁連
中間劈開一線天
槽梢百轉無南北
山閉山開勢回旋
我聞其勝欲往試
幾年病癒志未遂
避風惡雨阻滯多
春張寒輿兩不利
保津村



宇津根



今茲孟夏候年晴
 帆舟津頭天欲明
 篙師舵工好身手
 放漚漾々好席平
 溜。揚
 千岩躑躅紅匝匝
 晚鶯喚催新鶻蒼
 雲外嘈噴聞秧雞
 浪中鞞踏有吠鈴
 清境剛與耳目謀
 披豁襟抱消百憂
 愈進愈佳惟恐盡
 送去逃來不遑休
 忽然怒浪當前沖
 飛瀾濺沫激兩膝
 擊舸叩舷洶作氣
 掣電一閃破隊出
 合舟回顧有矜顏
 梅死視作瞿唐看

○橫

激流



似以滿腹猶辱過
 終自押侮如等閒
 過此川面稍覺曠
 往々亂石飛水中
 跳者虎豹卧者羊
 異態無數不可狀
 就中雙峙僅空舸
 相觸非粉幸絲毫
 諸人怖然色不動
 三走出手惟所遭
 有短何來立石崩
 漸近身然斃起
 奇纜少此上西巖
 岩層臘滑不受趾
 異草無土抽細芽
 雨露所濡亦着花
 童僕攀攀尻接首

保津村

第一險所



寒得宿根喧相誇
向未哀樂雖屢變
逐段新奇不覺倦
敢言勝槩曾飽更
宇宙乃復有許選
劉源九曲定何如
三十六灣興先踈
狹道神奪忘饑渴
顧問行危壘已虛
橫橋出迎是何處
徑抵嵐峽日未午
川靈解憐我輩狂
偶使蓄懷得傾吐
既歸相戒莫必再
從來快事忘多取

而岸詩以記之
岩嵐山下早買舟
泝堰河至保津

曾聽堰水源岩聲殊秀絕
投宿嵐山下買舟候曉發

第二險所



湖流入此溪左石山峭崿
石亂雲氣浮崖欹樹根裂
良之細麻繩牽舟凌激明
經潭破青藍上湍蹴白雪
避石工解閃撐竿後屈折
長年意何安遊客魂褊慄
近于到保津龜山城安元
酌酒淺沙頭流斯稍曠濶
歸舟忽回棹瞥然如盜劫疾
溪管聞乍遠岸花見忽失
未時艤苦處千層未一抹
歸到嵐山底花開勝昨日
看花又到暮斯遊興何息
潮嵐峽梁雷岩



保津村

瀧水穿雲曲折通
岩花開遍映山紅
舟行着色屏
風裡人在回文錦字中

保津村



舟湖荒峽 遠山云如
秦火當年何得焚 細黃化石蘇成紋
一篇提氣山靈借 必是人間未讀文



保津村

鐵橋



嵐峽



伊藤仁齋ハ旅行スルノ至ツテ少キ人ナリ儒者
 ニシテ斯ノ如キハ珍ラシ其ノ經過スル所ハ大坂
 奈良水口ノ三所ナルガ保津舟遊ハ好ニデ試ミタ
 ルモノナリ仁齋ノ前ニ惺窩アリ角倉貞順ノ勸誘
 ニテ来遊シ其ノ絶勝ニ過ラ毎ニ命名シ到ル處歌
 フ詠セリ貞順ハ了意ノ子ニシテ其ノ弟子タリ惺
 窩命名ノ所ハ大瀬ヲ浪華隈トシ猿飛ヲ叫猿峽ト
 シ鷄江ヲ烏丸灘トシ書物岩ヲ群書巖トシ鷹巢ヲ
 觀瀾盤陀トシ屏風岩ヲ石門関トシ又蒙山ナル新
 名所ヲモ撰ミタリ惺窩本名藤原敏夫世間ソノ道
 徳生先ナルヲ稱シテ風流志操アルヲ没却ス
 氷るる筏乃檣乃舟のゆぐれはとらやこころほつ山杖西行

保津村志

保津峽舟中作

真平素 通稱光之助龜山藩主

嵐山空篋重放棹風津東你楫千春際
一瞬中經空澗水碧目送落花紅
忽認多降之驚身出字只

保津渡記作

皆山人 保津皆山龜山醫

砂痕數尺流亭波沫柳夕跡
始不多聖艇時々吹反而去
去來人取假撈過

遊保津川記

山田梅東 山城八幡橋本儒

名六敬直字八其正
明治八年正月没八十歲

水也者動而周流不息者也石也者靜而剛堅不磷者
也以周流不息值剛堅不磷是以觸為波擊為飛沫激
為狂瀾怒濤其為態也淺澗玉碎雪蜚其為聲也滿壑
雷吼虎嘯洑而為瀨急而為湍為激奔而為灘懸而為
瀑布為水簾皆水石相值之狀也故水非石不成態石

亦假水以成趣砥柱之迴瀾石鐘之聲龍門呂梁之艱
險皆是物也嗚呼天下之至奇孰若水與石哉天下在
々處處有水有石而奇者鮮矣其奇多在邊境僻地若
余老懶不能寓一目近京師而奇者二曰宇津曰保津
余弱冠嘗自石山沿流出于宇治鑿水石之奇觀至今
不忘如保津渴想四十年未果一遊焉而辰之冬徒二
客買淡藏湖大堰經大悲閣下自是以西流益疾石益
多輓率三牽百丈一長年執篙在船首過石撞之石皆
有篙眼九船上下者各撞篙眼左右以避一篙若誤則
船忽破裂長年手熟左右舞篙如飛鳥遷樹篙細徑寸
撐石以屈如弓而不折猶之庖丁解牛遊又有餘地矣
其巨石立中流飛瀾激射者為觀瀾石灘急而水響嘈

保津川記

一丹波記
吟聲人騰波散花者爲浪花灘既而豁然峽闢水勢稍
平傍岸如蓮華者爲蓮華巖其清澗川入峽處爲猿叫
溪穹環而峻嶽飛可踰其崖石裂紋層々如積書冊如
群書巖次爲石門關丹人呼之屏風巖屈曲似摺屏又
類門扇次爲鳥船灘一名鷓鴣河即水尾川入峽處峽
中之至奇者止於茲遂回舟下奔流駛若飛箭瞬息間
運大堰余顧二客曰百丈牽船著力僅進少急則退吾
於是曉學之難進易退則衆流如飛欲挽回而勢有所
不能吾於是知急流勇退古罕其人也水石相搏飛沫
起瀾峽窄石多而流迅峽瀾石稀而水平吾於是悟文
詞有波瀾開闔抑揚之法也而是猶未也折石之靜者
仁之體也剛堅則剛者之中立不倚也不磷則廉士之

於石也水之動者智之用也周流者教而不倦也不
息則學而不厭也觀水與石如是然後始可謂吾輩之
遊已矣二客曰善

初花やふととハ餘江の空解水 監水

岩つしうつる新大井川とみちをよむ 陽くともえの 冥保

保津川 四月八日至八月望榊舟查御廻 篠崎小竹

桂河源遠若銀河八月尋來仙興餘可恨漲流秋未落
天孫不許借星槎

兔鳴多き

やよ如子梅とまゆ水を保津川乃岩根のさくらんりなり

清水産負歌詠話中京都ノ一大割烹家ヨリ得タル

丹波記

香魚ノ話

香魚ハ地方ニ因テ味ヲ異ニシテ并マス吾ガ洋食
 和食中保津ヨリ取レタ香魚ヲ食膳ニ上セマスガ
 保津香魚ト申シマスト中々手ニ入り兼ネマスニ
 三日前カラ注文シテ置カヌト間ニ合ヒマセ又此
 ノ保津谷カラ参リマスノハ一尾十六七銭(四十二年ノ相庭)
 テ保津沿岸ノ漢夫ガ捕リマスト直ッレヲ桶ニ入
 レ人夫ニ荷ハセテ桶ニ清水ヲ混ハトブ言ハセ
 ナカラ奔リ所々ニテ清水ヲ入換ヘツ、數里ノ山
 路ヲ走リ来ルノデス少シデモ休ミマスト香魚ガ
 直ト鼻ヲ撲キ弱リマスノデ足ノ速者ナ者ガ走リ
 ツメルノデス友釣ガ其ノ中デモ美味デス胃ノ中

ニ青イ藻ノアルノハ格別デス 江州和通ハ次ニ
 ナリマス北陸カラ来マス氷漬ノハ一尾五六銭ト
 テモ食膳ニハ上リマセ又料理ハフライガー番デ
 ス

乙未春二月赴丹波龜山買舟下嵐峽

歸京憶其奇勝作詩以記

皆川 淇園

始閱嵐峽勝物色天下奇入峽水屈曲絕壁擁兩涯雲
 木相參錯薜蘿萬古垂舟路多幽暗亭午日纔窺迎送
 翠飛動行々山愈峻頽岩與崩石都皆含異姿近看尤
 可怖數仞仰狂獅兇走象又踣其餘類鹿麋西虎中流
 起筆牛勢參差潛恠亦數十群然導伏螭就中灘六七

絕險使人嘔迅湍似電掣而耳坐生水勢元柔弱突元
怒嶮巖殷々萬雷吼碎破碧瑠璃忽堆滿川雪衝折復
逶迤長篙失一撐誤躡成粉糜挖工良辛苦櫓人眼不
移兩岸青黃走百里一瞬馳歸非不快每生慄危追
憶援筆寫心迹惜如錐

唱蟾上人要余遊嵐峽抵寶珠津舟中
記矚目五絕句

梁川星巖

情得高工遊峽川人生何適不隨緣也知大道本無二
蓬披伽黎同一船薰風吹送上灘船雷吼聲中百丈牽
好是殘櫻花已盡青山綠樹子規天龍水穿雲曲折通
巖花開遍映山紅舟行着邑屏風裡人在回文錦字中

冷々不盡更冷々不啻山靈溪亦靈此是釣天小廉樂
風裳水佩夢中聽回風飛雪泉掀舞臥虎跳龍石倒奔
過盡艱危始安穩人烟一簇寶珠村

游日本保津川聯句 明治四十四年

清人康有為 梁啟超 京更生 梁令嫻 桂妹 桂妹

清晨訪嵐山 更生 曉巖 游目 有為 微陰兩乍晴 啓超

一棹破溪淥 有為 紺碧瀉湍溜 更生 捲白轟聲谷 啓超
峽窄怒雷雨 更生 林穿翻驚瀑 令嫻 駛下投飛鳥 更生
雪浪奮相觸 有為 俯視墜迴瀾 啓超 旋迷入真浪 更生
翻疑天不仁 極意恣顛覆 有為 橫流絕險處 百步得九
曲 啓超 縈陣立鴉鵲 夾派爭搏伏 更生 懸崖鐵匣截 桂妹
石衣纏薜蘿 巖帶隱躑躅 令嫻 時有幽棲人 於此結茅

屋有為渙者躡危石一竿已自足更生幽尋不記里景
 好恨舟運有為行々度清澗花橋岸腹若起楓葉與櫻
 樹攬天綠若起我未惜非時只看萬條竹更生杉色入
 雲青杜宇聲斷續有為小樓倚岷城泉聲夢鳴玉更生
 倚欄紅袖衫若起誓洗愁十斛若起中牟洲東山遠滴蘓玉
 局奇蹤遍筵外蒼生望久屬有為謂言大九州數周歷
 重複每逢江山勝耽遣思遺俗若起浩蕩洗我心清泉
 可以浴回首望故山關雲埋萬木未忘人間世仍掃塵
 中躡故人攸嘉會勝遊記寶錄更生
 風穴受名道ナル不動瀧ノ上ノ北方ニアリ熱時
 二冷風ヲ吹キ揚ル船井郡麻氣村ノモノニ同ジ此
 ノ處ノモノハ麻氣ノモノ程ニ語ラレズ

孝子六之助ハ南保津ノ産ニシテ寛政二年褒賞セ
 ラル時ニ年二十九
 丹波興作物語 村人ノ口碑ニハ豪農桂興三兵衛
 ノ家ノ事トス世々忠誦ヲ以テ長子ノ名トシ孝治
 ヲ以テ次男ノ名トシ家名ヲ相續スレバ興三兵衛
 トナル僕ヲ雇ヒ入ルレバ一ヲ八藏トシ一ヲ市藏
 トス他ハ各自ソノ者ノ實名ヲ呼ブ是等ハ興作ノ
 傳話ト關繫アルモノトス而シテ傳話中ノ興作モ
 幼名ヲ忠誦ト呼ブニ付其ノ家ニ就キ之ヲ問フニ
 事實ナラズトシテ全部ヲ否認ス然ラバ著作者近
 松門左衛門ガ考案ヲ此ノ舊家ニ起コシ事ヲ誇大
 ニシ詞ヲ家曲ニシ一部ノ小説トナシタルニヤ興

京都府立総合資料館所蔵

作ノ名今モ丹株トシテ存ス別項保津川記事ヲ参
者マバシ其ノ劇ニ登ス筋書ニ三種アル中ノ一種
淨瑠璃本ヲ摘録センニ
丹波國ノ一城主ナル由留木景氏ノ湯殿見シラバ
ノ君ナル幼女ガ東ノ高家ナル入間氏、興入スル
ニ始マル入間家ノ大臣本田彌三左衛門迎ヒニ来
ル 興作ノ妻ナル童ノ井ノ子興之助盜罪ヲ犯シ
テ露ル 本田情ヲ酌ミ之ヲ放ツ 童ノ井之ヲ呵
責ス 童ノ井ハ伴連興作カ由留木ノ大臣タル時
自分眞女中トシテ見初メ通ジテ興之助ヲ産ミタ
ルナリ 由留木ヲ逐ハレ道中馬丁トナリ博奕ニ
負ケ馬ヲ盗ム 興之助ハ馬追ニ吉トナリ道中雙

六ヲ語り物トシテ銭ヲ乞ヒ草臥レテ空籠ヲ見テ
其ノ内ニ眠ル 興作ハ盗人トシテ逃匿シ其ノ駕
籠ニ潛ミ親子トハ知ラズ大名ノ路銀ヲ盗ノト勸
誘ス 関ノ小萬女郎ハ父ガ石ニ斗ノ未進ニテ
入牢スルヲ苦ニシ興作ニ語ル 小萬モ父ノ爲ニ
罪ヲ犯シ興作ニ扶ケラレ其ノ籠中ニ在リ 興作
守リ袋ヲ小萬ニ托ス 小萬モ情ノ爲ニ死ヲ共ニ
セシトスル所ヲ由留木ハ引取ル 馬主ハ藏ハ馬
ヲ盗マレタルヲ怒リ相見テ打ツ興作之ト幸フ
小萬走り出テ具ノ中ニ入り貯金ヲ八藏ニ渡ス
興作ハ道中雙六物語ヲ爲テシラベノ君ニ聞カセ
ル 實母童ノ井ハ君側ニアリテ自分ノ子ナルヲ

京都府立総合資料館所蔵

知ラ又風シテ金ヲ與、忍泣シテ立テ別ル 鷺坂
 左内ハ與助ノ故朋輩 今ハ大臣トシテ姫君下向
 ニ附キ此處ニアリ 其事情ヲ知悉シ室ノ井ノ心
 情ニ感ジ五拾人扶持下賜ノ命ヲ傳フ 八藏切害
 ノ罪モ赦ナルナド複雑ナル仕組ナリ東海道中ノ
 馬士頃 馬ハ辰ツタカ典作ノハ遅イノウコレ聞ノ
 小高カ留ノタノカラ、サホシマニサケビヤニハ
 一説ニ曰ハク奴ハ萬ハ女依ナリ演劇ノハ萬ハ於
 聖ノ下ヲ假作セルナリ於雪ハ大阪長堀ノ豪高某
 ノ妾出ニシテ知時具ノ族ニ好氏ニ子養セラレ長
 ズルニ及ビ養父ノノ聲ヲ迎フ於雪ソノ尪弱ナル
 ヲ嫌ヒ肯シマズ因リ自誓ヲ生涯夫聲ヲ迎ヘ必ト
 父母死シ家ヲ嗣ケ任依ノ性家産ヲ顧ミ必書画ヲ

柳里恭ニ擊劔ヲ体術ヲ夫々ニ學ブ家婢ニ阿龜阿
 岩アリ共ニ勇力絶倫ナリ阿雪出ルニ常ニ從フ賊
 ニ逢ヒ之ヲ仆ス具ノ他奇怪ノ行爲ウカラズ禁中
 ニ入り長局ノ書記トナル秀次ニ百年忌ヲ修メ大
 佛殿ニ寄附ス文化三年市中ニ仆レ死ス年七十八
 ニ女ヲ合葬ス(大坂出泉寺ノ墓地) 常ニ棺ヲ門ニ懸ケ衆
 ヲ會ヒテ大歎ス
 桂村上石川長尾永井ノ五名ニ對スル領主ヨリノ
 待遇ハ臣屬中ノ中等以上ノ禮ヲ以テシ新年ノ謁
 見式又ハ非常召集ノ際ニ之ヲ行ヒ維新前國家多
 事ノ際ニハ藩士ノ不足ヲ補フニ五名ノ壯年者ヲ
 以テシ大手城門ノ守衛ニ當ラタレトモアリ五名
 中ニ家督相續ノ下アルニ於テハ相續人ヲ定メテ

京都府立総合資料館所蔵

出願し藩主ノ許可ヲ得ルナド恰藩士ノ資格アル
モノ、如シ左ニ示スハ其ノ一例ナリ

南保津村 桂 忠彌

其方俗今故不替其儀以多一々々付家柄之通
苗字亦ニ常帶刀馬之可立之要是迄勤功而
以盡礼極事 仰付有之々々儀事 仰付之

天四月

南保津村 左甲郎

其方俗亦逐々様以々々々父方右所門同様
苗字也所帶刀馬年馬之々

子 十三月

常帶刀トハ平常ニ兩刀ヲ佩グルトヲ得又式日ニ

ハ紋服上下ノ着用ヲ爲ストヲ得其ノ家造ニ於テ
表門云関破風懸奠ヲ設テ得ルト勿論ニシテ通常
人民ヲ呼フニ其ノ臣下ヲ呼フニ同ジク敬稱ヲ用
ヒ不呼流シノ方ニスルヲ得ル之

今其ノ五箇ノ顛末ヲ演マントスルモ紀文具ハテ
不其ノ傳説ニ據ルノ外無シ口碑ニ曰ハク鎌倉霸
府時代ニ當リ草寇處處ニ起コリ良民コレガ爲ニ
安堵ノ思ヲ爲ス能ハズ此ニ於テ本村ノ年寄連名
ノ願書ヲ以テ統治者ヲ下シ給ハラントテ奏請セ
シカバ朝廷其ノ請ヲ容レ春木入道々善ナルモノ
ヲ差下サレタリ入道ノ人トナリ善良温厚ニシテ
武断アリシト見ヘ人民ノ宿望ニ副ヒ一村ヲ統治

京都府立総合資料館所蔵

シテ其ノ信用ヲ得遂ニ領主タル資格ヲサハ博シ
得テ奔シテ天桂院殿圓應觀道善大居士ト稱號
セラレ五輪ノ塔ヲモ建テラレタリ位牌ハ文覺寺
ニアリ卒去ハ壽永ニ癸卯年七月二日是レ實ニ五
苗ノ祖タリ然ラザレハ間接ニ五苗ノ原トナレル
ナリ自後五苗ハ箕裘ヲ断エセズシテ継續シ行政
聽訟斷獄ヲ掌リ兵事ニモ關涉シ天武ノ頃ニハ八
木城主内藤備前守ノ旗下ニ屬シ一方ノ重鎮トマ
テ成リタルハ左ノ感狀ト口碑トニテ傳ハル其ノ
以前ハ足利氏ノ幕下ニ參シ功績ヲ立テタルトア
リ足利氏ノ重臣ナル細川氏ガ此ノ國ヲ領スルヤ
亦其ノ臣隸トナリ軍役ニモ出デタリト見エ左ノ

感狀アリ又舊來五苗ニハ諸役免除ノ特典ヲ得テ
次ニ出ス圭形ノ札ヲ門戸ニ掲ケタリトテ其ノ札
今猶存在セリ

色々々出張り各其談生働まふ於忠亭云
下、慶長ノ終由是言也

三月十四日 高田 為

今度於丹波別命地粉骨由志神如彌乃常肝
要ハ終由是言也

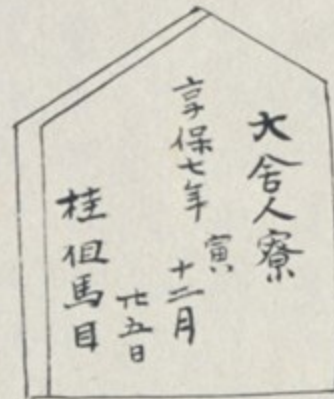
五月十四日

高田 為

傳傳

誌傳中

桂大舍人犬屬



一
冊
渡
識

五苗か大舎人寮ニ出仕シ其ノ僚屬タルノ由緒ヲ
以テ右ノ札ヲ得タルナルベシ

内藤彦五郎ナルモノハ八木ノ内藤備前守一類ニ
シテ室町家ハ出頭ニ丹波衆ノ取次役ニテモ勤メ
タル者歟

馬路村ノ大芝原新田ニ於テ内藤勢ト戦フタル時
ニハ五苗ノ勢力最盛ニシテ八十騎ヲ繰リ出ダセ
リト云フ内藤トハ敵トモナリ又味方トモ成リタ
リト見エ升ハ戦國ノ常態サモアリナン

今度下丹波國桑田郡桑田何々合戦ノ時各加勢
多クは頼朝ノ子孫トシテ討捕ノ事名々傳ハ
列子孫永く守傳ハ控内度了免可也此ノ事

京都府立総合資料館所蔵

一冊 渡 論

證

天文十八年七月廿日

因 貞 西

村上

榎

長尾 隆一 統中

光秀入國ノ隆木練ノ枚ヲ贈リタルニ對スル謝状
ナリト云フ御家流ニテ能書ナリ華押ハ光秀ノ自
署ナルベシ

天文十八年七月廿日

本練ノ榎
臥臥多祝
在詠志堂
他、
光秀
村上紀伊ノ版

三寸四分

大阪ノ役ニ片桐且元ヨリ加勢ヲ京都所司代板倉
 勝重ニ乞フ勝重軍令快ヲ丹波ニ下シ村上三右衛
 門吉正ヲ催促ス時ニ吉正鹿谷柳花井倉奥條ヲ支
 配セシカバ其ノ地ノ民兵ヲ率ヒテ到着シ東軍ニ
 馳セ加ハレリ村上三右衛門ハ當所ノ村上ナルベ
 シト云フ
 徳川幕府ノ時ニ至リテモ平常錢砲(カ銃)六十挺使
 用ノ權ヲ公許セリ弓銃替古場ヲ營築シ之ニ從事
 シ龜山藩領トナルニ及ビ藩ヨリ常ニ撫育シ軍務
 ニ使用シタリ 龜山藩ヨリ常威錢砲十三挺獵師
 箭ニ挺ノ許可ハ農業助成ニ係カル所ニシテ右ノ
 外ニ在リ村民ハノ許可タリト知ルベシ 五苗ハ

文武ニ於テ馬路村ノ兩苗ニ讓ラザルモ領主ノ爲
ニ勤メタルノミニテ天朝ヘノ勤ナカリシカバ賞
典ニ與カルノ榮ナカリシナリ
村工半山醫ニシテ儒詩文書畫ヲ能クス

文覚上人



遺セル蹟ハ鮮少ナラズ而シテ死所ハ流竄地ナル
隱岐トオヤ本村愛宕道ノ山中ニ石造ノ不動佛ア
リ上人行迹ノ迹ト云フ數丈ノ溪底栂柏繁茂シ晝
尚昏シ不動ノ像ハ石面ニ彫刻セラル此ノ所ニテ
上人カ修行シタルハ少年時期ニテ當村居住ノ折
柄ナルベシ
文覺上人俗稱遠藤武者盛遠ハ北面武士左近將監
遠藤武者盛光ノ一男ナリ父盛光六十一歳母某四
十三歳ニシテ一子カニ無シ夫妻相議シ之ヲ觀音
ニ祈ラシト志シ數日ノ暇ヲ乞フテ長谷寺ニ詣デ
參籠一七日夜ニシテ夢ノ告ヲ得歸丹ノ後ニ胎孕
シ月ヲ超エテ生レタルヲ盛遠トス母ハ産後ニ死

スルヲ以テ盛光コレヲ養育スルニ因ニ春木次郎
道善ニ托シテ之ヲ當村ニ送ル道善ハ盛光ノ朋ナ
リ而シテ盛光モ亦三年ノ後ニ卒ス盛遠モ今ハ孤
獨ノ身トナリ只管道善ノ恩惠ニ生長セシカ色黒
キヲ以テ黒童九トハ呼バレケル稍長ジテ心シブ
トク聲飽ク迄高ク我儘放埒到ラザル無ク或ハ庄
内ノ童ヲ催シ墮ヘテ野山ヲ走り廻リ畠ヲ荒ラシ
牛馬ヲお擲シナドスルヨリ近隣ノ者ニ厭ヒ嫌ハ
ル其ノ春木殿ノ御内人ト言フ計リニテ遠慮スル
ヲ善キ丁ニ思ヒ惡行日ニ月ニ增長シ夕リ然レ氏
父母ノ話ヲスル人アレバ之ヲ聞キ往々涙泣シ道
心ノ崩シヲ爲セリ十三歳ノ時ニハ已ニ壯者ヲ凌

ケ程ノ體量ナリシカバ元服サセントテ一族ノ遠
藤三郎遠光ヲ呼寄セテ烏帽子親トシ父ノ一字ト
三郎ノ實名一字ヲ採リ盛遠トハ呼バセケル京都
ノ公家梅小路中納言長賢卿ハ春木ト由緒アルモ
ノカラ此ノ卿ニ依リテ出願シ父ノ遺跡ヲ逐フテ
上西門院ノ北面ニ參セシム十七歳ニシテ身長七
尺五寸力量倍々加ハル此ノ時ニ當リ難波大川ノ
橋出来シ橋供養行ハレ警固ノ武士出張ノ下アリ
盛遠撰マレテ出役シタルニ一美婦ヲ見テ戀々ノ
情ニ堪エズ人シテ具ノ跡ヲ追ハシメタルニ圖ラ
ザリキ親族中ナル源渡ガ妻ナラントハ婦ノ名ハ
袈婆ニテ盛遠ノ伯母衣川ノ娘ナリ盛遠家ニ歸ル

ヤ否ヤ伯母許往キ彼ヨリ奪フテ我ニ與ヘヨト迫
ル衣川貝ノ無法ナルヲ以テ拒絶セシカバ盛遠俄
ニ殺意ヲ起コシ衣川ヲ殺サントス衣川コレヲ推
シ止メ免モ角袈裟ニ具ノ意ヲ通ゼントテ之ヲ呼
ビ寄セタルガ盛遠愧ヅル色モ無ク切ナル志ヲ叙
ベ伯母ヨリモ枉ゲテ具ノ意ニ從ハ然ラザレバ我
モ汝モ命ヲ失ハント言ヘリシカバ袈裟ハ初ノ程
ハ聞キ入ルヤクモアラザリシニ今ハ否ムニ由無
シトテ渡ニ言フ様妾モ夫ノアル上ハ君ノ言葉ニ
應ジ難シ妾ガ爲ニ吾ガ夫ヲ無キモノニ仕給ハ然
ル後ニハ君ノ御心ノマナリトテ期ヲ約シ夫ノ
臥戶ノ模様ヲ委シク物語リ仕損シ給ヒソト誠シ

母
披
志

ヤカニ語り伯母ノ設ケタル酒ナド酌ミカハセテ
ツ別レケル渡ハ何ン條斯カル企ノアリト知ルベ
キ一夜妻ト心ヨク酒ヲ飲ミ夜深ケ醉ラ帯ビツ
、寢ニ入ル盛遠期約ノ来ルヲ今ヤ遅シト待楫ハ
夜深ケ人定マリテ渡カ家ヲ覗ハバ袈裟ガ言ヘリ
シ如ク南面ノ戸ハ片扉開カレ行燈ノ火影ホノク
テク寢間マテ進メバ二人共熟睡ノ様ナリ仕合セ
善シト腰ノ一刀抜キソバメ袈裟ノ敷ヘシ如ク渡
ノ頭ト思フ壺ヲ手練ノ頭ハセバツサリ一打ナ具
首提テ之ヲ捨テバヤト外へ出テ月影ニ透シ見レ
バ是ハ如何ニ男ノ如クニシテ男ニアラス女ノ如
クニシテ具髪短シ訝リウ、モ夜明ケテハ事面倒

ナリト首ヲ野中ノ泥ニ埋メ自宅ニ戻リテアリケ
ルニ遽タシクモ急使アリ袈裟ハ何人カニ殺サレ
タリト伯母ト渡ヨリノ報知ナリ盛遠且驚キ且訝
リ往キ見レバ男装シタル女ノ死骸ハ衾上ニ横ハ
シリ懐中ニ遺書アリ辞ハナハク酸楚ナリケレバ
失脚後悔迷戀痛困一時ニ盛遠ノ躬ニ湧キ何トモ
辞ノ出ツベキヤ暫クアリテ盛遠ハ渡ニ白ヒ前日
ヨリノ一伍一什ヲ物語リ我ガ首ヲ差シ延ベタリ
テサセヨト請ヒ渡ガ前ニ己ガ首ヲ差シ延ベタリ
渡モサル者コノ場ニ臨ミ何ンゾ踟躕セシ佛心忽
然トシテ起コリ是モ因果ノ理法ナラメト自悟リ
テ黒髪アフトト指添ニテ加レバ盛遠モ何ニ後ル

バキト亦自ツノ髪ヲ断ツ二人ノ心ハ期セシテ
道念トナリ修羅ノ妄執ニ遠離シテ二世安樂ノ首
途ニコウハ就キニケル是レゾ元服シタル翌年ノ
トトカヤ鳥羽ノ憲塚ハ盛遠カ築ケル袈裟ノ墓ナ
リ
二人ノ今道心ハ京都ノ東ナル黒谷ヲ音ツレ名ニ
シアフ法然上人ニ乞ヒテ弟子トナリ渡ハ渡阿彌
ト呼ビ得度シテ長玄ト名^{阿彌}ケラレ盛遠ハ盛阿彌
ト呼ビ得度シテ文覺トナリ又長玄ハ一生不退ノ
僧トナリタルモ文覺ハ意識頑強ナルヲ以テ慶化
ニ富ムノ一生ヲ開キ史上ニ具ノ跡ヲ留メケル文
覺ハ意識強固ニシテ一度思ヒ込ミタルトハ遂行

セテハ濟マサヌ人ナリ學術ヤ宗教ニハ縁遠キ人
ナリ茲ニ於テカ師ニ隨フテ讀經念佛スルモ安心
慰情ノ境ニ入ル能ハガルノミカ意識終糾シ誰念
湧起シ成佛ノ階梯ニ入ルヤクモアウガルヲ懐ヒ
古佛祖師ガ難行苦業ノ跡ヲ踪ネント所々ノ瀑布
ニ折タレ深山幽谷狼狽ノ棲處ニ坐臥シ猶歎ラズ
トテ師ノ房ヲ辞シ紀州那智ノ瀑コソハ苦鍊荒行
スルニ適當ナラメトテ之ニ赴キ大聖不動明王ノ
秘呪ヲ唱ハツ、身ヲ流壺ニ立テ日夜續行シ爲ニ
生命ヲ失ハントスルト幾回ソノ都度自得感應ス
ル所ヤアリケン數日ニシテ性質一變シ檀波羅密
ノ行者トナリ拔苦與樂ノ弘誓ニ心ヲ用ルトトハ

波羅密志

ナレリ
忠節無二ノ和氣清麻呂公ヲ害セント企テタル弓
削道鏡ノ毒手ヲ宇佐八幡大神が加護アリシトテ
名附ケラレタル神護寺ハ大破シ公ト深キ因縁ア
ル本尊薬師如来ノ名像モ哀レ墓無キ物寂シクナ
ルヲ見テ文覺ハ一大行願ヲ起コシ大幟ニ高雄山
神護寺再建奉加云々ノ數文字ヲ書キ雨露霜雪ハ
抑カハ炎天燬カカ如キ日モ霰ホナ路氷ル夜モ町
々过々ニ大音聲ニモ喜捨募集ヲ行ヒツ、遂ニ院
ノ御所迄住持寺殿ニ参リ御奉加有ルベキ由聲高ラ
カニ呼ハリ再三ニ及ベドモ答アル者無ク折節御
奥ニハ管絃ノ御遊アリテ月卿雲客貝ノ技能ヲ振

ノ最中ナルヲ憚ラズ奥庭ヘト進ミ入り立テ乍ラ
申ス様ハ、這ハ珍ラシカラヌ御遊カナ先程ヨリ
高雄山神護寺再建ノ御奉加ヲ願ヒ奉ルニ取り次
クモノ無キハ何事ニテ候ヤ斯ハカリ愚僧ガ修
行致シ歩クモ佛法住持王法祈誓衆生利益ノ大願
ナリ況ニヤ大悲大慈ノ君十善萬衆ノ主トシテナ
ドカ容易ク御奉加聞コシ召シ入レラレズ口惜キ
御事ニテ候大願ノ意旨聴聞アラセラレヨト懐中
ヨリ勸進帳取出シサツト推シ開キ破鐘ノ如キ聲
張揚ゲ讀掛ケタリ一座大ニ白ラゲ可惜御遊モ不
興ニ終ラシトスルヲ見テ堂上ヨリ北面ノ武士ハ
無キ乎狼藉者取り鎮メヨトノ命アリハテト出

京都府立総合資料館所蔵

テ来ル武士ハ文覺ヲ見テ一言ノ本ニ呵リ疵ハセ
ントスルモ勤カバコソ冷眼冷笑屑トモセ不併シ
ナガラ多勢ニ無勢如何ンバスル能ハ不檢非違使
廳ノ人等ノ爲ニ取り押ヘラレ遂ニハ縛セラレ使
ノ廳ハ移サレシトスルニ臨ミ文覺ノ肉親ナル某
ニ一面ニタキ望ヲ懇請シタルニ某ハ今現ニ使ノ
廳ノ高官ナレバ指吏ハ其ノ旨ヲ其ニ通シ密會ヲ
爲サシメシカバ某ハ文覺ノ暴舉ヲ責メ且ソノ意
中ヲ問フニ文覺ハ自分ノ罪ヲ詫ビモセテ大ニ天
下ノ形勢ヲ論ジ嗟カ小嶋ニ流人トナリテ味氣無
ク月日ヲ送り玉ヘル源頼朝コソ天晴レ日本ノ大
將タル器量ヲ具ヘタリ君モ愚僧モ藤原氏ノ庶流

ニシ名門ナレバ強暴非道ナル平氏ニ臣使セラレ
バキ御邊ハ法皇ノ御側ハモ出テラレト聞ク願
クハ愚僧ノ微衷ヲ吹聴シ上げラレヨ愚僧ガ法皇
ノ御遊ヲ妨ゲ宮廷深ク入り込ミタルモ別儀ニア
ラズ事ニ寄セテ御側ニ近ヅキ奉リ微衷ヲ内奏シ
奉リ御墨附ノ申シ下シ竊ニ伊豆ニ下シテ寇武者
ニ旗掲ゲサセ驕ル平氏ヲ一舉ニ打テ仆サントノ
企ニコソト縷々真心籠メテソ語ラヒタル某ハ始
終黙聴シテアリケルが大ニ感ズル所アリ幸ニモ
僧衣ヲ着スルモノカラ密々ニ携ヘテ法皇ノ宮ニ
詣リ機密ノ候ハバ御直ノ拜奏ヲ出願ニ及ブ法皇
ノ御事トテ御心易ク召シ入レサセ玉ヘバ文覺ハ

一目見上ゲテ感涙ハラト流シ一言モ出タシ得
不肉親某ヨリ御紹々申シ上ゲ文覺カ所存ヲ御取
次致シ清盛ノ惡政君上ヲ蔑ニシ人民ヲ苦シム今
文覺ヲレテ恐多クモ御前ニは候スルヲ得セシム
ルモ列朝在天ノ靈ガ詔皇ヲ此ノ為厄ヨリ救ハセ
玉ハントノ御手引カモ知レズ哀レ愚僧ガ一片ノ
忠誠ヲ鑿照アラセテレ一行ノ詔宣ヲ下シ賜テバ
之ヲ愚僧カ遠流ノ地ナル伴豆ニ持テ下リ折見テ
流人頼朝ニ手渡シ仕ラシ右兵衛佐頼朝ハ年ヨソ
弱ケレ源氏ノ觸頭トシテハ天晴ナル手柄致サン
ズル人物ニテ社候ハ御敵ナル六波羅方ヲ滅ホシ
陛下ノ玉體ヲ安レジ奉ラシテ疑無ク候ト奏シテ

ルニ後白河法皇モ此ノ言葉ニ感動アラセラレテ
暫シカ程ハ黙然トシテ宸襟モ爲ニ露ニ露ヒシガ
頓テ一通ノ内教ヲ草シ玉ヒ某ノ手ヨリシテ文覺
ノ手ニハ渡サレ又此ノ度ノ一務秘メヨトノ御詞
モ添ヒ又法皇御坐ヲ起テ玉ヘバ文覺ハ濕ヘル眼
モテ遙ニ見送り奉リ某ト後車ノ手合ハセナドシ
勿々ニ御門ヲ出テ去リケル文覺ハ京都ニテノ望
ハ達シ又今ヨリハ一日モ早く頼朝ニ接近スルノ
機會作ラバヤト自ラ使ノ廳ハ出デ一日モ早く流
刑ニ處セラレヨト乞願ス同刑ノモノ數人一船ニ
舟乗セ役人コレヲ警固ニ海上幾多ノ辛酸ヲ喫シ
テ伊豆ハ着船セシカバ文覺ハ便宜ノ所ヲ尋ネ一

寺ヲ借り受ケ日夜放教ヲ説キ化導ニコソハ勤メ
ケル京都ヨリ名僧ノ来リテ衆生ヲ濟度スルト聞
カレタル頼朝ハ故都ノ便宜モ聞カマホシク兼ネ
テ其ノ僧ノ教ヲモ聞カバヤト近侍ノ果々ヲ遣ハ
レ遂ニハ自分モ時々参聴シ端無クモ對坐談話ス
ルトモアリ遂ニ院宣申シ下シノ事ニゾ及ヒケル
一説 文覺ハ伊豆國ハ流罪ノ仰アリケレハ或ル
時蛭カ小島ニ到リ頼朝ニ見参シテ云ヒケルハ國
コソ多カルニ當國ハ流サレケルハ佐殿ノ御父ノ
厭ヲ見参ニ入レテ井テスノ便ニコレナレトテハ
テト泣キケリ兵衛佐頼朝之ヲ見給ヒ一定トハ
知ラザレドモ父ノ頭ト聞クヨリ懐カシク思ヒツ

亦泣ク之ヲ受ケ取りテ袋ノ中ヨリ取出シ見
給ハバ白ク曝レタル頭ナリ膝ノ上ハ搔キ居エテ
良久トク泣キ給フ我が父ハ子息多クオハシマデ
シ時ニ兵衛佐ヲ鬼武者トテ十歳許迄モ膝ノ上ニ
居エテ愛シ給ヒシ報ニヤ今ハ厭ヲ受ケ取りテ又
膝ノ上ニ置キ奉ルテ哀レニゾ思ヒケルト宣フ文
覺申シケルハ我ニ神護寺再興ノ志願アリテ院ノ
御所ハ勸進ニ奉リシニ卒キ目ヲ見ルノミナラズ
流刑ノ宣告旨ヲ蒙ル時心中ニ發願ノ占形ヲスル
トハ我必神護寺ヲ造營成就スバキ願望ヲ遂ゲン
ナラバ配所ハ下リ着ク定斷食セシニ死ス可ラズ
其ノ事叶ヒ難キナレバ途中ニ歎ヲ曝ラズベシト

誓ヒタリシガ佛神ノ加護ニテ成就スベキ印ニヤ
三十一日此ノ地ニ下着シタリ疾ク平家ヲ亡ホシ
テ後御父ノ菩提ノ爲且ハ又文覺が本意ノ如ク大
願ヲ果タシ給ハト云ハバ頼朝ハ勅助ヲ赦サレズ
シテ何事モ其ノ恐アリト宣フ文覺曰フ試ニ思シ
召シ立ケ給ハバ找レ京ニ上リ院宣ヲ申スベシト
佐殿宣フ御免ノ院宣ヲ賜ハリ平家進討ノ勅命ヲ
蒙ラバ幸テ思ヒ立タザルベキ但シ御邊モ勅助ノ
身ナレバ如何ニト文覺曰ハク思ンデ上京スベシ
ト諾ヒ文覺ハ一七日入定スト披露シ方丈ノ傍ナ
ル菴室ヲ固ク鎖シ地ノ底ヲ掘リテ抜ケ道ヲ作り
竊ニ其ノ穴ヨリ遠ニ出ゲ夜ニ紛レテ道ニ上リ晝

夜走リテ新都福原ノ樓ノ御所ニ参リ院ノ近習前
ノ兵衛督ニ面會セント乞ヒ前示肉親人ナル光能
ニ逢フテ申シ込アル様ハ伊豆國ノ流人兵衛佐頼
朝コソ朝家ノ御嘆ヲ謚ンジ奉リ萬民ノ煩ヲ除カ
レト年頃ノ願アレハ早ク院宣ヲ下シ給ハ左アラ
レニハ東八個國ノ家人ヲ催シ都ニ上リ平家ヲ滅
ホシ仙洞ノ步籠マレ在マス逆鱗ヲモ休メ奉リ國
家ヲモ鎮メ侍ラシ此ノ事ニ付窺ヒ見ルニ餘所目
ニハ勅助ノ者トシテ憚ル様ナレドモ内々皆從ヒ
通シケリ況ヤ院宣ノ下ルナラバ大名小名誰カ一
人背キ申スベキ御心苦しキ御目ヲ御覽センヨリ
ハ院宣疾ク下サレヨカシト奏ヒ給ハト光能曰ハ

ク君モ亦籠モラサレテ在シ〜世ノ事知ロシ召
サレズ左社御心憂ク思レ召スヲノ頼朝左様申サ
レテ帝運ノ再ヒ克舜ノ世ニ改マラシトノ瘡シサ
ヨトテ密ニ御氣色ヲ伺ヒタルニ然ルトニヤトテ
御免シアリ光能承リテ院宣書キ終ハリ之ヲ文覺
ニ歸ハラセケル文覺ハ上下スルノ日數八個日ニ
テ伊豆ニ着キ密ニ又穴ノ中クゴリ室内ニ坐ス國
中ノ信者ハ今日社御上人ノ出定期ナリトテ雲霞
ノ如ク集マリ料マントス頃ヲ弟子ノ僧鐘ヲ啓キ
戸ヲ開キタルニ威儀乱レズ定印違ハズ髮生ヒ廻
ビ色黒ミ姿瘦セタリ弟子ノ僧銅鈴ヲ執リ定坐ノ
前ニテ二振ス文覺鈴聲ニ驚クモノ、如ク目ヲ開

キ惚然トシテ出定ス見ル者之ヲ真佛視ニテ仰護
ス此ノ式終ルヤ文覺ハ密ニ頼朝許往キ申ス様院
宣ハ能ク〜申サハ賜ハリ氣ナリ今ハ安堵シ玉ヘ
語ラハ申サルベキト頼朝深ク上人ノ勞ヲ謝シ且
言フ縫令ヒ院宣ハ手ニ把リタリ共斯カル身ニテ
ハ左右無ク人ハ同心スマジ況ヤホ賜ハラザル先
ニ叶フ可ラズ能無ヤ止人ノ言ヒ事ヒツキ此ノ事
露ハレナハ再ヒ憂キ目ヲ見シ文覺曰ハク拙僧申
レ固メテ候フ瞻ナ潰シ給ヒワ法皇ノ仰セニハ頼
朝カ左様ニ頼モ敷ク申スナレバ子細ニ及バズト
アリ院宣ヲ急ギ給ハラントナラハ高雄へ莊園ノ
御寄進アルベシト言ハハ頼朝云へル様吾カ身サ

母
史
志

ハ安堵セザルモノヲ如何ニ莊園ヲ奉ラルベキ文
覺ハ只拙僧ガ計ラビニ從ヒ給ハト云フ頼朝曰ハ
ク我モシ軍ニ勝テ日本國ヲ手ニ取ラバ一國二國
乞ヒニ依ルベシト文覺曰ハク手ニ入りツレバ必
惜キモノナリ無キ物ハ惜シカラズ國モ廣博ナリ
唯所知ヲ十餘所寄進シ玉ハトテ料紙取り出
シ丹波國ニテハ新莊本莊在部宇津繩野播磨國ニ
テハ五個ノ莊土佐國ニテハ高賀茂郷ヲ始トシ十
三箇所ヲ撰出シソレト言ヒケレバ笑ヒテ忍ビ
テ寄進狀ヲ書キ判形ヲ加ヘテ之ヲ給フ文覺微笑
ミテ御邊ハ以テノ外心廣キ人カナ我物良ニイミ
ジク寄セ玉ハリ其ノ荒涼ニテハ一定天下ノ主ト

ナリ玉フニナシ然ラハ院宣奉ラントテ懷中ヨリ
文袋取出カレ申ナル院宣ヲ奉ル頼朝驚キ俄ニ手
水嗽レ淨衣ニ紐サレナドシテ之ヲ披キ見玉フテ
遂ニ旗揚ケノ用意ニ心ヲ傾ケ玉ハリ具ノ天下ヲ
得ルニ及ンデ約束通り莊園數ノ如ク與ヘラヌ
三位中將平維盛ノ子ニ六代ト云フガ有リ平家ノ
都ヲ落チシ時維盛ノ北ノ方如何ナル野ノ末山ノ
奥マデモ御供セント小倉山ノ麓菖蒲谷ノ北ナル
大覺寺ト云フ里ニ采リ在セシテ早クモ北條時政
ニ訖ハ出デタルモノアリ時政當時京都ニアリ平
家没落後ノ政務ヲ執リ行ハリシカバ次ノ日彼所
ニ趣キ八方ヲ圍ニ六代君ノ御迎ヒニ参リタリト

丹波國志

甲シ込ム北ノ方六代ニ取り継リ只今之ヲ渡セバ
又何日逢フベキヤ妾ヲ先ニ討テ玉ハトテ放ツ氣
色無シ他ノ女房ハ途方ニ暮レテ只オロ／＼ト泣キ
叫ブ六代ハ自若トレテ人々ヲ制シ是レモ覺悟ノ
前ノ了ニテ候フアト云ヒワ、後レ髮ヲ搔キ搦
ゲ小キ黒木ノ念珠ヲ出ダシ臥纏リテ殊勝ノ様子
北ノ方ハ愈／＼涙セキアハズ北條ノ家臣等ハ急キ
御用意アルベシト催促ス六代更ニ北ノ方ニ向ヒ
幼少ヨリ御慈蒙リ奉リタル御恩ノ嬉エク侍レ御
情ハ盡キ侍ラズ餘リノ御嘆キニ御身ノ損ジモヤ
セント聞キ北ノ方絶へ入りモヤセン氣色ナリ齊
藤五郎同六郎進ミ出デ御供ノ儀許サセ玉ハト乞

ニ輿ノ兩側ニ從テ出テ行ク盡キ又別レノ情ヨ
リ北ノ方ハ寢食ニ安シセズ只管觀音菩薩ノ庇護
ヲ念ジ居玉フヲ女房達ハ餘リノ御嘆キ御玉ノ緒
モ絶エ玉ヒヤセント様々心ヲ苦シメ兼々承リ及
ブ所ノ文覺上人ノ了ヲ申シ後生ノ弔ナド頼ミ玉
ハ且ハ彼ノ上人ノ鎌倉殿ニ於ケル御覺ヒ目出度
ケレバ御取成ヲ得テ六代君ノ苦痛ヲ免レシメ奉
ラントテ急ギ乳母ヲモ具シ勸メテ高雄ハト誘ヒ
奉リ又歩モ慣レ又山路ヲ踏ミ神護寺ハ登リツキ
案内ヲ乞ハバ聲荒ラカニ障子推開キ七尺有餘ノ
大漆師キツト睨ミ如何ナル方ゾト問フ夫ナル
ハ兼々聞キ侍リシ聖僧ニテ渡ラセラレ候フヤ

大法師云フ様コノ所ハ女禁制ソレヲ辨ヘテ参
レケルカ 六代ノ乳人夜叉答フル様妾コソ乳ノ
内ヨリ育テ上ケ参ラセタル若君ノ十二歳ニナリ
玉ヘルヲ人ニ捕ラレ録倉ハ引キ立テラレシナリ
憂キ目ヲ見玉フラント思ヒ悲ニ聖僧ノ御情ヲ以
テ其ノ苦ヲ救ヒ玉ハハ生々世々ノ御恩情ナリト
言葉モチギレニ泣キ伏ス 文覺モ哀情ヲ起
コシ様々勞レバ 乳人曰ハク是レハ三位中將殿
ノ北ノ方ナルガ御子ノ六代君ヲバ録倉武士ノ引
キ立テ候フゾヤ 文覺委細ニ聞キ取り儲ハ北
條四郎時政ノ計ラヒナリ先々大覺寺へ戻リ吾ガ
音ヅレ待チ玉ヘト云ヒ二人ヲバ歸ヘシケル 文

覺ハ急ギ京都ノ北條ガ旅館ニ赴キ六代ノ死刑ヲ
二十日ノ間待ツテ賜ヘ録倉殿へ参リ愚僧カ是迄
ノ助カニ換ヘ此ノ命乞致サント思フトアレバ時
政モ上人ガ録倉殿ニ忠勤セラレシトテ兼知スル
モノカラ其ノ言葉ニ從ヒタリ 十日ト過キ十五
日ト経テ遂ニ二十日ノ期モ満ツ 東國ヨリノ消
息ハ無シ 牢與ハ引カレヌ 六代ヲ衆セテ東男
ハ之ヲ昇キ齋藤兄弟其ノ左右ニ從フ 北ノ方モ
乳ノ人モ上人ノ音信ハ無シ今ハ此ノ世ノ暇乞ゾ
ト與見送リテ泣キ伏ス 叔モ六代ノ一行ハ東海
道ノ宿々ヲ一日二日ト經過レ駿河國千原柘原へ
来カ、リケル時齋藤兄弟ヲ呼ビ時政曰ヒケルハ

御身等ハ此處ヨリ都ニ歸ラレバレ録倉モ程近ケ
レバ心支モアラザルベシト兄弟モ時政ノ意中ヲ
推シ扱ハ此所アタリニテ御命ヲ失ヒ參ラセント
テノ事カト思ハ胸潰レ返ス辞モ無ク只御最期
見届度シ許サセ玉ヘト乞フ 時政曰ハク其ノ方
々ヲ此所迄来サセシモ此ノ時政一己ノ了簡ニテ
方々ノ忠心ニ免ジテノ取計ナリ若レ録倉迄伴ナ
ハセナバ後日如何ナル御咎ヲ蒙ラン歟枉ゲテ此
所ヨリ歸ラレヨト兄弟ハ尚モ一向頼ミ又サレ
ド時政ハ聞キ入レズ 時刻ハ經過ス 今ハ是レ
迄ト與テ急カセ出發セントスル所ハ墨染ノ衣
着タル僧 馬ヲ走ラセ東ヨリ来ル 是レゾ別人

ナラズ上人ナリ 馬ヨリ跳下リ 御教書拜見ア
レ北條殿ト呼ブ 録倉殿ノ直筆 六代ノ死ヲ宿
メタルノ書面 時政サレバ貴僧ニ委ネ參ラセン
ト云フ 姐上ノ肉ニ息ヲ生ジ 屠所ノ羊モ命ヲ
持チ 六代ハ夢カ現カ判シ兼ネ
ト吟ジ時政ト別レ兄弟ヲ供ニシ上人ト共ニ京ニ
歸リ母上乳母ニ逢ヒ件ノ事共物語リ翌日ハ同道
シテ上人ノ宿所ヲ尋ネ恩謝ノ辞ヲ涙ト共ニ語り
出テ此ノ上ハ六代君ヲ御弟子トシ平家一門ノ後
生ヲ弔ハセテ賜バト願ヒ高雄山ニテ飾ヲ卸シ名
ヲ妙覺トシ唱名念佛急リ無ク遂ニハ修業行脚ノ

時政の死後、その遺言を聞き、上人は京都に帰り、母上と乳母とに逢ひ、件ノ事共物語り、翌日ハ同道シテ上人ノ宿所ヲ尋ネ恩謝ノ辞ヲ涙ト共ニ語り出テ此ノ上ハ六代君ヲ御弟子トシ平家一門ノ後生ヲ弔ハセテ賜バト願ヒ高雄山ニテ飾ヲ卸シ名ヲ妙覺トシ唱名念佛急リ無ク遂ニハ修業行脚ノ

爲ニ天下ヲ廻リ他事無ク此ノ世ヲ送ラントシタ
リケル賴朝屢々書ヲ遣リ其ノ舉動ヲ贊ヌ文覺
ノ返書ニ六代ノ不肖ナルヲ告ゲ其ノ意ヲ安ン
セシム三位禪師トハ此ノ六代ノ子ナリ 一説賴
朝ノ心ヲ安レゼシメシガ爲ニ其ノ母六代ニ勸メ
テ削髮セシムト建久五年妙覺ハ文覺ノ書ヲ齎シ
テ錄倉ニ入り大江廣元ニ就キ謝恩ノ情ヲ陳ヌ賴
朝其ノ祖父ナル重盛ノ一言ニテ助命セラレタル
舊誼舊恩ヲ思ヒ厚ク妙覺ヲ遇シ留メテ一寺ノ別
當ニ補セントス誓ヒテ賴朝薨ヌ妙覺歸リテ高雄
ニ在リ賴朝其ノ夢ヲ成サントヲ怖レ奏シテ之ヲ
捕ハ相模ノ田越川ニ送ラシメ之ヲ斬殺ス年二十

六具ノ墓今猶在リ文覺之ヲ聞キ大ニ悲ニ且悶ル
後ニ朝家ノ事ニ於テ奮慨シ大ニ謀ル所アリ其ノ
故ハ後鳥羽天皇佚遊ヲ好ニ朝事ニ怠リ給フヲ見
聞ヒ皇兄守貞親王ノ時望アルヲ以テ竊ニ廢左ヲ
謀ラントス然レモ賴朝ノ在ルヲ以テ敢發セザリ
シガ正治四年其ノ薨ルヲ以テ不軌ヲ謀ル汝レ
ヲ執ヘテ死ヌ年八十 國史畧ニ曰ク土御門天皇
正治元年高雄僧文覺夷平惟盛之子六代而叛謀立
後鳥羽上皇第ニ皇子爲帝事聞錄倉乃流文覺於隱
岐殺六代 註云錄倉殺一小兒六代反不誅首惡文
覺可疑也

頼朝ヨリ文覺ニ與ヘタル高雄山神護寺ノ領地ト
爲ルモノ左ノ如シ但シ丹波ニアルモノ而已ヲ舉
グ文覺カ頼朝ニ乞フ時丹波土佐播磨等ニテ善キ
土地ヲ撰ニ筆記シタリ杯傳フレドモ次ニ示ス五
ヶ所ノ如キハ當國內ノ膏腴地ニハアラズ
新莊 氷上郡ノ新莊乎又ハ何鹿カ船井カ詳ナラス
本莊 多紀郡ノカ何鹿郡ノカ詳ナラス
省部 船井郡ノカ天田郡ノカ詳ナラス
宇津 北粟田郡
繩野 同郡
文覺トシ云ハバ熊野瀧ノ荒行ヤ鎌倉ヨリ京都へ
ノ速行ヤ漆皇御遊ノ妨害ヤ六代ノ丁ヤ叛逆ノ丁

ニ及ビ圓觀黒衣ノ暴行者ト認定スル比々皆是ナ
ルモ左ノ消息ニ因リ之ヲ視レバ會道ノ先達ナル
ヲ追思スルニ足ル前後ノ行爲ガ一貫セザルハ蓋
シ宿業ノ因ナル乎

鎌倉左衛門督頼家ヨリ寺祈禱ニ申付候ニ
承ルル事ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ

重命ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ
申付候ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ
申付候ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ
申付候ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ
申付候ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ
申付候ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ
申付候ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ
申付候ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ
申付候ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ
申付候ニ由リテ寺祈禱ニ申付候ニ

志

一の重多し作女給り也是也

正徳二年八月十日

文覺

録念殿

（印）

右本紙文覺寺ニ在リ今コレヲ聞ケバ無シト惜ム
ベシ次ニ文覺寺縁記ナルモノヲ示ス
夫丹州桑田郡保津之庄内文覺寺者古来此處者傳
云古者文覺初發心之時業体修鍊事相受行而所秘
在之密門也矣今據釋書等之記而竊取意而云之文
覺姓藤原奇俗名盛遠其父親衛校尉持遠之子也其
未生已前父母憂其家無子而無後而參籠長谷之觀
世音而所得之一子也其母不幸產畢死矣父持遠不

忍見斯赤子之被背嚙苦吐甘之慈母而在其長歎抑
將有所其期不見方人歎禪負之来而就左内春木入
道々善之宅而令斯養息之道善得而以容之矣日夜
以望其長閔々馬乳養之也及三歲父持遠亦死矣道
善殊哀憐而粗至其成立矣渠其天賦膽大羞惡而面
皮亦厚矣其起居出入夸疾走矣日喚聚四隣之群童
而奔登山野踏損田畠而飽取人之憎矣雖野老村叟
亦不得制之退後而令透過矣及至其十有三歲而元
服字而拜盛遠矣既而追其父之家業而辭熟慮歸
上而備宮殿衛兵曹矣及其十有八歲誤斬愛婦之首
矣引此逆縁而薙髮矣難行苦行而扶桑洲内之靈區
無刹不遍遊矣後正矣境竭力於修善而終以得遂神

護楫復之志矣。可謂法社之良匠矣。夫文覺因生緣之
所以而平居歸仰大慈悲父而常念恭敬矣。卽此處鎮
坐之彫像是其守護之本尊也。故人依持物之願。至而
釋名而稱文覺寺者乎矣。然此遺蹤湫隘而有但方一
間茅葺之小堂而且無福無緣也。故雖文覺之所憩一
個之監坊亦無矣。庄內之老翁欲便斯香火而夫婦纒
之者或鰥寡獨一之者便之居焉。是皆雖欲留脚而滯
在茲賤者之性癖而股肱怠惰也。晨朝日沒堂上之香
火亦不務之。雖庭上吹塵又是怠洒掃匪怠怠之。又從
而私散錢等而易得用之矣。起臥尿溺而污却悲體鎮
座之梵地之故乎。病癩跛躄之疾痛皆切其身矣。庄內
之見之聞之者不知其自業之所致而訛言大悲憐而

作此崇而恐怖而近傍斯門者或寡矣。其如斯而若可
棄捐後來恐尊像亦到灰烏有乎。可惜許々々茲慶
長年中天龍汎下之徒有珍翁玉座元者應合村之招
請而盤結草庵而爲禪坐之地。而以居焉。座元少欲知
足耽枯澹寂寞而其生以終焉。其身浩甫座元繼其寒
席而膝下溫煖好箇時節前之大守菅沼氏定芳公仁
端之所矣。存法社興隆之義免地高二石寄附而令賑
濟一箇半箇矣。其高躡之定輝公亦克洽之矣。後之大
守裕平氏忠晴公其高躡之忠昭公亦克備由斯舊規
而令慰乎。外鑑內之寂寥矣。於戲斯四君之澤施永以
存此軌則實功德無量者乎。先是三四十年前吾師浩
甫因事立志仍舊基潤色而以隱居焉。後復令其弟星

守首座居焉首座不幸短命而早罹疾病具臨亡之端的就斯法兄周慶遺語具慈母之恩田與此後住而以寂了矣抑貧道無力而修複之皓甫之於文覺雖殊德異發憤而遂其志者與夫神護攝復文覺同其志者乎一笑如上之件々今因寺社執事二殿之尋覓之而以記之矣

寛文十年戊三月

天龍派末文覺現住周慶

文中言フ如ク一時廢墜ニ歸シタルヲ領主管昭氏
柏平氏ノ喜捨ニテ寺命ヲ維持ニ得タリト見エ中
山慶親卿ヨリ送ラレタル歌及ビ序文アリタルガ
回祿ノ際燒失ス其ノ寫左ノ如ク
丹波玉素田那保保々ニ位傳々桂宗悦ハ喜不次

新入道の後裔にして文覺上人乃以ときなかり
し本とハ六の入道乃もくみ也し五波をしとり
やみくとし多みをみ遊むも所り地遠うらた今
み入道の妻惠んらくさうあるよりとて

布らき世のけつとてそ知事あむのうら乃家そん位^{三台}藤原慶親
信於まえ一家の名給ハミのああらものうら乃むとまうる
おんいふんやけのなを身おとまおんまれハ 同 人

袈裟詞

大江資衡

春色懊惱惠田水春風吹怨鳥羽里々中傾國有所妻
當時只呼袈裟氏閨房深鎖人未知姍姍紅粧似桃李
翠剽寶釵照輕雲玉肌瓊質透羅綺妖嬌一笑百媚生
金蓮緩步艷且美娥姬楚女無顏色西施毛嬙不可比

母
成
志

已嫁金吾校尉家校尉元是良家子鄉里相謂稱屈望
豈料族人有俠士々々遠藤名盛遠千場縱博且角抵
生來奸猾多殺人醜體萬狀何鄙俚渡邊長橋新諾成
庸作祇役部伍裏都下士女難遣觀錦繡綾羅競靡々
金鞍玉勒七香車各憑高樓閣跨侈樓上別有佳麗之
婉孌盛遠側目子細視々久偷眼復斷魂如醉如矢空
徒倚竊疑仙女遊塵寰不覺尾行隨步趾始知他是校
尉配傍如無人在躍喜俠氣直向衣川宅排戶拔劍劫
母氏々々愕然奄失色對此不諳那所以戰々慄々俯
不言哀鳴數行涕潺湲垂老微軀何足惜身後惟願阿
兒存誓誘俠士隨所道千慮百憂掩淚痕急使侍兒否
袈裟醜快欲陳氣昏昏々撫齊收淚漸說得薄命唯甘宿

世冤敵款吞聲相對泣血痕未就客立門已是前日無
賴賊瞋目揚聲頻促逼袈裟之計一何奇陽爲嬌態媚
顏邑妾自髻亂心醉君每一相思忘寢食竊願池頭學
鴛鴦竊願天上學比翼豈謂今日朝來中微意爲君可
戮力妾誘校尉臥高閣君提三謀昏黑盛遠含笑待暮
天夜色朦朧月似弦旣窺閣上孤燈白只着丈夫高枕
眠孰知丈夫是佳人可憐桃李花嬋妍須臾暴風所吹
若何人相見不相憐古來節操多易折况復冤恨誤青
年野樹帶雨草舍露陰風嗽々秋山邊

僧文覺傳

赤松鴻

僧文覺初名盛遠姓々遠藤世撰渡邊人父盛光西門
大后武官初盛光年已六十妻四十餘猶未舉子深以

為憂夫妻相與禱長谷寺觀音大士七日妻夢大士賜
一鴛羽左袖上奉之已而有娠遂產盛遠數日而母死
三年盛光亦疾不能起臨終以盛遠託故人丹波穗津
亭長春木道善々々聽其幼而孤善過之視猶子盛遠
稍長充狡狂氣常肆群兒奔走田野妨農害穀或傷馬
牛御里患苦之至十三歲平安族人遠光召之請西門
大后續父職盛遠為人長大有聲力其聲如鐘性雖狂
暴亦自傷早失父母每一念至涕泣不止人以此異之
盛遠有姑名衣川歸平安人某者生一女子名都磨而
夫早死唯母子在盛遠心欲佗日聘都磨而未敢言姑
亦頗知之而為其猶少不以為意矣既而女稍長姑嫁
之源度亦其夫家及遠藤氏通家也盛遠悵然絕望後

數歲會渡邊大檢新成官擇高年使之試步且恩賜之
命盛遠護之貴賤男女群集觀之盛遠於禍人中忽見
一少婦美而艷不能忘於情及衆散尾少婦輿則入源
度家乃識姑子驚嘆蓋盛遠但識其幼時而不識其長
而美好倍舊於是乎初志再發思想不止遂欲奪之一
日味爽突入姑家挺刀劫姑々々大驚且泣日子非我姪
乎何故欲害我盛遠故怒曰姑欲殺姪故姪先耳姑益
驚且泣曰噫是何言吾常悲我姪幼而孤實視猶子也
豈有他乎誰構我姪使爾盛遠曰非人欺吾々々自知雅
欲得都磨以為妻姑亦非不知而嫁之他人姪今無如
之何若思致疾死在且夕斯謂之姑殺姪非邪故及命
未終先報仇焉於是姑知其狂暴不可以理爭乃曰不

意我姪思我女如此之甚未亡人早審其如此豈敢俾
女登他門哉門哀薄亦唯任人請去耳而姪情如此厚
今夕必召我女使我姪相見結綢繆已盛遠大喜乃投
刀而拜謝然猶恐為欺誓而後去姑乃謂雖以耳言免
而盛遠復至則不可如之何遂託疾請女未省已而女
至母乃開匣出刀泣且謂女以此刺我女大驚不能言
端而癸紅耳母乃謂之故且曰吾不死禍必及女夫妻
女唯啼泣不知所為然業已如此不如之何良久收泣
曰兒有一計可以免矣母唯兒所為勿問焉既夜盛遠
果盛服至見女大喜相携入室女乃謂盛遠曰妾不幸
適源郎三年于此矣百事不如意未嘗一日絕改適之
念也而恐得罪母以故在葦至於今耳妾今知君愛顧

之篤乃當與君偕老矣妾明日到家復夜使源郎沐引
登樓飲之酒候其醉臥而滅火閉戶族君宜竊未樓上
暗中探求濡髮人直斷其頭去如此而後妾得永從君
矣盛遠大喜而去至期竊赴源家踰牆登樓右手握刀
左手探之果得濡髮人即斷其頭以衣裹之直歸家而
寢明日其人有事出外遽歸報云有一大異事君不可
不語源君內昨夜為人所殺而賊未得是大異事於是
乎盛遠方知婦人代夫死驚嘆入室焚衣視之果然因
慟哭終日乃恍然悟曰信哉夢現泡影吾過矣々々々
明日起直到源家使其人報曰盛遠為縛賊未源度大
喜開戶迎之盛遠乃以婦首與刀附度語之故且云僕
今雖悔何及請幸斷僕首度愕然岩間曰亦無益已請

俱興歸佛何如盛遠再拜誓首曰幸甚亦唯命於是乎
二人皆爲僧源則從僧法然學道仁安中航海入華名
播海內盛遠更名文覺雲遊二十餘年足跡幾遍海內
至治承中欲再修高雄山神護寺以作一大道場乃作
募緣疏不問尊卑身自造門誦之以乞一日入平安城
中直至上皇宮門上言時會宮中宴樂闈人不爲通覺
立門外多時不得報乃憤直進宮庭高誦募疏且妄言
坐大不敬遠竄伊豆將廢平安防送者意欲得賂乃謂
覺曰聞上人多相識今當逕行何不告之行得其鑑以
分惠我輩也覺曰棄家遁世親戚不相顧况當此流竄
豈有他人能憐我者哉無已則東山有一舊交古所謂
死友也當寄一書以乞錢米耳語若宜具紙筆附送者

喜而求得紙筆至覺乃叱擲其紙曰奴輩無禮如此惡
紙豈可奉高士邪送者雖怒其言不遜而尚庶幾得財
物再求好紙至覺曰遠具酒及酒筆資送者既厭其煩
且苦其費然勢不獲已及解衣換酒以飲書手且小刀
以爲贈焉書手乃請其辭覺口授曰貧道不幸獲罪人
間今當遠謫人命朝露固不足惜唯是朝夕盪菜之資
不得不少儲請向所寓鷲眼百貫粟米百石伏乞附以
擲下書畢請所與姓氏插呼覺曰清水寺觀音大士足
下送者乃培爲欺弄卽罵詈不止覺大笑絕倒良久曰
請與汝輩和且謹聽吾言夫觀音大慈大悲誠以奉之
所求必得汝輩貪慾愚痴求賂貪僧則轉借觀音不亦
宜乎送者雖益怒而無可如之何遂送至鳥羽港發船

至渡邊泊數日一夜覺寐寤適聞船子相語云此僧必
懷所募金相與誑奪覺及天明嗚念珠低聲祝曰頂禮
高雄山護法天童子向所募數百金密瘞五條天神
華標左柱下三尺所伏願為吾護之使免突掘船子竊
聞之乃相與急登岸直赴平安掘五條天神華標左柱
下三尺許無有物更穿五尺許竟無所見相謂云吾輩
或誤聞又穿右柱下俄然華標倒驚逃匿泊處會覺宗
人居渡邊者來見覺而亡其顛狂獲罪船子因進自言
華標事怒其虛誕覺乃大笑曰奴輩不知乎大地之底
稻金輪際黃金布滿盍穿到底且吾所藏北野天神華
標非五條天神華標奴輩更赴北野穿乃得因捧腹絕
倒衆皆憤怒每事窘之既發船至遠州海遇颶船將覆

衆皆驚駭悲啼或禱神或念佛獨覺則枕舷鼾睡衆乃
喚覺且讓曰縱既陷刑戮不復顧身獨不憐衆人橫死
乎何不一禱免難也覺徐擡頭曰覺在風濤何足懼汝
輩亦安臥待風波自止且卧言曰樂哉々々衆皆憤悲
交袞曰不仁哉此僧也遠竄亦宜哉風濤益盛衆徒踣
泣耳覺乃起曰汝輩恐懼亦有理悲弄之甚誠可憫也
吾當為汝輩却風濤因望海上大言小龍奴輩謹聽文
覺在此速收風濤苟不爾當付大龍王處極刑矣衆聞
之愈益驚恐曰恭敬禱求猶恐不免狂僧衆船風濤實
為此已無何風濤忽收海面清朗衆皆驚其神驗敬服
謝罪其遇異前日誣數日達伊豆當此時源賴朝竄在
伊豆覺至相見遂說使興兵及平氏亡賴朝得志賜地

十有三處盡建寺焉建久之未賴朝薨至正治中覺年八十餘復得罪流隄岐嶋踰年卒于嶋
赤松子曰惜哉覺也其性之豪邁盖有大過人者使其夙聽我聖人之道豈有觸情從慾傷義賊人遂陷身浮屠移怒犯上望辱々身名實兩失使後世唯其狂暴是傳哉至若說賴朝討平氏抑亦豪士故態哉世俗好傳稱其修行怪奇君子所不取也予亦不欲道矣
盛遠別傳 盛遠ハ父ヲ茂遠ト曰フ左近衛將監々リ老テ子無し長谷寺ニ詣テ、禱ル其ノ妻爲ノ羽袖ニ入ルト夢ニ感シテ身ニ盛遠ヲ生ム襁褓ニシテ親ヲ喪ヒ春木長善ノ家ニ養ハル稍長ジテ麤獷無賴日ニ御里ノ群兒ヲ從ハテ牛馬ヲ搏拏シ田畝

ヲ蹴踏ス人之ヲ患苦ス年十三ノ時其ノ族人遠藤遠光爲ニ首服ヲ加ハ名ヲ命不軀幹壯大ニシテ趨悍武藝ニ精シ然レ氏圭性ナリ却ニシテ恬恃ヲ失フヲ以テ毎ニ人ト語レバ涕淚悲慕ス父ノ養ヲ以テ止西門院ノ北面トナリ又院ノ武者所トナル年十八ニシテ誤リテ左衛門尉源渡ノ妻袈裟ヲ殺シ感悽懊恨自ラ容ル、所無ニ遂ニ髮ヲ削リテ僧トナリ名ヲ文覺ト更ム勤修勇猛ニシテ盛暑隆寒ニ林叢ニ露臥シ飛泉ニ疑立シ艱難萬狀屢々死ニ瀕ス名山大川古祠淨刹處トシテ到ラガル無シ草行露宿飲食ヲ斷ツニ至ル高雄神護寺ノ側ニ居テ梵宇ノ頽毀ヲ數ニ營繕シテ父母ノ冥福ヲ資ケント

京都府立総合資料館所蔵

欲シ遂ニ化疏ヲ作りテ普ク士民ニ募ル一日法住
寺殿ニ詣リテ奏請ス法皇方ニ群臣ト宴シテ笙歌
鼎沸シ為ニ通スル者無ク日所ニシテ報ヲ得ズ文
覺大ニ怒リテ以爲ハラク左右沮止スルナラント
徑ニ入り殿庭ニ立テ大聲ニ疏ヲ讀ム宮中驚擾ス
檢非違使平資行叱シテ之ヲ逐フ文覺既軸ヲ以テ
貝ノ首ヲ撃テ胸ヲ衝キ之ヲ仆ス北面ノ士噪ギ進
ムモノ十人計リ文覺左手ニ疏ヲ持テ右手ニ懐中
ノ小刀ヲ執リ踴躍シテ之ニ擬ス法皇憎レテ俄ニ
坐ヲ罷ム兵衛尉橋公朝叱シテ之ヲ逐ハント文覺
曰ハク吾嘗テ謂ヘラク皇家ノ資給ヲ蒙リテ至願
ヲ成スルヲ得ント名志果タサズ生キテ又何ヲカ

爲シ法ノ爲ニ身ヲ棄ツル固ヨリ吾ガ甘シズル所
寧口頸血ヲ以テ殿陛ニ濺ゲトモ決シテ去ル能ハ
ザルナリ願ノ成否ハ一ニ聖裁ニアリト放聲棘言
シテ法皇ヲ慢罵ス安藤武者右宗持シテ釋カズ衛
士群聚シテ之ヲ縛シ遂ニ廷尉獄ニ下ス文覺日ニ
要言ヲ放テ朝家ヲ呪咀ス赦ニ逢フテ出ツ意氣少
シモ挽マズ憤怨譏刺シテ顧憚スル所無シ事聞ス
朝廷源仲綱ニ勅シ捕ヘ之ヲ俘豆ニ流セシム天龍
灘ヲ過ガ大風俄ニ起コリ船幾覆ラントス文覺吟
嘯自若枕ヲ高フシテ臥ス舟人固ク禱攘セシコト
ヲ請フ文覺起テ大ニ呼ンテ曰ハク此レハ星レ文
覺カ乘ル所龍神何レゾ沮遏セント復更ニシテ風

止ム初メ文覺齋スルニ臨ニ自ラ誓ヒ曰ハク我が
志遂ク可クンバ是ノ行死セズ然ラサレバ神我カ
命ヲ奪ハント食セザルコト三十一日言笑常ノ如
シ己ニシテ伴豆ニ到リ奈古屋ニ居リ自ラ善相人
ト稱シテ觀相ス遠近頗ル歸嚮ス源賴朝モ謫セウ
レテ伴豆ニアリ將ニ之ヲ看ントシ人ヲシテ意ヲ
通セレメ過リ訪フ文覺一障ヲ隔テ、坐シ目ヲ瞑
テシテ語ラズ之ヲ久フシ卒然トシテ曰ハク子ハ
故下野殿ノ子ニ非ズヤ流落シテ此ニ至ル實ニ慙
ムベシト俄ニ立テ禮讓シテ曰ハク我レ嘗テ四方
ニ周流シテ謂ハ所ル源氏ナルモノヲ視ルニ皆大
事ヲ成スニ足ラズ今幸ニ公ヲ見ルニ心操平穩將

帥ノ器ヲ具フト由ツテ漢高楚項ノ興亡スル所以
ヲ説キ以テ之ヲ激勵ス他日又説キテ曰ハク公誠
ニ能ク大事ヲ興サバ院宣ヲ乞フテ難カラズ我善
善ク公ノ爲ニ之ヲ辨ゼント乃チ急ニ福原ニ赴キ
院ノ近臣前兵衛督藤原光能ニ請ヒ院宣ヲ得テ還
リ賴朝ニ謂フテ曰ハク公院宣ヲ得ント欲セバ先
ツ莊園ヲ神護寺ニ置ケト賴朝曰ハク事若シ乾ラ
バ唯々師ノ欲スル所ノマ、ナリト文覺筆ヲ執
リ丹波播磨土佐ノ膏腴地十三所ヲ書シ永ク寺田
ト爲サシメ而シテ後ニ院宣ヲ出シテ之ヲ示ス賴
朝遂ニ意ヲ決シ兵ヲ舉ク大將軍ノ府建ツニ及ビ
寵ヲ恃ミテ勢ヲ張り頗ル權威ヲ弄ス遂ニ神護寺

文覺
志

ヲ修シ又東寺ヲ修ス頼朝禮遇日ニ隆シニ平氏滅
亡ス北條時政京師ニ至リ平氏ノ子孫ヲ匿スモノ
ヲ求ム維盛ノ子六代執レテレテ將ニ斬ラレント
ス文覺營救シテ免ル、一ヲ得タリ文覺ノ資性傲
狠ナル老ニ至リ悛ラズ身山林ニ在リテ朝政ヲ諍
訕ス時ニ後鳥羽帝佚遊ヲ好ミ政事ニ怠ル皇兄守
貞親王時望アリ文覺竊ニ廢立ヲ謀ル然レハ頼朝
ノ在ルヲ以テ敢テ奈セズ正治元年頼朝薨ス乃チ
隲ニ事ヲ謀ル事漏レ佐渡ニ流サル文覺踊躍罵言
シ食ハズシテ死ス時ニ年八十

角倉了意畧傳

角倉家系ニ縁レバ宇多天皇ノ後胤近江源氏ノ支
族ナリ了意ノ祖徳春ナルモノ居ヲ洛西塙城ニト
シ家道日ニ昌シナリ其ノ子宗桂ナルモノ天資豪
邁ナリ足利幕府ノ使節天龍寺ノ僧策彦ニ隨ヒ明
國ニ入ル天正年間ノトトス同ニ十二年妻中村氏
ヲ娶ル一男ヲ舉ク名ハ與市實名ヲ光好トス了意
ハ法體後ノ号之一号云叟父宗桂實名了徳一号意
菴山城國葛野郡釋迦堂西門外中院内ニ住ス之ヲ
角藏トス古時王城ノ四方ニ穀倉ヲ置キ凶荒ニ備
ハタリ了徳ノ住居シタルハ西角藏ニシテ角藏ヲ
以テ氏トシ又音讀シテ人ニ名ノ如ク呼バル宗桂
ハ法号ナリ了意生レテ英才アリ長シテ水利ヲ講
スルヲ以テ樂ニ何日カ之ヲ活用實施セント志ス

角倉了意傳

時ニ板倉伊賀守勝童来ツテ所司代トナリ人材ヲ
求ム了意ノ悦ヤ深シ往キ其ノ門ニ謁シ説クニ水
利ヲ以テス勝童一見シテ大ニ之ヲ重シ是レヨ
リ先キ大佛殿建立ノ際豊臣氏ニ白シニ條河原町
ノ支流ヲ引キ河原町ト樵木町ノ間ニ於テ伏見ニ
通ズルノ高瀬川ヲ開キ木石搬運ノ便益ニ資セリ
鴨川ハ其ノ流駛クシテ舟楫ニ便セズ且水ノ常ニ
涸ル、ノ憂アリ高瀬川ハ鴨川ヲ距ル數十間ノ地
ニアリテ緩流濬々トシテ容易ク枯竭セズ川就リ
テ京人其ノ福ヲ享ク勝童曾テコレヲ耳ニスルヲ
以テ其ノ交リヤ厚シ一日之ニ語りテ曰ハク汝ノ
氏名ヲ角藏トスルハ序ヲ失フ予ノ姓板倉ノ一字

ニ合ハセ角倉トシ與市ヲ以テ通稱トセヨト爾後
コレニ從フ蓋シ中頃衰ヘテ苗字サハ判然セガリ
シナリ慶長八年徳川氏ノ命ヲ奉ジテ安南ニ客遊
シテ知見ヲ擴充シ平素蘊蓄スル所ノ水利ヲ考竊
獨得スル所アリ歸朝スルヤ翌九年美作ノ國ニ入
リ計和川通船ノ便ヲ見テ凡ソ百川千河舟スベシ
トノ断見ヲ立テ其ノ子玄之ヲシテ江戶ニ往キ富
士川通船ノ計畫ヲ陳ビシメ其ノ許可ヲ得テ同十
年甲府ヨリ高瀬舟ヲ通ジ南下スルノ便ヲ開キ之
ニ次ギテ起エスルモノハ保津峽ノ舉トス
丹波ノ國タル其ノ半ハ山嶽ニシテ半ハ湖沼トス
大己貴命等八神ト共ニ具ノ水ヲ決キ東流セシメ

丹波
水
志

子去之ヲシテ東行セシ
マクルハ
春三月ナリ
年丙午

タルニ數百年ホソノ水流ヲ利用スルモノアラ
ズ傳説ニ由レバ僅ニ木ヲ流シ竹筏ヲ下シタルノ
ニ而ルニ了意ノ發案ト板倉勝童ノ補助ニ由リ茲
ニ丹波ノ利源ヲ浚濬順導スル丁ヲ得タリ保津峽
ノ體タルヤ千岩萬石相襲リ相疊リ丹波ノ水ソノ
間ヲ流注ス溪細クシテ水急ナル所アリ峽廣クシ
テ水緩ナル所アリ了意山ニ上リテ地勢ヲ案シ谷
ニ下リテ水勢ヲ察シ千思萬考ソノ曲レルモノハ
直クシ正ナルヲ邪ニシ大石ハ輓轡ヲ以テ曳キ水
底ニアルモノハ上ニ浮樓ヲ構ヘ鉄棒ノ銳頭ニ又
廻リ三尺ノモノ柄ニ丈アリ下シテ大石ヲ碎キ
水面ノ大岩ハ之ヲ燒キ碎キ洩ヲ埋メ石垣ヲ築キ

以テ流水ノ漏ル、ヲ防キ平準ナラシム工夫ヲ役
スル數千萬賂ヲ糜スル亦數千萬甲午ノ春ニ始メ
秋八月工成リ遂ニ丹波ノ漕ヲ通スル丁ヲ得タリ
了意猶以テ足レリトセズ川源ニ沂リ數里ノ間ヲ
浚、以テ船井郡ニ及ボシ同郡ヲシテ亦其ノ恩惠
ニ浴セシムニ了意ノ長光由善ク其ノ志ヲ鋌ギ大覺
寺法親王ノ命ヲ承ケ長尾山ノ半腹ヲ鑿リ百間ノ
墜道ヲ作り葛蒲谷ノ水ヲ引キ嵯峨ノ水利ヲ興コ
セリ勝童了意ノ功ヲ賞シ薦メテ幕府旗下士ノ籍
ニ列ス康永ニ百俵ヲ世襲セシメ兄弟別レテ嵯峨
ト高瀬川端トニ居リ一ハ保津川通船ノ支配タラ
シメ一ハ高瀬川通船ノ支配ヲ爲サシメ常祿ノ外

丹波
史
志

二運上ノ利権ヲ取ラシメ手代數十名ヲ使役シニ
百年餘榮華ヲ祖先ノ餘光ニ享ケヌ了意ノ塔ハ嵐
山ノ北ナル千光寺ニアリ香花絶エズ其ノ像ヲ見
テ追慕ノ念ニ堪エザラシム著者之ヲ保津人ノ某
々ニ聞ク潛リ岩ハ丈岩屏風岩ノアタリノ大岩巨
石ヲ碎クニハ岸ヨリ岸ハ櫓ヲ掛ケ橋ヲ渡シ一大
鐵錐ヲ巨木ノ上ヨリ垂下シ工人ヲシテ手ヲ併セ
歌ニ和シテ一上一下シ一日一石ヲ破リ二日ニ岩
ヲ割リ其ノ破石壞片ヲ利用シ廣キ所ハ狹クニ深
キ所ハ埋メ一ノ遺漏無ク以テ現在ノ如クナサシ
メタリト此ノ溪ニ遊ビ此ノ峽ニ舟スルモノハ半
岩一石モ古人ノ心血ヲ灑ギタルニ注意セヨ了意

ノ船頭ニ徳兵衛ナハモノアリ其ノ屢々印度ニ航
スルヲ以テ天竺徳兵衛ト呼バル當時印度ヲ呼ン
デ天竺トシ此ノ世トハ思ハズ天竺ニ赴クハ實ニ
天上ニ登ルガ如ク思ヘリシナリ前橋清兵衛ナル
船衆業者アリテ之ヲ了意ニ薦メ以テ海外貿易ノ
端ヲ開カシメタリ了意具ノ志ノ豪ナルヲ賞シ水
主八十人ヲ給シ乗客三百十七人ヲ以テ初航セリ
嗚呼了意ハ終始水ト舟トニ縁深シト云フベシ明
治四十二年十月九日全國山林總會ヲ京都市會議
事堂ニ開キ伏見總裁宮貞愛親王臨席アリ有劾勞
者ニ有效章ヲ授ケラレ了意ニ及ブ枯骨地下ニ沾
濡セシ了意ノ生所ヲ保津トスルノ口碑ハ信ヲ措

丹波
保津
志

キ難シキ光寺ノ大悲閣ハ慶長十九年ノ夏ニ了意
カ自身工事ヲ經營スル所ナリ其ノ秋了意病ニ罹
リ起テ可ラザルヲ知り遺命シテ木像ヲ造ラシメ
之ヲ閣上ニ置クヲ命ズ其ノ像巨綱ヲ卷キテ坐ト
シ犁ヲ以テ杖トナス等皆ソノ意匠ニ云之一ニ具ノ
意ニ從テ製ス
嗟哉ノ人ハ曰ハク了意ヤシノ母親ハ龍神ヤシデ
シタ
雛屋立圃姓ハ野々口紅屋紅粉屋ノ家稱アレド雛
人形ヲ高ニ渡セシ其ノ名ヲ四方ニ馳セタルヲ以
テ雛屋ヲ以テ呼バレ世人ハ之ヲ姓号トシ尊稱シ
テ雛屋宗匠ト呼ブ可哀シ名ハ庄右衛門市兵衛

宗石衛門ナドノ高名アレドモ之ヲ呼ブモノヤシ
才人智者ハ足ヲ倚ムルノ地ニアラズ農夫漁人ノ
住所ハ此ノ如キ人材ヲ同棲セシムルニ適セズ夙
ニ農樵ノ群ヲ捨テ、京師ニ入り人形ヲ作ルヲ以
テ世計トシ餘間ニハ指ヲ俳諧ニ添ノ自得スル所
アリ當時柘永貞徳ハ斯道ノ恭斗タリト聞キ從遊
シ亦文ニ得ル所アリ名ヲ立甫トシ又之圃ニモシ
老後ハ柘翁トス書ハ尊澄沘親王ニ畫ハ土佐狩野
ニ氏ニ學ビ書畫共ニ佳境ニ入ル花卉人物禽獸ヲ
抽キ又戯畫ヲモノシ自賛ス中ニ就キ三十六歌仙
ノ自畫賛ハ好事家ノ愛翫ヲ引ク又歌ヲモ善クシ
鳥丸光廣卿ニ師事ス歌名ニハ親童ト署ス然レ氏

京都府立総合資料館蔵

其ノ物少シ俳句ヲ專業トシ貞徳門下ノ鉅匠トマ
テナリシガ同門下ノ松江産頼ト俳道ヲ論シ意見
貞徳ト衝突シ師弟ノ契ヲ絶フニ至リ遂ニ一家ヲ
立テタリ然レ氏師翁ヨリ得タル優シク可咲シク
トノ極意ハ畢世ノ目的ナリシ口切の茶や耶那乃
栗の飯 木の蒸キフ霰ハ天狗つふて哉 地つ、
き乃山や雲乃散れ流ナドノ句以テ着ルベシ 堂
火ハ川の脊中乃各なヲ師翁が堂々ハ野中の虫
乃やいとゝなト改メシニハ深ク感ゼシト云フ貞
徳門人連白ノ中ヨリ技キタルモノ數々の船ハ若
きりり鼓笈の津 天象よりしき波風の迹 詠部ニ
新夜のちりし雁きて たつとろけを法力の程 山依は

全別杖をみりさそし
まゝ甲斐とちり同書の
家ナドノ作意ニテ推シ得バカテシ附ケ方密ニシ
テ拙ナリ升ハ慶通ノ道ニ乏シカリレ一弊竇ナリ
然リト雖芭蕉未起ノ前ニアリテ正風ノ咏ミ方ヲ
成セシハ師門ニ背クトモ最興床シケレ寛文九年
七十一歳ニレテ没ス門人ニ尤物少カラズ二世立
圃ヨリ定門ニ至ル迄ノ九人ニハ各自好門第アリ
以下七人ニハ之ナシ而シテ立志ノ名モテ系統ヲ
永續ス同号ヲ以テ斯クマデ年所ヲ持續シタルハ
希ナリ故ニ立志ノ俳句ヲ見テ何レノ立志カト判
シ難シ
もをひそ徳萬歳花月介句あど花 歸花 明鐘 袖中記

山依は
詠部ニ
山依は



立圃

鶴踏千句 暮打千句 河舟 みよの舞 若句 若楓 小町踊
 暮繁集 志鳥千句 すり火抄 忍指 箱片持 硯
 さいくい 詞よせ 大岸 空ついで 江戸紫 きこりこ
 つみ折 龍吟集 号ノ書ハ 雛屋ノ著ハセルモノ
 評ニ曰ハク俳畫ニ於ケル 謝蕪村ハ中興ノ畫祖ト
 稱スマシ之ヲ前ニシテ 雛屋立圃アリ畫ハ頗秀麗
 ニ富ムト雖時代ノ俳風ハ彼カ句ノ之ト相伴ハガ
 ルモノアリ松花堂ニ 辨香スルモノニ似タリ

故老話 村ノ沿革ハ今ヨリ判然致シ兼ネマス五
名カ何故勢カラ得マシタカモ判然致シマセ又春
木入道ノ子孫ト致シタ所ガ五名ガ皆ツレテモア
リマスマイ 矢張昔カラ財カト智カトガ有ツタ
ノデシヨウ 近頃マデニ力ハ 不平均テ五名ニ
傾イテ耳マシタ 何分財力ガアリ土地ガ肥沃テ
舟筏ノ便カアルノデ他村ニ比較スルト融通ハ善
キ方デシタ 殊ニ嵯峨マデ舟子筏師ガ参リマス
ト金錢助定テ取引カ出未マスノテ居村テ龜山札
バカリ通用シテ耳ルトハ融通ガ頗違ヒマシタ
併コレモ維新前十数年カラハ嵯峨モ龜山藩札通
用區域内デシタ故 不作知ラズト伝言ハル、田

丹波
地誌

モアリ小麦ニハ最適地テ御覽ノ通り雜草ト共ニ繁茂シテ居マス 耕サズ培ハズニ播種シ自然ノ生育ニ一任スルノデス 彼ノ方ナル田ハ他村ト同ジク畦スルモノ畝スルモノアレド畦々畝々ノ間ニモ亦叢生シ珍域無キノ如ク見ユルデシヨウ高橋邊皆一樣デス 當村ハ諸役免除デ正税ノ外總テノ高割支役ハ免除セラルベキ所テ流筏ニ十分一ノ運上サハ勤ムレバ義務ハ無カワタノデスガ悲ノ哉免状モ有リ證據モ有リテ文敷クナレリシヨ維新前國事多端トナリテヨリ助郷ト唱ハ大津伏見淀等ノ驛々ノ徵發ニ應シ二千石高壺人ノ割ニテ出サレ荷物運搬ニ從事スルノデス代金

ニテ辨納スレバ一夫ニ對シ青銅ニ百文デス是ハ天下通ジテノ定メテ青銅トハ申セ銀モ交ツテノ錢ヲ九十六文ヲ百文ト數ヘルノデス 驛々カラ助郷人夫ヲ割當テ、参リマス本村役人ハ古來ノ免除權ヲ申シ立テ、防ヤマス主驛ノ役人ハ當方ハ其ノ喻達カ無キ故應ズル能ハズト言フ村役人ハ之ヲ領主ノ代官ニ訴フ代官ハ之ヲ幕府ニ懸ケ合フノ面倒ヲ豫想シ村役人ニ向ヒ不得要領ナル態度モテ是等ノ丁ニ御上ヲ煩ハサズ具村役人ニニテ程能ク仕舞フカ善イ何分國事多端ノ御時節故少シハ其ノ邊モ村方ニテ勤考シ御領主ハ御迷惑相掛ケヌ様致シ宿驛役人ト悵議セヨトノ説諭

叫皮志

ヲ受ケ改メテ宿驛ヲ歴訪シテ掛合ハ依然トシ
テ要領ヲ得ズ往返ノ旅費ハ夫役ノ微癸ニ應ズル
ヨリモ嵩ムヲ以テ終ニハ泣寐入トナリテ助郷夫
役ヲ勤ムルトナリマシタ 記者曰ハク前例習
慣政治ノ弊害ハ此ノ如シ枚舉ニ遑アラズ領主ヲ
リト雖ソノ領民ヲ保護スル能ハズ故ニ領主幕府
共ニ人民ノ怨窩トナリ了ハンマ
大川筋沿岸兩側共他所ヨリ漢獵ニ来ルモノアレ
バ之ヲ捕ハ漢具ヲ没收スルノ村権アリ捕獲者ハ
ハ褒賞トシテ村米壹斗五升ヲ支給シ被捕者ハ其
ノ村役人ノ謝罪ニテ之ヲ赦ス
大川横渡新船造價銀六十兩 内五百疋 願ニヨ

リ藩主ヨリ給ス 残りノ半額ヲ村費トシ半額ヲ
船頭株ノ者ニ課ス修繕ニハ藩ヨリ銀ニ枚ヲ下シ
又年々銀ニ貫文ヲ船人ニ給ス衆船者ハ帶刀人僧
侶山伏等ヲ除クノ外銀ヲ取ル銀ハ水ノ高下ニヨ
リテ亦高下ス
公用村用ノ人夫ハ一人ニ付米二升ヲ村方ニテ渡
シ内六合六勺ハ扶持米ノ名ヲ以テ藩費トス年未
納租ノ際ニ清算ス 租米運賃龜岡着壹石ニ付一
升五合ヲ給ス其ノ六合ハ藩ヨリス保津濱着一石
ニ付五合内ニ合ハ藩ヨリス北保津ハ之ニ倍ス
領主ヨリ役人ヲ差シ向ケル丁アレバ賄料トシテ
米五合ヲ出ス年未ノ勘定ニテ惣高ヲ示シ之ヲ藩

應ニ出ス五合ハ以テ入費ノ半ヲモ償ヒ得テ故ニ
 役人ノ出張ハ村費トナル
 井料トシテ米十七石五斗ノ給與アリ井料トハ堰
 水費ニシテ謂ハユルイネナリ八石ハ北保津ニ九
 石五斗ハ南保津ニ下渡ス而シテ實費ハ六十石左
 右トス
 役米ナル目アリ租税目中ニ之アリ是レハ役所役
 人ニ給與スル米ニテ役所ニ於ケル薪炭筆紙墨等
 種々ノ用ニ供スル所トス元高ニ一六ヲ繰ケ出テ
 タル所ノ等數ヲ租米ト共ニ示ス故ニ山後無役米
 ト云ハバ山年ハ出スモ一六ノ役米ハ出サヌトノ
 事ナリ

畑田ニ成間高トハ畑地ガ田地ニナリタル間ノ高
 ヲ云フ南賦分ハ北保津ニ属スル分ノ南ニアル
 ヲ言フ北賦分ハ之ニ反ス地主ガ小作ヨリ得ル
 所左ノ如シ右平年作トシテノ見積リナリ
 大様 上田一石四斗 中田一石三斗 下田一石
 二斗以下 上畑一石 中畑九斗 下畑八斗

丹波志

北保津 元北保津村

憂宕川以北ニ在リ

金毘羅大権現社 石松山一名牛松山頂上鎮座

主神金山彦命 寛延年間ノ勸請 石松カ牛松カ

俚説ニ牛肉ヲ以テ祭リタルヲアルヨリ石ヲ牛ト

呼ビ代エタルナリト頂上マデ十八町南東平野ヲ

下瞰シ城州南方平野ヲモ偷視スベシ雅稱シテ丹

波富士トス

牛松積翠 山ノ頂上ニ在リて霞をまひ、牛松の山 定長

雨乞坂歸樵 小石ノ雨乞坂ノ名、これ山ノ頂上ニ在リて、

桂山秋月 本立まきあきと見えて桂山と名づくならぬ秋夜月

佛光山福性寺 禪宗 京都興聖寺末 本尊釋伽如來

座像一尺五寸

開山大雲照光和尚 鎮座天満宮

瑠璃山洞泉菴 禪宗妙心寺末 本尊千手觀音菩薩

座像七寸

藥師如來 傳教大師作 辨財天社 鎮守御靈社

開山玉庭和尚

大櫻 堂後ニアリ請田祭禮ニ神輿ヨ、ニ至ル

忠古山 是高寺 禪宗妙心寺末小菴ナリ 本尊地

藏菩薩

紫金山 隨雲院 浄土宗 黒谷常光院末

念佛寺 小菴 浄土宗 亀岡大円寺末 除地一石高

辨天菴 小菴 本尊千手觀音一尺四寸

千歳村

千歳村 大字 昆沙門 國分 江嶋里 中

出雲 山口

村位ハ郡ノ東端ニ在リテ東面一帯千年山ヲ負ヒ
此ノ山系ヲ以テ山城國葛野郡ニ疆シ西面馬路河
原林ノ二村ニ接シ北ハ旭村ニ南ハ保津村ニ至ル
村名ハ山名ヨリ采レリ千年山ノ同名ナルモ千
舉グレバ辺江出羽筑後等ニアリテ歌人ノ筆ニ係
カレルモノハ此ノ千年山ヲ多シトス小野宮右大
臣實能ノ日記ナル小右記ニモ爾カ云フテ以下ノ三
首ヲ示セリ

ことしより千年乃山ハ新たえて君は代をも守りて我 然宣

よここも岩根よなれるまき山を君が代のためしむる候 不知

山名考
山名考
山名考

毘沙門

富くやあたむひくふ年山ふもとの里に花もつらし 匡房
移あるふさひ山乃峰しるもあはれなるも思ふもつらき 隆光
大字 毘沙門 村ノ最東ニアリ 元高八百九十
八石三斗天保改三百石餘文久二百九十八石三斗
人戸七十軒 旗下士津田好之丞知行所
往昔國分寺ノ正門此ノ所ニアリテ門ニ毘沙門天
ヲ安置ス遂ニ村名トナル
毘沙門堂 本尊一尺八寸靈佛トシテ有名ナリ
末社 稻荷大明神 役行者 毎年一月初寅ノ日
祭典ヲ執行シ寅ノ刻五時開扉ス詣者曉ヲ冒シテ
蝟集シ福壽ヲ祈念ス錢形ノ菓子ヲ賣ル店アリ詣
者之トヲ買ヒ歸リテ家人ニ頒テ喰ハシム曰ハク

毘沙門天ハ授福ノ神ナレバ其ノ幸福ニ與ルナリ
ト嘉永年間播紳中ノ歌人十種有功卿鳥居ヲ喜附
ト係クルニ左ノ詠アリ二人ハ其ノ子ナリ
多門天ハ毘沙門ノ漢譯言フ心ハ福德ノ名四方ニ
聞コエルナリ

多すては神門を家附しなる 有功
よもむもをひたす神乃門たてうあふぬ山が乃里

有文

かこくもをふまそす神門むあさめみ子漏れとも男よ

有任

廣あはれの後をたてそめてまきはひつるをそくき
有 功 卿 ハ 幼 時 此 ノ 里 人 ニ 由 リ テ 育 テ テ レ タ ル 縁

國分

故アリタルナリ
 瑞雲山神應寺 南栗田郡旭村大字杉光徳寺末
 本尊釋迦如來 坐像四尺 關山便明和尚 鎮守
 八幡宮 天満宮 大師堂ニ弘法ヲ祭ル
 明治六年堂宇ヲ新造シテ毘沙門天ヲ移シ八幡宮
 ラ毘沙門堂迹ニ移神佛混淆禁制ノ令出デタルニ
 由ル爾來神應寺ノ毘沙門ト呼ハル、トトナレリ
 大字 國分 元ノ國分村高五百六十五石四斗五
 升八匁六十二軒徳川家旗下士津田領ト龜山藩領
 ト天保年間ノ登記ニ由レ
 氏神愛宕大権現社ハ村社ナリ 末社左ニ大原大
 明神毘沙門天大黒天蛭子王子明神 右ニ天照皇

太神 太郎坊 下段ニ辨財天女 善女龍神
 西部神道トシテ真言宗白陽山地藏院社務ヲ掌ル
 八幡祝坊ノ末寺トシテ社地ニ住ス祈禱所ニ弘法
 大師ヲ祀ル 八幡宮 國分寺ノ良ニ當ル林中ニ
 在リ
 傳ニ云フ継體天皇御宇愛宕神社ヲ此ノ地ニ建テ
 地名ヲ愛宕トハ呼ビ倣セリ中古山城ニ移シ此ノ
 地ノ神迹ハ寥々ナリ祭神伊弉諾尊本地ヲ地藏
 トシタリ 此ノ縁故アリテ此所ニ愛宕法師一名
 愛宕坊ト呼ブ族アリ山城ノ愛宕社ニ奉仕シ鎮火
 符神名札ヲ諸國ノ信者講社ノ家々ニ齎ラシ配ル
 ヲ業トシ全國足迹ヲ印セザル所無シ常ニ兩刀ヲ

佩ト官名國名ヲ以テ名乗リ儼然士人ヲ以テ自居
ル具ノ遠國ニ巡行スルヤ京都西奉行所ニ詣ヒ道
中先觸ヲ出クサシメ宿々驛々ノ人夫馬匹ヲ公定
率費ヲ以テ使用スルノ權ヲ有ス 定率トハ時價
ノ最低律ニシテ公役ノ士人ノニ專有スル權利ナ
リ具ノ幕府ニ登ルニ諸大名同格ニテ大玄關ヨリ
昇降ス升ハ江戸城鎮火祈禱ヲ修シ具ノ符ヲ納ル
、故トゾ諸大名ニ到ルモ亦然リ此ノ愛宕坊博識
多大ナラザレバ田舎ニ容レラレズ然ル所以ハ僻
地邊陲ノモノガ知レヌ丁ハ愛宕坊ヤシニ問ハト
テ其ノ來ルヲ待ツテ問フ具ノ答スル所往々質疑
者ヲシテ満足セシム具ノ不學無術ナラン卒大ニ

信仰上ノ影響アリ學校ノ普及シテヨリ此ノ風頓
ニ衰フ
福智山養仙寺 禪宗 妙心寺末 本尊釋迦如來
坐像ニ尺 關山教賜大光普照禪師 鎮守 宇津
宮大明神菽森大明神天満宮
大悲山東林寺 黄檗萬福寺末 本尊觀世音菩薩
ニ尺五寸聖徳太子作鎮主ノ黒印狀ヲ藏ス
護國山國分寺 淳土宗 京都黒谷光明寺末 本
尊飯菓師如來坐像三尺行基作 左午ニ觀世音菩
薩立像一尺五寸傳教大師作 右地藏菩薩坐像一
尺八寸惠心僧都作 中興國譽護勇和尚 額國分
寺トアリ黄檗高泉ノ書寺傳ニ曰ハク人皇四十五

京都府立総合資料館所蔵

代聖武天皇ノ皇后光明子ハ夙ニ佛法ヲ崇信シ天
皇ニ勸メ天下ニ令シテ遍ク佛寺ヲ建テ人民ヲ舉
ゲテ其ノ恩惠ニ浴セシメントシ天平十三年塔ヲ
建テ、佛體ヲ奉安セシメ經ヲ寫サシメ遂ニ六十
八國ニ各ニ箇寺ヲ建テシム是ニ於テ百三十六個
寺成リテ御祈願所トナリ大乗妙典一部大般若經
全部ヲ納メシム就中當國ハ山陰道ノ首國タルヲ
以テ七堂伽藍ヲ建營セシメラル五十戸十一町ノ
民田御寄附アリ僧寺ニハ二十僧尼寺ニハ十尼御
寄附民田僧寺ニ同シ僧寺ヲ金光明四天玉護國寺
トシ尼寺ヲ法華滅罪之寺トシ其ノ十九年ニ天下
諸國々別ニ金光時寺法華寺ヲ造ラシメ金光明寺

ニハ七重塔ヲ作り其ノ内ニ金字ノ金光明經一部
ヲ藏メシム孝謙天皇天平勝寶元年ニ至リ金光明
寺ニハ一十町ヲ法華寺ニハ四百町ヲ寄田セシメ
ラレ廢帝ノ天平寶字三年十一月國分ニ寺ノ圖ヲ
天下ニ頒テ同四年光明皇后ノ七々齋ヲニ寺ニ修
セシム同五年諸國ニ國分尼寺ヲ造ラシム稱徳天
皇神護景雲元年正月己未ニ天下ニ詔シテ吉祥天
悔過ノ法ヲ國分寺ニ修ム光仁天皇寶龜三年六月
甲子仁王會ヲ設ケ又吉祥悔過ノ法ヲ行テ淳和天
皇天長七年諸國疫癘流行スルヲ以テ國分寺ニ於
テ金剛般若經ヲ讀マシム平城天皇大同三年天下
飢疫スルヲ以テ一七日大乗ヲ轉讀セシム文珠會

丹波志

料二千束ノ施與アリ嵯峨天皇弘仁九年九月國分
寺ノ僧尼八十以上ノモノニ綿二十疋ヅ、ヲ賜リ
桓武天皇延暦十九年詔シテ春秋二仲月毎ニ金剛
般若經ヲ讀マシムルヲ各一七日以テ崇道天皇ノ
靈ヲ安シス同二十四年二月己未藥師悔過ノ法ヲ
修メ聖躬ノ祈禱ヲ行ノ斯ノ如キヲ枚舉ニ違アラ
ザレバ之ヲ畧ス
京都ヨリ僧正僧都ヲ派シ六年ニ交代シテ講師ト
シ寺領ハ土民ヨリ出舉セシメ公廨ニ類スルヲ以
テ闕々ノ患無シ此ノ富贍ニ慣習汚染シタル寺域
ニ争テカ清淨勤行ノ望マルベキ僧侶ハ相率ヒテ
溜々トシテ墮落シ來レリ藤原敦光ノ言ヤ以テ證

左トスベレ曰ハク國分寺有名無實ノ聞講讀師ニ
智有ルノ侶無シ感應ヲ求メント欲スルハ宛芙蓉
ヲ木末ニ求ムルガ如シト 國分寺料四萬束總論
參看ノ丁
後堀川天皇御宇ニ當リ一年六月下旬ニ紅雲北國
ニ降ル世以テ異慶ノ兆トシテ人心洶々たり朝議
アリテ此ノ本尊ニ勅額アルベシト俄ニ行幸アリ
テ佛足ニ頂禮シ玉ハ紫雲堂ニ滿チ異香鼻ヲ撲
ツ天皇ヲ始メ奉リ供奉ノ官吏希有ノ感ニホタル
、折シモアレ天ヨリ米ヲ降ラス上下信仰心肝ニ
徹シ爾後護國山飯藥師トハ呼バレタリ帝ニ是レ
ノミナラズ眼立ノ地藏菩薩ヲ田植地藏ト呼ブノ

丹波
記
國分寺
志

靈迹アリ其ノ所以ハ昔々一貧媪アリテ寺側ニ住
ス此ノ媪カ此ノ地藏菩薩ヲ信仰シ供養スルヲ厚
ク朝ナ夕ナ來拜スルヲ十年一日ノ如シ而ルニ身
老ニ耕耘ノ力無ク借リタル田ハ雜草茫茫如何シ
トモスル能ハズ去リトテ人ヲ雇フノ資力無ク又
之レヲ助クルノ人モ無シ今ハ備穀盡キテ命亦竭
キントスルノ秋ナリト愈々後世ノ安穩ヲ菩薩ニ頼
ミ居タルガ何日何人が爲シタリトモ知レズ田地
ニ青々トシテ若苗ノ植渡シタルヲ見テ大ニ驚キ
近所ノモノニ之ヲ聞ケドモ知ル人無シ老女ハ不
思議ノ感ニホタレツ、曉ノ來拜ヲ了リ能ク見レ
バ是ハ如何ニ尊像ノ腰部脚部ハ泥土ニ汚レテア

リ大ニ驚キ禮拜謝恩シテ夏過ヤ秋來リ田實豊稔
シ優ニ其ノ冬ヲ凌ギタリトナシ
天正六年四月織田信長ノ命ヲ受ケ丹羽五郎左衛
門長秀來リテ明智光秀ヲ助ケ屋賀城主荒木山城
守ヲ攻ムル折柄伽藍ヲ燒拂ヒ剝、光秀ハ此ノ寺
ノ雷門ヲ持歸リ龜山城ニ移シタリ
建築當時ノ用瓦ハ布目燒ニテ北瓦ナリ又牡瓦平
瓦モアリテ唐草瓦花瓦ナド土中ヨリ掘リ出スト
アリ巴瓦疏瓦丸屋ノ破片ヲ多シトス
大塔ノ迹存スレド只古時ノ仰ヲ忍ガノミ堂前ノ
公孫樹古リテ乳房狀ヲ垂ル
白梅や畑乃中の玉分寺 作者不知

丹波志

竹工ト椿油 竹器ヲ製作シテ行商ス販路頗廣ク
利益太^ク大ナリ 近來外國輸出始マリ製工年一年巧
緻ニ向ヒ具ノ當初ノ家具農具漁具ニ止マラズ推
致アル品種々ヲ業出ス椿油亦名産ニシテ竹器商
人コレヲ携フ

江嶋里 高百六十八石七斗六升内四十二石七斗

六升亀山藩領百二十六石津田美濃守知行

氏神 出雲神社 大字出雲ニアリ

如意山藏寶寺 禪宗妙心寺末 本尊觀世音菩薩

坐像ニ尺間基南溪和尚 藥師堂 秘佛 十二神

ヲ安置ス 安産ト火除ノ奇特アリト云フ

當時ハ弘法大師來住ノ古迹ニシテ大師作ノ牛王

ノ判ヲ藏ス毎年正月七日參會スコレヲ修正黨ト
呼ブ其ノ時牛王ヲ村中ニ配付ス故ニ村中古來難
産無し火災無シトゾ地藏菩薩立像三尺往古北海
ヨリ出現シタルヲ住僧迎ヘテ此ノ寺ニ容ル桑田
郡六地藏ノ一ナリ 鎮守鈴宮大明神 腰以下足
部ノ病ハ立願スレ時靈驗アリト往古ハ弘法大師
ノ緣故ニヨリ天名宗ナリレカ知行主津田氏ノ一
族出家シテ妙心寺ニ住シ後ニ此ノ寺ニ隱居ニ改
宗ニタルナリト

中 高百二十石九斗七升七合 天保度改 入戸

五十七軒

氏神出雲ニアリ

町披誌

出雲

天王社 小祠ナリ
 法各寺 金光寺 淨土宗 知恩院末 本尊阿彌陀
 如來 一尺五寸 開山文覺上人
 醫王山東林寺 禪宗 妙心寺末 本尊阿彌陀如
 來坐像三尺
 藥師堂本尊一尺
 祇陀山耕雲寺 禪宗 妙心寺末 本尊釋迦如來
 坐像一尺二寸
 開山鰲雲和尚
 出雲 高三百七十六石 人戸五十軒 天保度
 旗下士杉浦出雲守知行
 出雲大明神社 一宮 古稱中ノ社 古書出雲社ト

モ見ニ 式内名神大 主神大己貴命 左素盞雄
 尊 右奇稻田姬命 例歲舊曆十月廿五日氏子出
 雲馬路江嶋里中小口ノ舊五ヶ村 花祭舊曆三月
 十五日往古出雲國ヨリ神移リアリタル日ト云フ
 和銅四年辛亥創草ト傳フ
 大己貴ハ即チ大國主命ニシテ素盞雄尊ハ其ノ父君
 奇稻田姫ハ其ノ母君ナリ一説ニ主神ハ天照太神
 ノ御子天津彦根命ト又云フ大己貴ノ妻玉穗津姫
 ト權々ノ話アレド大己貴トスル説ヲ當レリト
 攝社脚摩乳神手摩乳神ニ神ハ奇稻田姫命ノ父母
 神ナリ
 末社 武甕槌命 経津主命 春日大明神姫神此

出雲志

神ハ玉依姫ト云フ

笑殿 少彦名命 素盞雄命 大國主命 笑殿ハ

後右ナリ 後殿ト云フ

境外攝社 黒太夫 大山祇神 俗ニ地主神ト呼

ビ本社ニ詣ツル者先^レ此ノ社ヲ拜スル慣例アリ

石神四個 庚申石 縁結石 乳守石 白山権現

石ノ齒痛トスル

社司廣瀬氏ハ出雲國ヨリ供奉來住シ二十世連綿

タリ維新前迄ハ名ヲ丹後伯耆ナドノ國名ヲ以テ

呼バリ

貞觀十四年十一月廿九日從四位上ノ宣下アリ以

前ノ神位ハ從四位下ナリシナリ

元曆ノ頃ハ蓮華王院ノ御領地ナレヲ以テ社務モ

同院ノ管轄ナリシナリ此ノ院ハ後白河院ノ御本

願ニテ草創アリタル京ノ三十三間堂ノ本寺ナリ

往昔此ノ山中ニ一老翁アリ醜顏緑髮意氣饒樂進

退太健ニシテ動止ハ常アリ里人コレニ逢ヒ問フ

テ曰ハク老翁此ノ山ニ棲ムコト幾許年ゾト老翁

答フ此ノ山ニ棲ムコト千年ニ及ブリト以來コノ

祥事ヲ采リテ一帶ノ村里ヲ千年御トハ呼ビ殿セ

リ

和銅二年遷奉 弘仁九年名神列ニ入り 從四位

上宣下上ニ見エ 名神大延喜式 寛弘五年九月廿

八日勅使皇子御降誕御報賽 正應五年十二月二

京都府立総合資料館所蔵

尊氏起義兵之日致丹精於社下致懇祈於廟前
得勝數步之内開運千里之外是併非尊氏智謀所然
徧倚神明冥助也因今修造本社并上御前三十二所
末社神宮寺以下奉增益神威者也社家宜承知之禱
祈天下之泰平者如件

貞和元年三月十一日 尊氏 判

社司中

明治維新神祇官ヨリ

出雲神社 丹波國桑田郡出雲村鎮坐 國幣中社
列自今官祭被仰出候事

辛未六月 太政官

自後祭式ニハ京都府ヨリ大少書記官來祭ス又ハ

郡長代祭ス

保存金千〇六十四圓下附 明治二十年三月十七日

宮司一員正一位 権宮司一員從七位 稱宜二員
相當從八位 権稱宜三員相當正九位 主典相當
從九位

官費 本殿拜殿神饌所社務所祭器所玉垣物置

私費 祝詞舍 透塀 鳥居 手水舎 假繪馬堂

後鳥羽院上皇御宇元暦元年甲辰九月廿日玉井四
郎資重ナルモ此ノ地ニ來リ濫妨放行スルヲ以
テ院宣ヲ下サル其ノ文ニ云フ

丹波國一宮出雲者蓮華玉院之御領也須給能盛
法師年來令知行何有稱地頭之輩哉年來又不聞

歎ふ年祠

古布經云

神祠松樹裏畫壁筆端奇紫燕巢華表錦鱗躍影池
菖菖上階瘦橘柚覆庭無猶有遺風在年々儼奈儼

同

佐々木宗淳

儼然廟宇是何神素盞雄兼大己貴構基遯矣和銅
年至今靈境浮瑞氣

正月十五日ノ小豆粥 舊慣ニ由リ年々小祭アリ
テ後ニ供物中ノ竹筒ヲ出ダシ其ノ中ニ在ル赤小
豆粥ヲ衆人ニ示ス農家商人コレニ由リテ豊凶ヲ
知ル其ノ形ト色トヲ見テ箱ノ早中晩ノ孰レカ良
好孰レカ不良好ナルヲ豫知ス 支那人某日ハク
是レハ吾カ國ノ往古黃帝カ蚩尤ヲ征伏シタル日

ニテ蚩尤ノ魂魄良民ヲ悩マセシカバ黃帝天ニ祈
リ神ノ告ニヨリ粥ヲ煮テ之ヲ供フ祭リタレバ蚩
尤ノ魂魄靜マリ又害ヲ爲サリシトノ古談アリ
ト知ラズ此ノ社風モ中古唐國振リノ流行シタル
時ニ彼ノ國振リヲ習ヘルカ料又暗合シタルニヤ
氏子 千年村分二百五十戸一千五十人馬路分二
百九十四戸一千六百十七人 江尻部落ヲ除ク明治
三十年

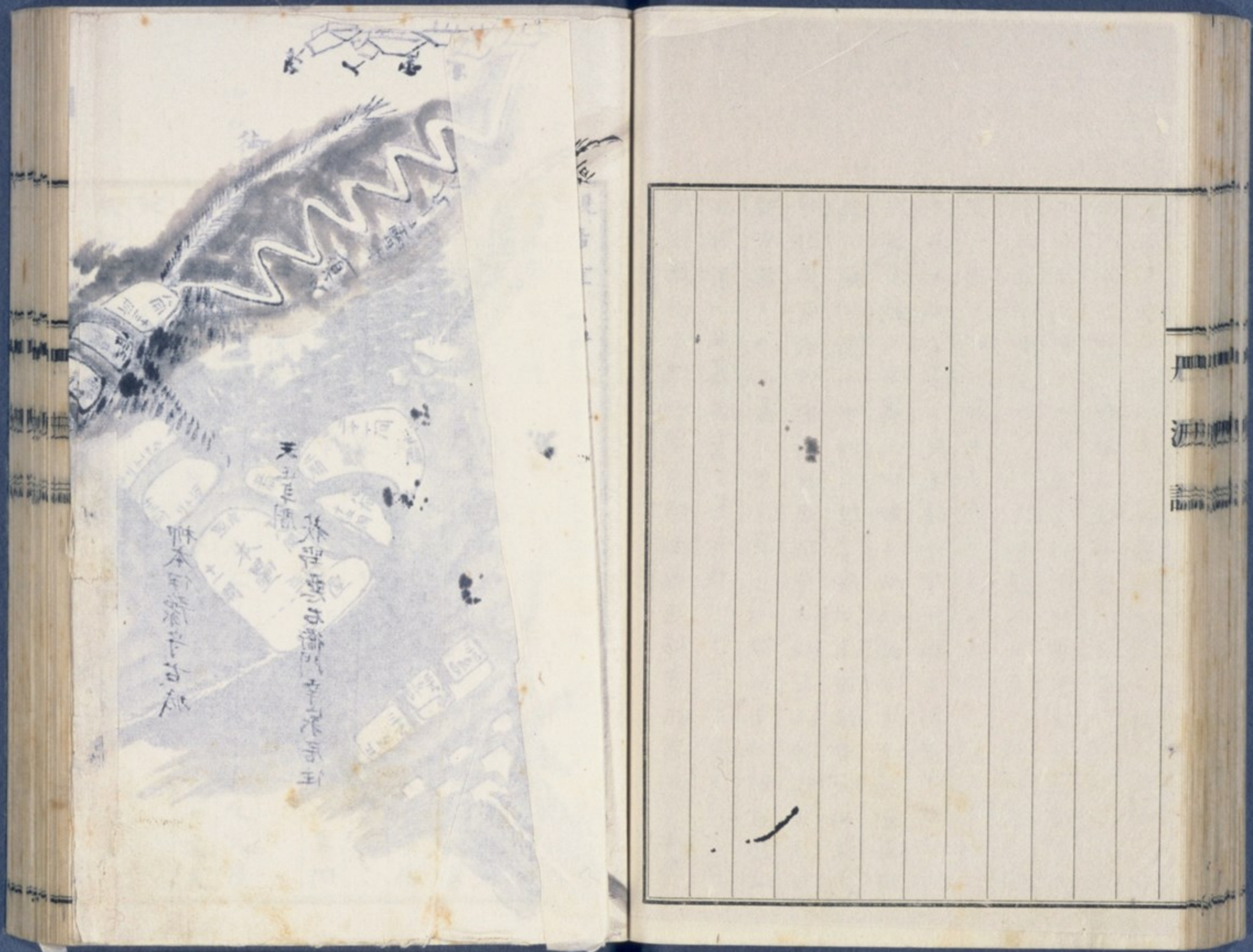
山田龜女ノ傳アリ小口安藤家記中ニ出ダス
應永年間ニ關城主柳本伊豫守其ノ臣安藤八郎範
澄ヲシテ御影山城主ヲシム名倉彦七郎亦其ノ
城代タリ郷士大藁周防守山中越中守廣瀬丹後守

丹波志

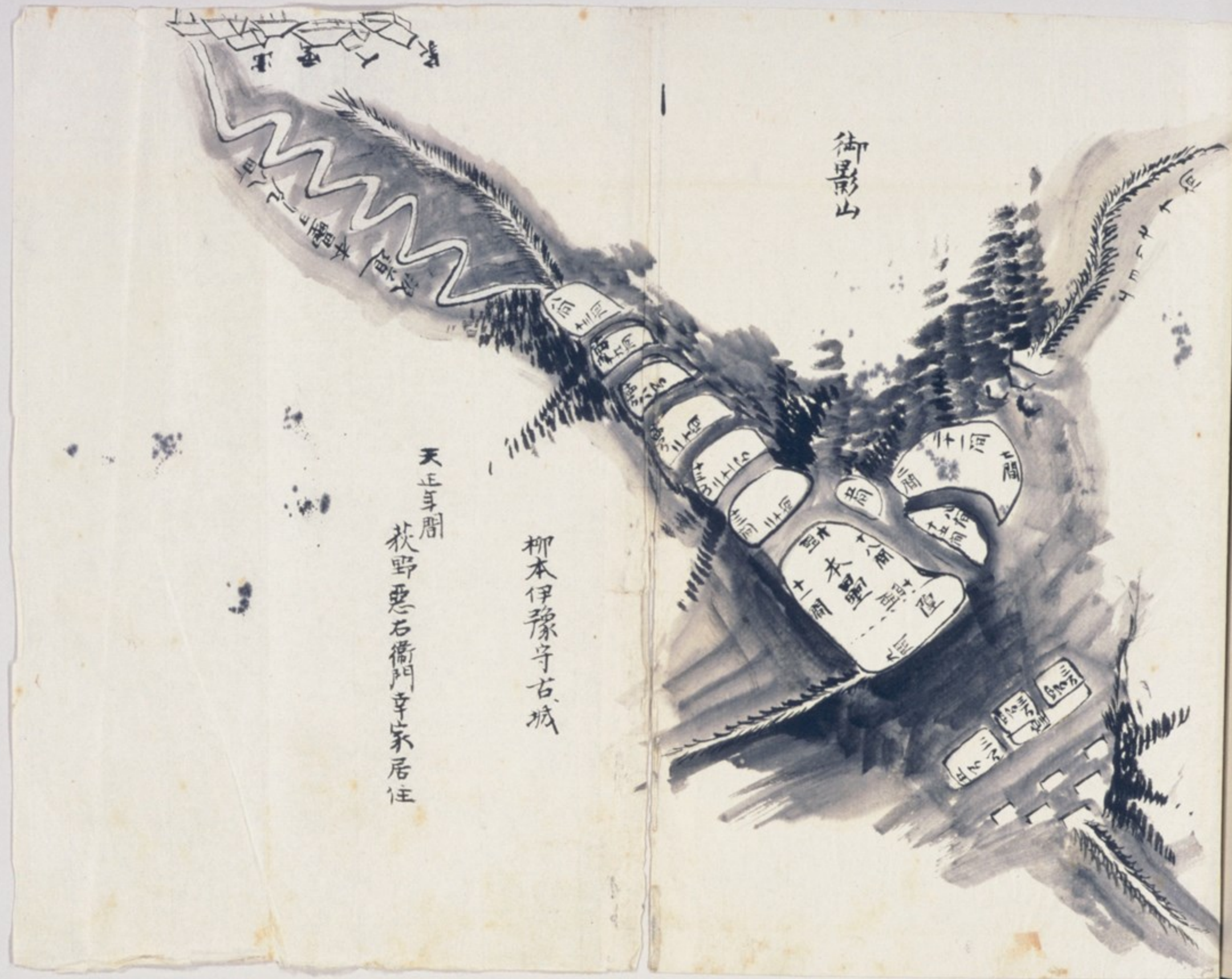
安藤柳本名倉
ハ三河浪人ト云フ

逆心ヲ起コシ柳本ノ臣奥又四郎ヲ擁シテ將トシ
俄ニ來リ攻ム安藤名倉等事ノ不意ニ祭シタルヲ
以テ之ヲ防グニ由無ク殺サル範澄ノ子定見時ニ
齡五歳乳母提ケテ小口ニ遁カル又四郎地方ヲ略
有シ此ノ城ニ據ル定見年長ジテ此ノ始末ヲ知ル
ヤ父ノ讎ヲ復コシト志ス十三年一説ニハ十七年
ノ後應永ノ末年柳本コレヲ助ケ地方ノ豪傑中亦
其ノ事ヲ援ケ小口ヨリ舊友故臣ヲ糾合シテ又四
郎ヲ襲ヒ一戰其ノ志ヲ遂ケ其ノ首ヲ以テ亡父ノ
靈ヲ祭レリ討取ル首十三又四郎ノ子五郎七歳定
見ノ男二助ト云フモノニ殺サル一説ニ云フ出
雲城ニ柳本高齊安藤三河守名倉若狹守彦七郎籠

モリ居タルヲ山内ノ城主藪周防守推寄セラ高齊
ヲ取リ安藤名倉ハ落去リ小口ニ忍居タリ周
防守城ニ入り居ケルヲ其ノ後若平守ノ城主奥又
四郎出雲城ハ推寄セ周防守ヲ討取ル周防守ノ子
某ハ城ヲ落チ中村ニ隠レ居タリ程經テ後明智カ
信長ヲ弑スル時又四郎ガ城ヲ踏ツブレテ新道越
ヲシケルトナン定見時ニ年十八三河守ト稱ス



京都府立総合資料館所蔵



御影山

柳本伊豫守古城

天正年間
萩野悪右衛門幸家居住

京都府立総合資料館所蔵



雲
上

山口

觀音堂 本尊觀世音菩薩 左毘沙門天 右十一
 面觀世音菩薩 本尊ノ丈六尺左ノ丈四尺八寸右
 ノ丈四尺五寸三佛共古像 本尊ト脇立ト共ニ觀
 音トハ奇ナリ 堂各一ニ神宮寺ト呼ブ往昔別當
 ノ住所ナル故爾呼アトカヤ堂内鐵佛ニ尺ノ坐像
 最古ノモノ外ニ象鼻ノ如キモノ一個アリ
 吉祥山極樂寺 淨土宗 京都百萬遍末 本尊阿
 彌陀佛立像三尺餘
 大字山口 高百二十三石五斗四升三合 文久度
 四百二十石九斗七升七合 高三十石代官小堀支
 配
 氏神ハ出雲神社 出雲ニアリ 大神宮社内宮外

町
 誌
 誌

岩平寺城址
奥又四郎ノ居
所前文參考
ノ

宮

阿彌陀森 十間四面 由緒不明

千年山東光寺 禪宗京都興聖寺末 本尊釋迦如

來八寸 開山智證大師 藥師堂本尊立像ニ尺

開山大師一刀三禮ノ作ト云フ 往古千年寺アリ

ヲ中絶シ此ノ寺具ノ迹ヲ續ギ山号トス又金仙寺

アリ 岩鍋山岩平寺ノ七堂伽藍朱印五百石付ノ

モノアリ

金仙寺草創ノ歌

智證

山の名もあきくもむまふ法の水ちをせの事も絶しとおとへハ

終行、ありうせたまふし時金仙寺の覚行坊より

光嚴院御製

つゝのらよんもまゝしよるちのり乃都のうらよん杉風

應仁年間ノ大乱ニ數度ノ兵火ヲ被リ佛像モ大

半院宇ト共ニ燒殘セラレ明徳年中慧門和尚ノ尊

徳ヲ以テ故址ヲ築シ一刹ヲ興コシ巖平寺ト名ツ

ク天正年中ニ香西又六ノ焚毀アリ天正ニ明智光

秀ノ奪畧アリテ中絶シタルヲ文禄中淨泉和尚山

麓ニ一ハ宇ヲ設ケ金仙寺ノ遺佛藥師如來ノ像ヲ

安置シ東光寺ト名付ク

天正年間火災ノ燼餘ヲ以テ六十年後大龍榮樹ト

云フ僧ガ再興シタルモノハ隣村旭ノ杉ナル光徳

寺ニ移シタリト傳フ

鐘銘 并序

町 鼓 志

原夫法鐘功德溥週天上人間良田聲聞悟道見色明
心終符妙用於一源同契真如於物我而歷劫稱讚微
塵可窮也茲屆丹州栗田郡尾口里千年山東光禪寺
住持忠觀乞施于檀度斯鐘已鑄成東臯越杜多終之
以銘之曰

洪惟華鐘 聲震天 百億須彌 六欲四禪
自性般若 渡苦海船 四想頓空 九有妙圓
曩劫無明 夙生愛纏 悉令解脫 究竟言詮
當時惠觀 乞與檀指 治兵功竣 梵音鏗然
聞者證道 聆也忘緣 永鎮東光 載斯萬年
歲癸酉春仲 東臯越杜多書
心越禪師乃書たまへ鐘の銘を見

侍りて

定嘉

安藤三郎右衛門

ふ年寺とて一人乃まづけしねらしハ虫はみせし

東臯心越禪師履歷東光寺鐘鑄由來等ノ記事

東臯禪師名興禱字心越大明浙江金華府浦江縣人
延寶丁巳來朝居于肥州長崎具後應常陸源敬黃門
梅里公之招住于水戶府天德寺大弘洞宗實明眼知
識也頃歲予二子爲明仕于涼公識於禪師因請右件
銘寄東光寺夫東光寺古號金仙寺或稱千年寺智證
大師草創焉數歷大災兵革佛像焚滅院宇廢絕明德
中慧門和尚據遺蹟建禪刹號岩平寺永正有香西之
火天正有明智之亂岩平又賴毀文祿中淨泉和尚結

草堂於山麓安置金仙寺遺佛像師改名東光寺方今
住持惠觀師鑄鐘心越禪師勒銘當洪實何物加焉因
書告永世云

元祿六年癸酉春三月數旦

前ウ府監杜羽傳屋安藤爲定謹誌

東光寺にてよめる

隱居松春 安藤定正弟

あれりてふ年乃寺のさくら花のよもふもとの里よりなかりて

此ノ歌詠寫ナルニシ

千年寺をのみさきまきしに今東芝ちと改めたりとそり

ふる程坊乃あはれなる多程方海の作りたるも葉は乃

ふる像を安をさしけりておとそりて 阿儂

ふふ山ふの光るるさしてはのむひのさちのさよふ

懐古

久我通名

寛平草創梵王臺物換星移已廢貌源氏身兄栖隱處
登臨只見白雲堆

源惟正卿ノニ子此ノ寺ニ隱遁ス源久我姓ノ

祖系ニ係カルヲ以テ大納言通名卿ノ來訪ア

リタルナリ此ノ卿朴翁ト交誼アリ

安藤氏世々伏見宮ニ仕テ宮家ハ崇光天皇十世邦

道親王薨シテ嗣無ク家將ニ絶エントス安藤爲定

宮臣ト識シ貞致親王ノ在スコトヲ所司代ニ進言

シテ江戸ニ赴キ幹旋太勤ム貞致由リテ立テ伏見

家存ス是レヨリ先ニ安藤宗實ノ女京ニ入り伏

見家ニ事ハ邦輔王ニ罷セラレ孕ミ一男ヲ生ム邦

茂王コレナリ嗣トナラントシテ嫡子貞康親王生

マ由リテ之ヲ鹿苑院ニ入ル院先ニ宗山文山ア
リテ皆伏見家ノ出ナリ此ノ由緒ヲ以テ邦茂王ヲ
入院セシメントハ爲サレタルナリ時ハ惟レ室所
將軍家衰頽シ倍臣跳梁シ干戈息ムナキノ頃ナレ
バ宗實コレヲ憂ヘ女ト王トヲ携ヘテ采邑小口村
ニ歸リ安息休養セント欲スルニ丹波亦亂離ノ巷
トナリ明堂相排シ同類相擠ス宗實辛苦經營シテ
一村ヲ齊治ス近傍呼ビテ宮村トシ之レヲ尊童シ
群盜亦相戒メ宮村ハ侵ス可ラズトシ一村具ノ餘
澤ニ浴シテ王ヲ敬愛シ具ノ永年ヲ祈ル王亦年長
シテ慈惠ヲ民ニ施シ山林田野ヲ巡リ荒地ニハ果
樹ヲ栽植セシメテ久遠ノ計ヲ授ケ村ニ醫藥無ク

民族ノ疾病ニ仆ル多キヲ恐ミ心ヲ醫方ニ傾ケ身
自ラ藥草ヲ山野ニ求メ之レヲ調劑シ藥囊ヲ提ゲテ
病者ヲ訪ヒ之ヲ救治シ汲々トシテ仁術是レ施シ
又以テ自樂メリ元龜元年齡四十一ニシテ薨ル村
民老少婦女泣哭相吊ス惠日光院覺圓了空居士ト
諡稱ス山中ヲ相シテ斂葬ス後具ノ薨日ヲ以テ祭
祀ス伏見家ヨリ祭資ノ供アリ明治二十年伏見宮
ノ御直拜モアリタリ

邦茂王所詠二首

子年山嶺のしんもさちをぬふこのはなをさつらうともなし
あしあれ若さううたねらなうさうたうたうたう

邦茂王 改名惟實長松軒惟翁 子快翁 子了翁

山城府志

子朴翁 子素軒 年山

邦茂王不惑ノ年業既ニ志ヲ世外ニ置キ詩歌ヲ以テ志ヲ樂マシメ年山中ト山下ニ八景ヲ撰ビテ之レニ名命シ且其ノ記ヲ草ス八景トハ抱琴園喚梅塢洗耳泉晴月岩愛蓮塘吟聖橋夢雲洞賞竹逕名ヲ惟翁ト改メテヨリ鬚髮蓬々方袖麻袍藜杖ヲ手ニシテ八境ニ道逢シ時ニハ簑笠竹竿以テ十年ノ川ニ釣リ或ハ草菰ヲ秋山ニ採リ又ハ薇蕨ヲ春郊ニ折リ民災ヲ訪ヒ村利ヲ説キナドシ以テ終焉セリ

千年山ニ八境と題す記 長松軒惟翁

都を出で十年あり一とせの程十年の山乃峰の

まゝらたともまひ山口乃里のまゝとまたしみて萬乃事のをむ心をやめ一乃道さくらまほしにれとむくくさぼんまやりのありくめうくくくくくく花鳥乃色根ニふたりやくえんうのかたらくあしき病よあけり猶やむましき心乃すきみやそくらみそなりして深き洞の入りくられたいしちき雲をふるうにこころしたいらうかゝ岩回子うつらうてあひくことの月にくそふきあきつらふきうれたる年あふもあしころりし人乃もねめきてたころあし草乃志とねたたりみて濁みしあぬ蓮をあきらみあふハあううくのたむきとすくむトやと谷川の一木橋に雪

京都府立総合資料館所蔵

夢雲洞アツ中ニ晴月岩同上洗耳泉同上愛蓮塘東光
 前吟雪橋村中ニアリ今ハ賞竹匿今ハ南所喚梅塢
 出雲抱琴園東光寺ノ西隣長松軒ノ隱栖實定実明
 今ヤ洗耳泉舊時ノ如ク湧キ且流レ愛蓮塘水満ツ
 レドモ芙蓉ノ影無ク古時ノ面目覓ルニ由無シ
 山家乃記 隱士朴翁
 千年山乃ふもと抱琴園ハおほらまゝめて隠れ
 ませたまふ所よして阿爺につたつてなほ庭のた
 へすあおたもしくくまみあしたうあを此乃翁ま
 たまやうより後所莊院乃官にめされ侍りしるハ
 うつのそみちあれまうそ久しくうつらの床ハ

夢雲洞アツ中ニ晴月岩同上洗耳泉同上愛蓮塘東光
 前吟雪橋村中ニアリ今ハ賞竹匿今ハ南所喚梅塢
 出雲抱琴園東光寺ノ西隣長松軒ノ隱栖實定実明
 今ヤ洗耳泉舊時ノ如ク湧キ且流レ愛蓮塘水満ツ
 レドモ芙蓉ノ影無ク古時ノ面目覓ルニ由無シ
 山家乃記 隱士朴翁
 千年山乃ふもと抱琴園ハおほらまゝめて隠れ
 ませたまふ所よして阿爺につたつてなほ庭のた
 へすあおたもしくくまみあしたうあを此乃翁ま
 たまやうより後所莊院乃官にめされ侍りしるハ
 うつのそみちあれまうそ久しくうつらの床ハ

山家乃記
 隱士朴翁

中つりあきてしをちやつりくう後し世乃ましそ
 りちちのち更にむししのみしを名をや、西に
 まらひてうやの軒、竹乃とほそいとあせられ
 へ膳をいつたれりとて容齋と名つくちとの
 へ靖節先生歸隱の圖をみつううへしよこと
 をも雲竹、かゝるむこのひくうみつたさ軒
 に嘯傲乃とてをあせて堂乃名とし東軒乃と
 へ とつふ詩を書けみふ静齋公乃筆あり室の
 へとつふ明窓洋几筆硯紙墨皆極精良自是人生一
 樂とつふを板に書たるハ雪皁とつひし朝鮮、も
 うせありれくまふる物琵琶琴お乃しとつ笛
 ハつきともしくありてえとありねとすののめ

ちたれハうちもやうす文もこ園畧のちんかう
 やまと乃うつし繪ひとまらみありける住居の友
 とうとまれす此所のさよちとせ山ひのしにありこ
 をれて松乃ありしうき世の塵をばらひ白雲みや
 この夢をうつ南ハ山祇の森らと急とのありて
 池乃とつりもつとつ藤浪さくたちううて
 やよひ乃す急ハさるうらむらさきの雲にほひ
 ちちうりすこしひつしさるのし一里はうりよ
 白妙乃つりち高くおぬそらよひつるもなよ
 ろつせふへき龜山城ありこの見らさるも山里
 めつすうもさるねと城市のひそくはしちなるを
 おもひやうよつけて翁うらう静に世のこころ

丹波 記

丹波
のうれしむらさひをまゝむるなるうちとくへて
嬉しむらさひにまゝのめあぬ西よハ瑞岩の山あち
しむらさひを主人公をうひさすよハ千とせ川水た
えむらさひをゆくと此ハわくのこころしむらさひに
竹乃まゆしむらさひをふらめて春の鳥夏乃風秋ハ
月冬ハ雪にむらさひハ四時のあさけすくさぬすく
たきありれむらさひの軒ハ猗翠の字をわけて茶
室をうまへ具具をたくまふ湯のけゆる音いとよ
あらすたけこむらさひをかき乃すくまハさうひ木す
よ乃蟬ハ似むらさひぬらぬらむらさひの耳にあらむむらさ
むらさひあらたにむらさひも清く尾口乃里ハおちしよ
のむらさひよつむらさひたれハむらさひのむらさひと田乃面の

以多むらさひ吹く風をまくらみえ聞くといふた
うまむらさひ此里乃むらさひの御時を御母方乃しむ
らさひむらさひしむらさひ明智光秀といふむらさひのむらさひと
らさひのち鎮まむらさひかりむらさひたれハなほあち
さよハ男ふ人おほくむらさひ此りたあおきをむらさひあハ
むらさひハむらさひつになむらさひあしむらさひハむらさひ
むらさひたれハ髪の霜ふらむらさひハの波りせまされと
むらさひのむらさひむらさひのみよむらさひねハつねたお
しむらさひよむらさひ居て文をひらき見ぬ世乃人にま
むらさひまむらさひぬらむらさひ乃しむらさひをうらむらさひぬ
さうひの海山にさむらさひむらさひのれハむらさひ
むらさひうらむらさひに先生の集ハむらさひのむらさひ

丹波
志

そのまはゆりしきりるるを讀むよ
いこよあそむいよすくありしと翁く可也
あそむかあひたれ先生も翁も世を異にすもを
るもねを身をあはせしををおもふ東光寺淨泉菴
はよもひよとあそむしを暮らちよのりたりす
或ハりよまひてかの名つけあそむしよ岩同に
のほきハ谷のしよの聲よのりす洞の戸ほそ
ハくくけたまてあそむ雲のよそうつたりき耳洗ひ
たよいすし泉もあそむあそむす竹乃こち今ハ民乃
青々せしとちすハにほしす竹乃こち今ハ民乃
家ありありぬ雪をあそむる橋ハしよもあそむらの
ためしよもあそむ梅の立えハ枯のこれと鶯もや

とりとらささくもこの世をさうりたまふハ元龜乃
ましある年あれハ百とせよ十とせ餘りの露霜ハ
やあまよけん山人去りて曉猿うあしむとつひ市
ん必りまひしとぬ園の名をたまむるしよをさそ
御忌日一四日十とよかあそむ琴をしよて法樂
みそあふ今さへうこれハ後々乃子孫ハつこその
ほくハつよ事をさそむるしよとつこあそむ筆ニ
うつし家ありもつこもれとて

多摩山ハ乃さそむるうつし信乃れたたのこれよ人のため

とそつあそむし日くけのよつに風やそらうなるをうハ
智證大師よとせの末ととよみし寺院のつよあそみ
して法乃水のたえよしをつあそむり聖海上人あそむ

おとくし宮居に詣り、その駒犬をたつねある
ひすそこの田中に根柢をつき、沼乃浅きよむし
を拾ひあつち木蔭よりさひらをより清き流子竿
をあげし、國分寺をとあらしめて禪門の商量を
まけし愛太子乃峰をもちて教乗乃議論をいとし
大れこ乃山住の樂あめつちの間又たさく人あら
しと自足ありしと獨誇りて餘念を雲水こそあり
のし速に草と同一く朽ちんことをあまふ時
貞享三乃とし卯月三日の夜隱士朴翁ねまぬのま
くらをもちたけてあましをありぬ

隱士朴翁に贈ることは 光國

我家に隱士乃曾祖父長松軒乃かきたるふ八境乃

記をうつしとつこと久し常ニ其のこと葉乃うる
ゆしきを賞しその文字のさたうあらぬを憂ふ此
乃らら真蹟を隱君よりつたへりりそとくしものも
しとあまし校ふに日頃あみときかきし文字は
やくあらしを得しうらうら思ふことさうあ
し今そ乃真蹟をうしおらるにた、うもたらん
も無下られ、とてこしおれしつ書付てその山
おこの笑を催は

ちるうのあらしを見えし年山ことしたる君の書を

午後、久を疎閑ちよん外あり、雖も然れ冷
く標はあましつ何程一尾あゆみしを
紹生乃ちをいふこと

京都府立総合資料館所蔵

了翁諱ハ定明通稱ハ新太郎快翁ノ子ナリ幼ニシテ學ヲ好ミ京都ノ碩儒藤原惺窩ニ師事ス伏見宮ニ召サレ從六位右京亮ニ任叙セラル、モ素志ニ非ス建仁寺畔ニト居シ常ニ禪三昧ニ入り閑居以テ娛ミ病ヲ稱シテ仕ヲ辭シ小口ニ歸リテ八景ヲ撰ミ風流ヲ以テ終焉ス寛永十四年享年六十一
朴翁諱ハ定爲通稱ハ新五郎了翁ノ子ナリ幼ニシテ父ヲ喪ヒ嫡母河合氏ニ養育訓誡セラレ夙ニ學ニ志シ借讀寫儲スルモ僻地師友無ク志ヲ遂クル能ハズシテ母訓ノ空シカラシテ憂ハ京ニ入り冷泉爲景卿ニ事ヘテ經義ヲ問ヒ木下長嘯ニ就キテ和歌ヲ習ヒ伏見宮眞致親王ニ臣事シ經書ヲ午書

シテ親王ニ教ニ當時版本多カラズ從テ寫シ隨テテ教ノ艱苦事ニ從テ數年又琴琵琶ノ妙手ヲ撰ミテハ之ヲ薦メ委曲輔導ス明曆二年其ノ功ヲ以テ從六位上ニ叙セラレ右京進ニ任セラレ三年ノ夏親王ノ妙將軍徳川家綱ニ嫁シ東行スルヲ送リ歸ルヤ右京亮從五位下ニ任叙セラル年五十内匠頭從五位上トナリ致仕シテ小口ニ歸ル曾祖維翁ガ設ケタル抱琴園ノ荒廢ヲ修整セラレ之ニ居リ陶判明ヲ景慕シテ其ノ文詩ヲ繕讀シ歸去來ノ圖ヲ自ラ描キ野田雲竹ヲシテ其ノ辭ヲ書セシメ之レヲ壁間ニ掲ゲ身以テ之ニ擬シ悠悠々自ラ娛ム先後ハ禪味ヲ賞讚シテ東光寺和尚ニ參シ頗得ル所ア

丹波
志

リ元録十五年八月病ニ歿ス年七十六妻山田氏ニ
 男ニ女ヲ産ミテ死スニ男ハ素軒ト年山ナリ女ニ
 人ハ嫁ス後妻湯浅氏亦ニ男ニ女ヲ擧ゲ
 素軒諱ハ爲實朴翁ノ長子ナリ父ニ續キ伏見宮ニ
 事ハ右兵衛尉ニ任セラレ又第年山ト共ニ水戸侯
 ニ事ハ彰考館ノ史局ニ入り禮儀類典編纂ノ總裁
 トナリ祿七百石ヲ給セラレ博雅淹通好ミテ和歌
 ヲ詠ス
 年山前諱爲明後ニ爲章ニ改ム通稱ハ石平又新助
 ニ改ム朴翁ノ第二子ナリ兄素軒ト共ニ學ヲ修メ
 中院通茂御ニ就キ和歌ヲ學ブ父蔭ヲ以テ兄弟共
 ニ伏見宮家ニ事ハ又水戸侯ノ辟ニ應シ大日本史

禮儀類典ノ編輯ニ參與シ京紳諸家ノ秘書ヲ探リ
 寫シ得テ水戸ニ送ル等ノ功勞ヲ以テ祿三百石ヲ
 給セラレ義公ノ命ヲ含ミテ大坂ニ赴キ僧契冲阿
 闍梨ヲ訪ヒ萬葉集ノ注解ヲ作ラシムルニ於テ大
 ニ勉メ義公ヲシテ其ノ志ヲ遂ゲシムルニ力アリ
 人トナリ節操ヲ重ニジ事ヲ處スルニ苟セズ嗣子
 無キヲ以テ人勸メテ養子ヲ爲サシム答ヘテ曰ハ
 ク天命ナリ安シセザルベカラズト義公命ジテ食
 祿ヲ増サシム有司コレヲ送ル辭スルニ嗣無キヲ
 以テ之ヲ受ケズ享保元年十月病ニテ歿シ家断ユ
 年五十著ス所紫女七論榮華物語考年山紀聞年山名
 聞年山集宇津穗物語考年山草常陸帶等アリ大

正八年後五位ヲ贈ラル

朴翁ノ妻龜女ハ隣村出雲ノ山田道夢ガ女ナリ父
歌道ニ長カルヲ以テ龜女ノ風流ハ之ヲ家庭ニ得
テ誦誦スル所ノ和歌千首ニ上ル織縫ニエヒシテ
婦徳ヲ具フ朴翁ノ母河合氏コレヲ聞キ聘シテ朴
翁ニ妻ハス琴瑟相和シ家裡常ニ春風ニ吹カル名
聲夙ニ馳テ禁掖ニ召サレ御筵ニ侍セシメラレ後
水尾天皇賜フニ今式部ノ號ヲ以テス常ニ罷ラ兩
宮ニ承ケ賞賜セラル、所跡カラズ寛文八年盡三
十九歿ス長子爲實遺稿ヲ編輯ス中院通茂御題シ
テ今式部集ト曰フ世ニ梓行ス

深海皆山

北郊數里寸眸中院几倚然萬慮空曉色千年山上
雪朴翁遺愛憶高風

大益山呼ビテだいき山ト云フ俗傳ニハ此ノ碑石
ヲ載スル石造ノ大龜アル故ノ名トシ大龜山ト書
ケルモアルガ升ハ龜ニハアラデ具顯ナリ俗ニヒ
キト曰フ龍ノ子ニテ重キモノヲ負フヲ好ム
トノ支那書物ニアルヲモテ鬼面大鉢ト同ジク寫
シ象リタルナリ

從五位下出雲守平朝臣杉浦氏正職神道碑

正職字維天者東武之産也其先參河國越後守

正友也正友嘗事



東照大神君以攻城野戰之勞奮芳烈于前朝矣而繼
至于內藏允正昭々々自少奉仕

大猷院殿大相國而及于 嚴有院殿 常憲院殿二
代任諸職也數矣遂以御留守職而終焉食邑八千
石真傳于正職々々承家崇軌執事汲直不墜家聲
元禄十三年庚辰始蒙拜爲錢砲百人組之頭實永
戊子春又除御書院番頭而叙爵從五位下稱出雲
守其爲人也溫柔敦厚而善接人善愛物或論人之
勞則揚公抑私或出家之制則不寬不煩聞善則悅
見惡則懼殆有恒者乎翌年己丑之秋奉

家宣大君之命往守殿府城砥節勵行直道正辭足以
幹事故雖里兒巷婦亦皆知其名聲焉翌年冬十月

任滿而歸也是年寶永八年辛卯不幸嬰疾廢跡不
驗正月十六日歿焉嗚呼哀哉享年四十有一迺葬
于武之淺草謚泰山稟命不融登庸日寡群公百僚
誰不爲之咨悼自始縮髮深志于學但研幾道奧涉
獵史編能通武門之技者雅矣且精半弧之術原其
射法之所由也前年朝鮮國聘使之中有武官李浣
者感秀射藝而孤矢之制與吾朝大異是以汲々就
學焉遂極其闡奧矣抑又嗜中華之音在前隨明僧
心越禪師屢參禪締支許之契雅談佳話常致中華
之風致又潛心琴學抱琴遊于師門有年于茲日就
月將之功纔得其妙趣呼居名琴軒自號琴川每有
公暇則于花月自彈而娛或有佳客高明至則共

樂不厭其所詠之詩賦及和歌不知幾篇其遺檢及
今有二十餘卷又自編琴書名東臯琴譜既刊而藏
秘庫真是文雅武備之人也已臨屬續而痛曰吾平
日所作詩武若有足採者爲吾一撰勒石以樹采地
丹波洲栗田郡十年山之下於其人既沒而德音猶
存者亦賴此紀述乎非敢釣名索譽之謂後死之者
爭得譽之乎茲刻其一二篇迺收淚銘之曰

惜哉大德 懷珍天遊 一朝千古 何處相求

左架典籍 右備戈矛 懿測儀仗 虛余芳猷

巍巍山嶽 洋洋水流 花謝日慘 風散雲憂

琴書尚在 貽厥孫謀 十年山下 千羊誰留

僅踰強仕 萬事忽休

維時寶永八年龍驤辛卯四月廿五日

山字 平野 元ハ今ノ旭村美濃田所屬ナリト云

氏神 松尾大明神 旭村美濃田ニアリ

阿彌陀堂 本尊行基ノ作ト傳ハル

馬路村 大字馬路池尻大芝原新田

此ノ村ハ郡中ノ大村ニシテ且其ノ富裕ナルヲ以テ有名ナリ謂ハ所ル馬路千軒ノ稱アリタル所ニシテ地ヲ郡ノ東部ニ占メ西ハ大川ニ沿ヒ東ハ千早村ニ疆シ南ハ河原尻河原林ニ續キ平野膏腴ニシテ耕耘ノ便等郡中ニ覇タリ文獻ノ徴スベキ無ク古政知ル可ラズ僅ニ鈴木伊兵衛ナルモノ、古年記ノ存スルニ由リ村高ヲ定メタリ蓋伊兵衛ナルモノハ幕府ノ小吏ニシテ代官タリシナラシ歟

爾後田主ノ變遷ヤ荒蕪ノ開地アリテ明治初年高千五百二十石九斗三升ト定マリ内十九石二斗ハ山林年貢トス元錄五十年前ハ九石六斗ヲ小物

馬路村

成トシテ納貢シタリ然ルニ翌寅十一年旗本ノ杉浦家ノ知行所トナリ山林中嶋等ノ小物成トシテ九石六斗ノ增高ト為リ合セテ十九石二斗ヲ村本高ニ組入レタリ小物成トハ維新後ニ謂フ所ノ雜種税目ナリ之レヲ除去シテ田畑正税

一千五百一石七斗三升 此ノ段別一百一十一町三段九畝二十八步二厘

内一千三百十三石八斗三升五合

此ノ段別九十七町四段九畝二十八步二厘ヲ兩番高ト呼ビ

一百八十七石八斗九升五合

此ノ段別十三町九段八畝二步ヲ小番高トス

馬路村

高一千五百二十石九斗三升 文久年度

一十二石五升七合 大芝原新田 文久年度

一百五十八石四斗二升 池尻

石ノ内新田ハ代官支配トシテ幕府直轄ナリ

大番中番ハ番ノ別アリテ前示兩番トハ大番ナル人見中川兩姓ト新家ノ者トヲ合稱シ小番トハ兩名外ナルモノヲ呼ブ名稱ニテ村高ヲ各族ニ二分シ各様ニ負擔スルノ異例アリ他國他方ニ此ノ如キ村俗ヲ認メ得ルヤ否又此ノ番外ニ水呑百姓ノ稱呼アリ穢郷ト呼バレタル部落モアリ而シテ村治上ノ勢カハ一二兩名ノ專有タリキ後文ヲ見ヨ

人戸三百十六軒 元禄年間ノ書ヒゲ

馬路村志

人口千二百五十八人 男六百三十五人

女六百二十五人

高持男三百九十八人 女三百五十六人

水吞男二百四十三人 女二百六十九人

明治十年三百二十戸

池尻六十七戸

酒株三戸 鑄物師株三戸 醫師三戸 明治初年

株ハ賣買ス可ク鑄物師ハ勅許ナリ醫業ハ隨意

牛五頭馬八十頭 保津濱通ニ用元祿年間

田畑小作當米一段ニ付一石六七斗以上二石迄

質入一段ニ付銀二百匁以上七百匁ニ至ル

第一米麦旱地ニハ大豆ヲ作ル五段百姓綿作半段

ヲ許ス田畑制度嚴重ナリシガ維新前數年百合根

茶桑ノ利益アルヲ以テ之レヲ許シテヨリ名産

ノ馬路小豆ノ外諸品ヲ栽培スルコトナリ綿作

制限法モ崩レタリ

維新後早々桑田郡貢納大豆石代相場金參圓八十

九錢八匁一毛二絲豆年貢取極

近村行小使賃定

杉浦同支配地 池尻三口九合 河原尻四合

龜山一升 保津一升 毘沙門八合

國分八合 江嶋里七合 中村五合

北中村五合 美濃田六合 山階五合

杉六合 氷所一升 屋賀四合

馬路村

西田七合 觀音寺六合 廣瀨一升

八木嶋一升五合 八木一升川關七合

今津五合 大芝原四合

右ハ公用ナルヲ以テ公納貢米ヨリ引ク杉浦ノ認定スル所ノ舊方ナリ

氏神 出雲神社 千年村出雲ノ部參着ノ

長宮 所祭不詳 人見祖神社 中川祖神社

大將軍社 北神社 八幡宮

車塚 村東田畝ノ中ニ在リ東西ハ北ニテ十間

リ南ニテハ二十間マリ南北ハ大凡三十間 周廻

塹壕ノ形勢ナリシガ今ハ闢キラ水田ト為レリ字

シテ堀ト呼ブ西方ノ畑地ヲ字シテ昔備ト云フ故

老ノ傳フル所ニ據レバ昔備某ガ此處ニ居テ元明

天皇ノ御葬式ニ從事シタリト隣村旭ノ元明院ノ

部ヲ參着セヨ多紀郡^{雲部}村縣守ニ在ルモノト相

似タリ山城國深草野桓武天皇陵東山本谷ニモ在

リ口碑ニ天皇ノ鳳輦ヲ埋收シタル所ト云フ往々

相似タルモノアリ

小川月神社ハ村社格ニシテ大川ニ接スル野中ニ

在リ延喜式神名帳ニ桑田郡十九座ノ中ニ於ケル

名神大トアリ 此ノ社ハ諸國ニ存在スルモノニ

シテ天照太神ノ弟神ト云フ月讀トモ月弓トモ又

ハ月夜見トモ書ケリ元ハ大川ノ西ニアリシガ川

流ノ移竄ニ由リ東方ニ轉徙シタルアリ此ノ地一

馬路村

丹波志
帶小川莊ナルヲ以テ小川月讀トアルベキヲ略言
シタルモノトカヤ 小字月讀ノ地一町五段ノ廣
袤アリテ桑田郡名所十七個中ニ入レテ月呼
ノ森ト云フハ此處ナリト故老ハ言ヘリ川西千代
川村ノ小字ナル小川モ同ジト云々口碑ニハ丹後
餘佐郡真井原ノ末社ニテ莊嚴ナル宮殿ヲ此處ニ
移シタリ其ノ年月ハ詳ナラス云々現今境地ハ二
十五坪ニテ祠下ニ合五勺式内神社トシテハ見ル
影モ無キ狀況ナリ應仁ノ乱前ニハ斯クハアラザ
リレナラシ此ノ御神ハ伊弉那岐御神ガ右ノ御目
ヲ洗ヒタマヘル時ニ生マレマシクルナリトカヤ
貞觀元年丹波國從五位下小川月神社從五位上ト

三代實錄ニモ見エ明治ニ至リ神社ノ調査アリテ

桑田郡第四區馬路村

其村鎮座月讀社ハ延喜式内小川月神社ニ相違
無之段今般詮議決定候條此旨相違候也

明治十年六月 京都府

- 梅嶽山長林寺 禪宗京都妙心寺末本尊觀世音菩薩
- 薩長二尺 鎮守社辨財天 開山ハ北嶽禪師
- 塔中五箇寺 松林菴 友松庵 妙雲菴 清淨菴
- 陽雲菴 孰レモ境内ニ在リタルガ明治初年ヨ
- リ漸次絶滅ス元祿中ニハ十五菴アリタリト云フ
- 導養寺ノ虚空藏堂アリ現存ス本尊ハ良作ト云フ
- 大甲庵 念佛堂アリタルモ亦絶滅ス

紛塚 此ノ塚ハ圓形ニシテ大ナルハ徑五六間
 小ナルハ二三間草樹ノノエニ莽生シ數十個點々
 シテ田中ニ散布シ行路者ノ歩スル毎ニ塚況自然
 ニ面目ヲ轉廻シ人ヲシテ其ノ數ヲ算スル能ハサ
 ラシム故夫曰ハク大霖アレバ少許ゾ土沙ヲ流
 下シ其ノ形量減少セリ田作ノ妨礙ナルモ之レニ
 觸ルレバ崇ルヲ以テ之レヲ削リ取ルヲ得スト今
 ヤ此ノ如キ説ハ破ラレ塚ト共ニ打テ毀サレ了シ
 ヲ其ノ形ノ似タルヲ以テ饅頭塚トモ呼ビ近邑ヨ
 リ來看ルモノナリヘアリタルナリ
 城迹 天正ノ頃内藤五郎兵衛ナルモノ茲所ニ居
 住シ其ノ塚迹ハ村ノ南端ニ在リ

駿河屋敷ハ中川駿河守ノ居所 駿河守ハ丹波七
 頭ノ一ナルト總論ニ出ダス
 堀内ハ中川攝津守ノ本邸ニシテ其ノ堀モ存シ其
 ノ家ヲ字レテ堀ノ内ト呼ブ子孫住ス

領主沿革
 藤原藤房 後醍醐天皇ノ御時
 山名時氏 建武三年 細川頼元 明德三年ヨリ
 内藤備前守 天正七年 明智光秀 元正七年
 堀尾山城守 天正十一年 丹波少將秀勝 同年
 金吾中納言 同十九年 石田三成 文祿元年
 前田德善院 同三年 徳川氏代官 慶長初年
 杉浦内藏允 元祿年間 久美濱縣 明治初年

馬路村

丹波志

京都府 明治

村治ニ付キテハ知行主杉浦ハ江戸ニ在リ代官一
名ヲ送リ陣屋ニ在ラシメノ行政收税輕罪處分等ノ
事ヲ掌ラシメタルガ平常事務少ク且又百里外往
来ノ煩費ヲ省カンガ為ニ在村ノ高持ニシテ舊家
人望アル者ニ命ジテ代官タラシメノ附屬ノ小吏四
名トニ由リ村治ノ事ニ當タラシムルトト為セリ
代官給料六十五石ナリシカ人見又ハ中川ヨリ之
レヲ勤ノシメ五人扶持金拾兩ノ年俸トナル一人
扶持トハ一日玄米五合ナルト總論以下諸所ニ示
スガ如シ
代官ノ下ニ庄屋年寄アリ庄屋役料米六石年寄ノ

馬路村

給料少分此ノ内ヨリ引ク右割方六石中ノ四石五
斗兩番ハ一石五斗小番ハ渡シ更ニ役人ニ交附ス
村方ヨリ代官ハ綿小豆ヲ歳暮ノ祝儀トシテ贈ル
ヲ例トス
大川沿岸ニ一小部落アリ土手者ト呼バレ後ニハ
單ニ土手ト呼バレテ平然タリ小作下駄草履ノ直
シヲ業トシ名アリテ氏無シ明治初年久美濱縣ヨ
リ人民一般ニ姓名ヲ戸籍ニ登録セシムルヲ以テ
此ノ部落民ニモ姓氏ヲ書キ出ダサシム惣代某々
村役人ノ家ニ至リ門前ニテ草履ヲ脱ギ穢物ノ者
家ニ要入ルアテ許ハ履物ヲ用ヒシ家ニ入庭上ニ頭ヲ附
ケテ言フ檀那様何ニトナリトモ私等ノ為ニ苗字

御附ケ下カリマセ役人曰ハク是迄ニ苗字ハ無
 カリシ乎左様ナリ土手トシテ置カフ乎惣代相顧
 ミ相談シテ答ヘ曰フ檀那様今スコシ善キモノヲ
 御附ケ下カリマセ役人曰ハク然ラバ堤トセヨ惣
 代等大ニ喜ビ唯々トシテ拜辭シ去レリ今ニ於テ
 土手ノ一部皆ソノ堤ヲ以テ氏トス
 此ノ人種古來殺生ヲ嚴禁シ目前魚族ノ群生スル
 アルモ捕獲セス曰ハク吾々ガ世間カラ嫌ハルハ
 ハ先祖ガ殺生ヲ為シタル報ナレバ之レヲ止メ來
 世ニハ普通ノ家ニ生マレ此ノ苦ミヲ逃レタシ云
 々ト是レハ本山本願寺ヨリ教ヘテレタル所ヲ堅
 ク守リタル所ノモノトカヤ

馬路村

小字三日市ハ村東ニ在リ 往古毎月三日近村ノ者
 相集マリ物々交換ヲ為シタル所ノ起原ハ國分
 寺千年記村字國分ノ盛時ニ在リト云フ此ノ風習ハ
 維新前慶應年間マテ持續シ當時ハ七月十三日ニ
 盆期ノ必要品ヲ露店ニテ賣リタルモ古式ノ三ノ
 日ヲ用ヒタリ安政年間ニ各村ニ商店ノ謂ハ所ル
 萬屋式ノ販賣店續々出テ来ルヨリ此ノ十三日市
 ハ振ハスナリ遂ニ廢絶ス當年賣品ノ主ナルモノ
 ヲ揚グレバ大瓦瓦ノ如シ
 榎榎 線香 抹香 差鯖 沙糖 塩著
 位牌 塔婆
 差鯖トハ塩漬ノ鯖ニテ極ノテ鹹キ品ナリ孟蘭盆

中ハ每食精進ニテ七月十六日ニハ精進明ケト言
ヒ之レヲ喰フ門徒宗ヲ除ク外他宗皆此ノ習慣アリ
リタリ

當日ハ業ヲ休ミ出雲神社ニ参詣シ此ノ市ヲ見舞
フ出雲神社ノ禰宜烏帽子ヲ冠リ白衣ヲ着シ守札
ト神酒ヲ搗ヘ来リ往來ノ者ニ與フ當年出生ノ者
去年ノ七月十三日以後ノ出生者ニ災難除ケノ祈
禱ヲ為セリ

大芝原ハ文字ニ示ス通りニテ八木ノ城主内藤備
前守勢ト保津五苗勢トノ交戦地ナリシトノ口碑
存ス今ハ開墾セラレテ畑トナル

三軒屋ハ川端ニ在リ船渡場アリ渡船新造ノ時

ハ其ノ株主ハ領主ヨリ米若干ヲ給與保助シタリ
船長ハ五間一尺八寸幅六尺六寸一ヶ年運上錢五
十文但レ六月八月ハ免除シタリ
此所ニ堰ヲ作り田水ヲ引ク

細川幽齋

杣木云く予年カ川ヲさミナリ

いそちり田ノモク

三軒屋ニ鑄物師松村氏アリ我孫子ヲ姓トス北兵
田郡神吉村ノ阿祇園寺ノ梵鐘ヲ鑄ル元ハ神吉ノ
八幡宮ニ奉納シタルモノ銘ニ藤原朝臣政次勝兵
衛政信藤ハ政道ノ三名ヲ刻ス保三年三月ノ文
字見ニ傳ニ云フ鍋釜ノ治ユハ河内ノ國ノ我孫子

馬路村

ニ始マリ近江ノ辻村之レニ次グ其ノ元ヲ繹スル
ニ白髮王ニ我孫子姓ヲ賜ハル

開化天皇一産湯産隅一彦坐王一〇一〇一〇一
白髮王

成務天皇ヨリ輕ノ地ヲ賜ハリ輕ノ我孫ト云ヒ後
ニ子ノ字ヲ添ヘタリト 今モ鍋釜類農具類ヲ製

造ス
部落池尻ハ古稱池邊郷ノ遺迹ノ存在スルモノト

カヤ近傍ノ池ハ其ノ所ヲ偲ブ池邊郷ハ今ノ江嶋
里中村出雲ハ口馬路今津杉美濃田山階印地等ノ

地ナリト云フ
名産馬路赤小豆ハ維新後其ノ産出ヲ減セリ升ハ

稲田ニ石灰肥料ヲ施用スルニ由ルト云フ此所ノ
小豆ノ名聲ヲ博得スルハ粒ノ大ハニ由ルニ非ス

色ノ美醜ヲ語ルニ非ス其ノ煮テ皮ノ破レサレニ
アリテ粒飽トシテ最好適品ナレバナリ其ノ管形

ニシテ堅テ之レヲ積メバ數粒ヲ重メベシ故ニ
京坂ノ雜穀商人ハ之レヲ以テ其ノ真偽ヲ試檢セ

リト云フ今ヤ其ノ産額ノ減耗スルノミナラズ其
ノ形質ナハ古ニ劣リテ聲價ヲ落トセリ之レニ反

シテ船井郡ノ富本村氷所ノ邊又ハ氷上郡國領村
ノ國領邊ニ良種ヲ産ス然レトモ其ノ管形ナルハ

馬路ノ産ニ限ルト云フ腹ヲ切ラヌトノ點ミアリ
處無僧取締所アリ本山明暗寺ノ出張ナリ重勝院

馬路村

遺地ヲ以テ之ニ當テ虚無僧一名常住シ不正
虚無僧ヤ廣虚無僧ヲ檢束ス元來此ノ僧ハ多ク武
士浪人ノ果ニテ勤ニスレバ午荒キ舉動ニ出テ布施
ヒガレ者ニ向フテハ坐シテ去ラズ議論ヲ闘ハセ
無知無力ノ農家ヲ苦ムル丁少カテハ徳川初代將
軍ハ大亂後ソノ據所ヲ失ヘル士人ヲシテ據ル所
アテシノントテ一月寺明暗寺ヲ公許シ浪人ヲ宿
止セシムルヲ許シ其ノ寺主ヲシテ嚴重ニ取締
ラシメ其ノ効果大ニ看ルベキモノ有テシメタリ
然ルニ其ノ弊害モ少カラザリシカバ尤ノ如キ標
示布告等ヲ出ダサバ爾ヲ得ヌトハナレリ
近來村々ハ虚無僧徘徊シ木賃米代も拂はず

押テ止宿以多し其止合カモ強徒ハ族も有し
相少ハ不届キ美し多し右ニ付據テ止宿致
させハ村にも有し其ハ以テ外にも違
テ若石作を候ニテ押而宿をう成申張り又ハ強
而合カテ召捕係申す族も有し其ノ所ニ其人
ハ尸出召捕差出さすべく也

右ニ通可あらむもの也

本寺ノ祿高午石以テ巨多ノ浪士ヲ養フニ足リ一
錢一鉢其ノ日ノ知行タルベシトテ尺八ヲ鳴ラシ
テ門戸ニ立テハ一錢一鉢ノ一毛ニテ現今ハ之レヲ
施與セザル可ラズトノ規律デアリシニ明治ニ至
リ其ノ笛調虚鈴ヲドテ吹奏セバ六段トカ鶴ノ巢

馬路村

馬路村志

籠モリナドノ俗調ヲ吹クニ流レ真似虚無僧ノ往
来スル有ルヲ以テ京都府ニテハ遊藝師トシテ取
扱ヒタリ而シテ真僧ハ本山明暗寺ガ幕府ト共ニ
亡滅シタルヲ以テ東福寺ニ籍ヲ置ケトナレリ
并ハ該寺ノ開山ト明暗寺開祖ト関係アリシ故ト
ゾ開祖普化禪師ノ傳記ヲ看ハ其ノ梗概ヲ知ルベ

會合印 淡王 〇
京都明暗寺印
本則保子某

子改 丑改 寅改
河平 六月廿九日 七月廿
何年 七月廿九日 翌年
三月廿九日

右ハ鑑札
ノ表裏

丹波國或三丹州日敷
逗留往返許容考也
年月日 明暗寺 〇



取締役僧ノ在住スラ相應ノ村費ナルニ之レガ為ニ一
院ヲ設ケルハ村ノ經濟ニ影響スル所少カラズ而モ
猶コレヲ為サハル可ラホルハ該僧ノ弊害ニ堪ヘ
ザルヲ以テナリ近村ハ其ノ利ヲ受ケト云フ
東條道西

天文年間ニ東條道喜ナルモノアリ天性勇悍ニシ
テ大志アリ細川氏ガ丹波ヲ領スルニ當タリ郷族
ヲ率ヒテ之ニ属シ内藤備前守元定ト戦ヒ軍敗レ
陣中ニ歿ス 此ノ内藤ト云フハ木城主ノ子アリ道西ト云フ
初代ニヤ
時ニ年十五難ヲ避ケ京西嵯峨ニ之カントシ山溪
ヲ跋涉ス數十戰アリ途ヲ塞キ流民ヲ掠奪ス道西
ノ過ケルヲ認メ遮リ留ム道西衣服ヲ脱ギ之ヲ與

丹波
遊藝
志

フル爲シテ帯ヲ結ビカヲ提ゲ數賊ヲ突倒シテ逃
走ス賊衆怒リテ追ヒ迫マル道西カヲ揮ヒ大聲怒
叱スレバ賊忽ニ躊躇ス道西悠然トシテ棄テ去リ
天龍寺ニ至ル長老策彦ハ道喜ノ舊交ナルヲ以テ
厚ク道西ヲ過シ爲ニ室ヲ龜阜ニ築キ居住セシム
偶々馬路村民相謀リ道西ヲ推シテ將ト爲シ其少
父ノ讎ヲ復セシメントスレドモ京師大ニ乱レテ
事成ラズ十六年策彦長老ガ將軍義晴ノ命ヲ奉シ
明國ニ使スルニ會フ道西年十七隨フテ西航シ明
羊歸朝ス嘗テ騎射ヲ習ヒ頗ソノ妙境ニ入ル強弓
長箭其ノ鏃ノ重サニ三斤人皆コレヲ畏重ス是ノ
時ニ當リ天下ノ乱逆年ニ熾ニシテ停止スル所

ヲ知ラス道西モ亦ソノ適從スル所ヲ得ズ終ニ意
ヲ決レ隱ラ大堰川上ニトシ復出デズ慈惠ヲ民ニ
施シ以テ樂トス爲メニ村人ノ懐ク所トナル常ニ
愛宕神ヲ崇敬シ日ニ之ニ詣テ毎晨星ヲ戴キヲ出
ヅ人ソノ行クヲ見テ呼ブニ明星郎ヲ以テス登路
ノ嶮峻ナルヲ以テ行人コレニ艱ム道西ソノ道ニ
當タルノ巨岩ヲ深谷ニ轉ジ大石ヲ投ケ路ヲシテ
往來シ易カラシメ一西毎ニ石標ヲ立テ五十石ニ
シテ完ク詣者ニ便ス人呼ビテ道西ノ道石ト曰フ
道西ノ日參スルヤ其ノ初メ天狗ノ怪ニ遇フ數ク
ナリ時ニ土石ヲ擲テ又ハ火片ヲ撒ス道西即チ叫
ビ謂フ我レ當社ノ神ヲ敬奉シ日ニ之ニ登ル汝

丹波
志

等怪ヲ爲ス何シノ爲メゾヤト怪乃チ止ム
人見久兵衛ハ元和年中馬路ニ生ル農ヲ業トシ人
ト爲リ篤實ニシテ經濟ノ術ニ得意ナリ此ノ地ノ
風俗世ノ常ノ農氏ニ優リテ卑シカラヌ氣風ハア
レド家業ヲ重ニスル念乏シク家産ニ富メル者甚
多カラザリキ去ラヌダニ當時ハ大坂落城ノ後ト
テ世ノ波風未タ全ク靜ナラズ且ツ京大坂ヨリ程
遠カラヌ所トシテ邑ノ若キ者ドモ動モスレバ粗
豪ノ氣ヲ生ジ乱暴ノ振舞ヲナシ良民ヲ苦シムル
ナド最忌マハシキ所業ノミニテ已カ家業ハ愈々
等閑ナリケレバ久兵衛イタク之ヲ憂ヒ屢々若ヤ
者共ヲ集メラ懇々其ノ不覺ヲ戒利用厚生ノ道ナ

ドヲ最ト細ニ説キ聞カセタリケレバ人々具ノ誠
實ニ感シ遂ニ家業ニ出精スルニ至リ其後村風大
ニ改レリ
爰ニ又萬年ノ芝トテ馬路千原小川ノ三村ニ跨レ
ル芝生アリ現今ハ大川見間ヲ流レ
千原小川ハ川向ストナリ廣袤十數アリテ地味
モ水利モ頗宜シケレバトテ久兵衛コレヲ開拓セ
レテヲ思ヒ付キ同志ニ語ラヒテ京都ノ奉行所ニ
願ヒ出デ遂ニ其ノ許可ヲ得テ之ニ着手シケレバ
近郊ノ細民具ノ役ニ使ハレテ生計ノ道ヲ得シモ
畝カラザリキ去ル程ニ兩三年ヲ經タリケレバ車
業モ追々移リ寛永二年ニハ七町三段餘歩ノ佳良
ナル耕地ヲ得テ同族ヲ率ヒテ移リ住ニ愈々耕

一
叫
岐
誌

作ノ道ヲ勵ミヌ然ルニ久シカラズシテ久兵衛ノ
身上ニ一大災コソ出来リケル寛永十二年ノ秋一
夕大ニ雨アリ洪水大井川ノ堤ヲ決シテ瞬ク隙ニ
此ノ新開地ハ流サレ荒サレタリ人々其ノ蕪居ノ
地ニ歸住セントテ勸メタレドモ久兵衛ハ思フ所
アリトテ荒地ノ復舊ニ従事シ石礫ヲ搬去シ泥土
ヲ輦シ經營愈々努メケレバ正保二年ニ至リ又
全ク良土ニ復シタリ時ノ領主柘平伊賀守ヨリ多
クノ金岳ヲ賜ハリ子孫具ノ遺業ヲ継ギ千代川村
大字今津ニ住セリ今津ノ地ハ久兵衛ノ後人ニ遺
セル所ナリ

テ愛宕路ニ沿ヘル深山ニ樵シ己ニ荷作りヲ爲シ
タルニ思フヨリモ早ケレハ春ノトトテ日ハ暖ナ
リ風ハ和カナリ烟草燻ラセツ、草ヲ蒔ニシテ園
ヲスモ一眠リセリ暫クシテ目醒メタレバ去来歸
ラントテ日脚ヲ見ルニ眠ル前ト同所ニアルヲ以
テ思ヘラク眠ルト永カラガリシト而シテ具ノ實
ハ眠中ノ一轉ニ東西ノ方向ヲ誤リ西ヲ認メテ東
トナスヲ知ラザルナリ是ニ於テカ心ヲ安シシテ
又眠ル體ノ冷ナルニ驚キ起ケレバ月ノ東ニ昇ル
ヲ見テ猶ホ其ノ夜ナルヲ知ラズ以テ日トシ其ノ
日ノ太夕永キヲ疑ヒツ、歸路ニ就ケバ松明ノ天
ヲ照シ来ルニ遇フ熟視スレバ家族隣保ノ来リ索

ムルナリ其是ニ於テ已レガ眠リノ永カリシトニ
 心付キシト云フ
 社倉穀積立及貸附方恣
 饑年無策救疫民正坐官私倉不盈美事傳來驚起坐
 君侯新命親常平トハ深川星巖カ常平法社倉法ノ
 幕政ヲ謳歌シタルモノ謂ハ所ル寛政ノ治ニテ少
 將樂翁カ常路ノ時トス其ノ法タル旗_下士ノ采邑
 アルモノニ五年間收穫一萬石旗_下士ニシテ高ノ大ナルモノ九
 千九百九十石ノ權田粟アルト云フニ付テ五十石ノ割合ヲ以テ領地ノ
 倉庫ニ貯藏セシム此ノ方恣ハ安政以來國家多事
 ナルマデ到ル所ニ行ハレタルヲ見タルガ維新前
 幕法ノ弛ムト共ニ其ノ影ヲ收メタル村比々皆是

ナリデアツタニモ聞セズ此ノ村ハ能クモ守リ能
 クモ勤メタリ左ニ其ノ實況ヲ示サシ
 一高千五百一石七斗二升 掛リ高一石ニ付一升
 七合六勺 明治六年 穀五十三石六斗四升 此
 米二十六石八斗二升 穀五石此米ニ石五斗
 五年ヨリ借用利足米 穀二石五斗此米一石二斗五升
 同十年利米 穀五十九石二斗一升 十年獲込 此米ニ
 十九石六斗五合 池尻分ヲ合算ス 穀二石五斗此米
 一石二斗五升 十年利 穀五石此米二石五斗
 十二年利 穀二十二石四斗此米十一石二斗 池尻分
六七九年ノ合算 米四石六斗四升八合 十三年六月利 米
 五斗五合八勺 同祥利 米四斗四升七合四勺 同祥利

京都府立総合資料館所蔵

二月

米ノ百六十一石一斗八升六合二勺 内七石九斗

六合二勺 出米行 残り百五十一石二斗八升

米三石七斗五升 十四年度人々利 合百五十七石

三升 四十九石六斗八升三合 十四年十二月臨時見

計直徴増米

合計米貳百六石七斗一升三合 十五年一月全高

右米借用ハ五月植付食トニ臨時困窮者ニ貸與ス

ルヲアリニ斗以上ニ及ボサズ其ノ利子一石ニ付

五升ノ割ヲ以テ新穀收穫ノ後ニ納ム 遊手徒食

ノモノニハ貸サズ其ノ借用手續ハ本人ヨリ五人

組頭ハ申出ル時ハ五人頭ヨリ村役人ハ申出ル村

役人ソノ諾否ヲ定ム 村役人ハ右米ノ管理人ナレ
バナリ

右社倉米代累積シテ金四千六百圓トナリ明治三

十八年公債證書ニ換ヘ基本財産トナル

明治四十四年大政府ヨリ其ノ成績ヲ認メタル褒

賞ヲ授與ス

杉浦家記事

杉浦出雲守正職ハ徳川幕府旗本八萬騎中ノ髦士

トシテ中外ニ重要視セラレタル所ナルヲ以テ煥

ヲ厭ハズ其ノ言行歴史ヲ左ニ掲載ス

杉浦正友知名市十郎ハ文祿三年初メテ徳川氏ニ

臣事シ慶長三年伏見城ニテ家康ノ近侍トナリ同

一町 岐 志

五年上杉景勝征討後軍トナリ中途ヨリ石田三成
敵退トシテ西上シ同十九年大坂攻城ニ後軍ニ元
和元年再度ノ攻城ニハ射手同心五十人ヲ附セラ
レ每役勲功アリシトテ相模ノ地六百石ヲ賜ヒ同
二年二代將軍ヨリ三千四百石ニ封セラレ諸大夫
トナリテ越後守ト稱シ後ニ内藏允ニ改メラル寛
永十二年留守居役トナリ奥方十騎同心五十人ヲ
附セラレ十九年六千石トナリ明暦二年隱居ス在
勤五十九年間本多松平稻垣等ノ大小名ト縁家々
リ寛文二年壬寅九月九日卒ス八十六歳諡名龍徳
院真休 寛永九年談判衆ニ擢任セラレタリ
正綱幼名市十郎改名市右衛門 後内藏允諱ハ正

照實父ハ忠右衛門親俊トス寛永元年初登城台徳
院大猷院ニ拜謁シ七年小姓組勤番九年祿高二百
俵下賜同十二月四百石 明暦四年六月家督相續
十二月平川口番所勤 萬治二年甲府城在番平川
口勤違門在番 火ノ番在勤 寛文八年留守居役
在勤 諸大夫トナリ天和二年役料二千俵加賜
領ヲ丹波ニ換與セラレ馬路村ニ陣屋ヲ造リ代官
ヲ置キ南栗田北栗田ト遠クハ氷上何鹿ノ賜地ヲ
管セシム高合セラレ七千石 貞享元年十二月廿二
日幕中奥方ノ年男ヲ命セラル具ノ老年ヲ祝セラ
ル、ナリ元祿十二年隱居勤仕七十年將軍ハ太刀
馬代ヲ獻シ是悉ヲ副ハ三ノ丸ト御臺所ト五ノ丸

町
岐
志

日書後著藤本肝
組五百騎長
八ヶヶ番頭具長

歌書獻上 法名智玉院一山

正職 市十郎 内裁允 初名 正春 元祿十二巳卯七月六

日家督相續八月三日小石川門番十三年正月十一

位四月廿五日公子、白髮ト禿ヲ厭不特與ナリ旗

下士中ノ學者トシテ名聲中外ニ聞コエ水戸黃門

義公明僧心越等ト交際深密ナリ儒道ヲ東條一堂

道西ニ禪道ヲ心越ニ受ケ琴典ヲ人見竹洞ニ學ビ

心越ガ明來ノ琴トヲ併セ習フ竹洞モ亦明琴ヲ習

フテ共ニ其ノ高足トナル以來辨ヲ琴川トス本辨

ハ寔齋ト呼バリ領地小口村ノ東光寺ハ心越ヲ以

テ開祖トスルハ其ノ緣由元文三年ニ家臣小野

田嘉兵衛召サレ琴曲合奏ノヲアリテ賞銀ヲ將軍

ヨリ下賜セラレタリ當時此ノ家ニ音樂盛行シタ

ルヲ看ルベシ 正職儒術ヲ重ンジ師ヲ敬シ常ニ

正式ノ行裝ヲ以テ東條ノ陋居ヲ訪フ東條ノ五辨

ヲ著スヤ正職父子カヲ效セリ五辨ハ道德性命天

心有無虛靜ノ五件ニシテ孔ニ老莊ヲ交フルノ

辨明ナリ此ノ緣由ニ由リ東條ヲ馬路ノ人トスル

書アリ左ニ一通東條ニ寄スル書又ヲ添

昨日作越々通古學新學共ニ性理字乃餘を斯

乃如く穿鑿殆ど少希ハ多ク多希ト拙ト書々存

居ハ可々以テん勉ムを何加ホ

先生を慕めども、性理ももを以てするやと有れ

一冊 皮 志

芝生を助る如くを存すは本年よりハ室義とてり
り所をなすなり

七月十九日

寢齋

寶永八年卯十一月十六日卒ス法名春林院泰山
以下正方正峰正勝等ヨリ數世ヲ經テ明治維新ト
ナル

軍役 騎馬七匹 主人共 旗二本 鐵砲十五挺

弓十挺 長柄二十筋 九人數百三十人

内外惣人數千人

屋敷 湯嶋三千七百五十坪 本庄下屋敷二千五

百坪

宗旨ハ淨土宗増上寺檀越ナリシヲ東照公ノ命ニ

ヲ東本願寺ニ改宗 宿坊長敬寺 淺草
軍器ノ圖

馬皮志

御旗本之印

前立物



真銅

但番頭以上万石以上八邊

御手前ノ前立物



真銅三ヶ月

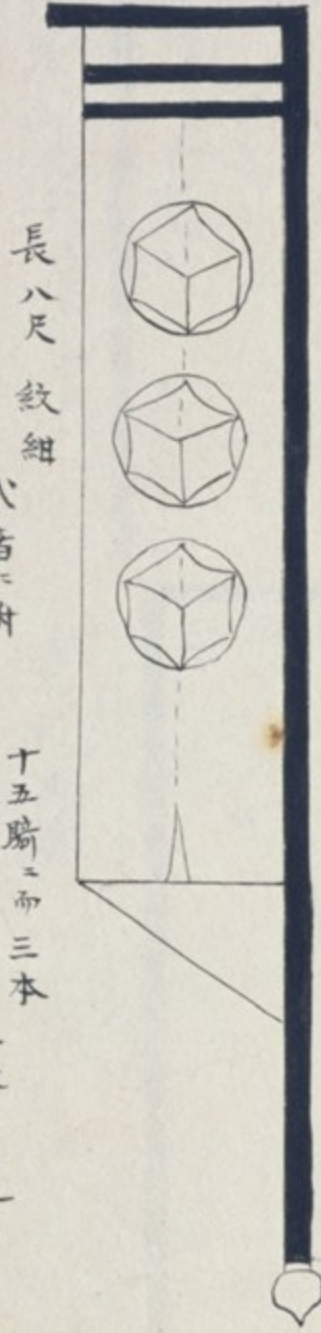
纏

出火之節

金三方



數桿



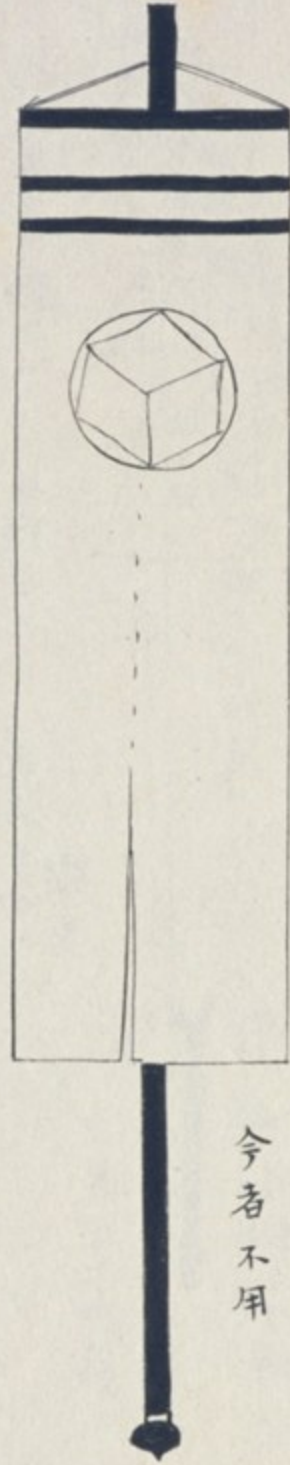
長八尺 紋紐

武者ニ附

十五騎ニ而三本

但し人数ニテ違フ

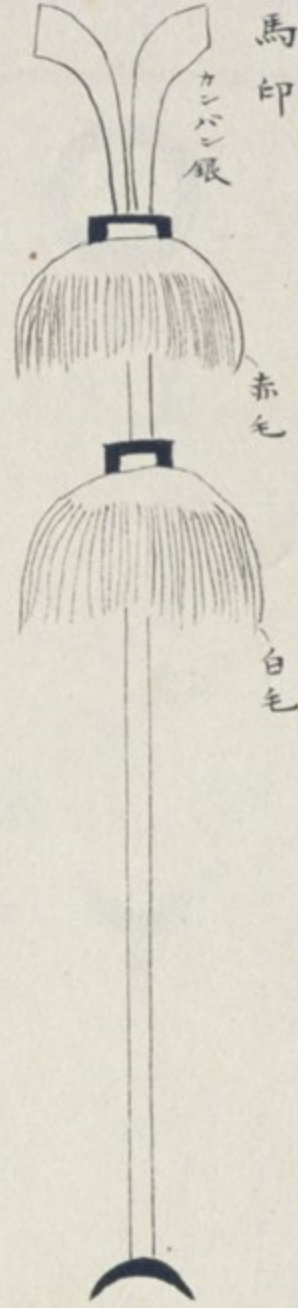
流旗



長一丈二尺

今者不用

大馬印

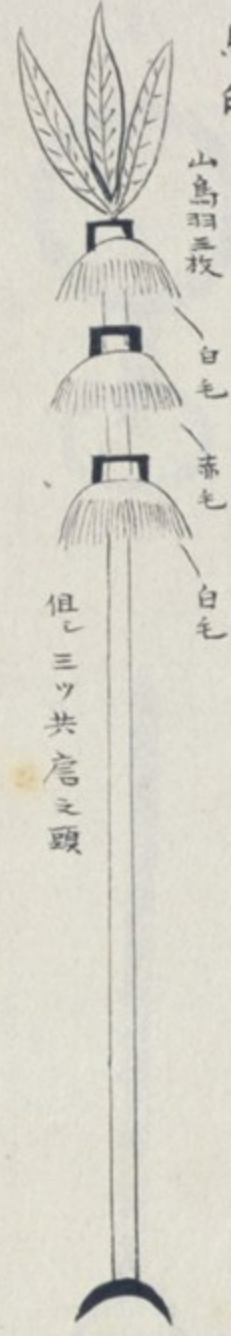


カシバニ銀

赤毛

白毛

小馬印



山鳥羽五枚

白毛

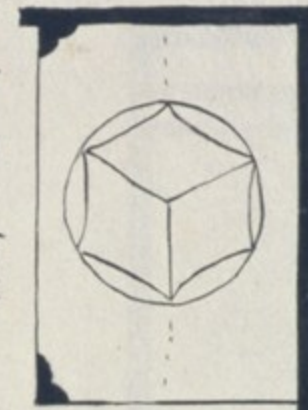
赤毛

白毛

但し三ツ共盾之頭

騎馬武者

三尺五寸二巾紋紐

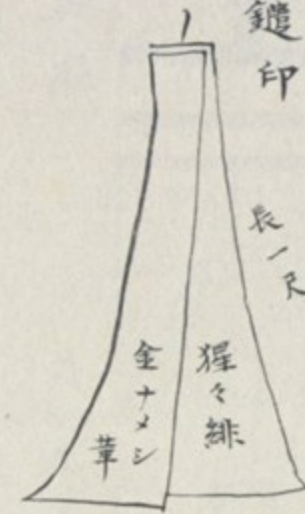


殿者子リ角ニ金革

家中ハ結角ニ青革

鎧印

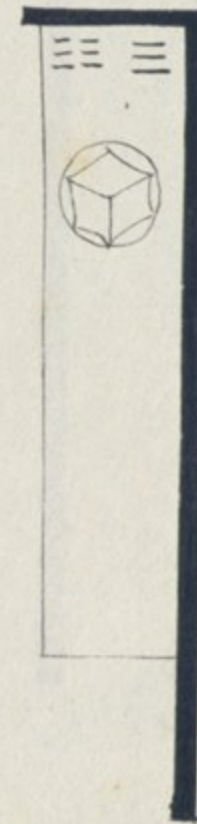
長一尺



猩々緋

金ナメシ革

歩行武者



腰差



具足之分藤

足輕之分結白

長柄

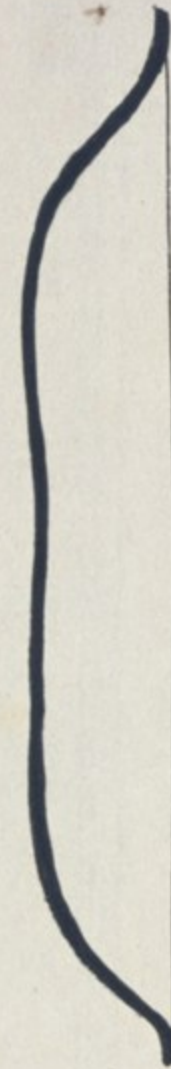


地ナメシ革黒
金ノ筋違筋有ナゲラ

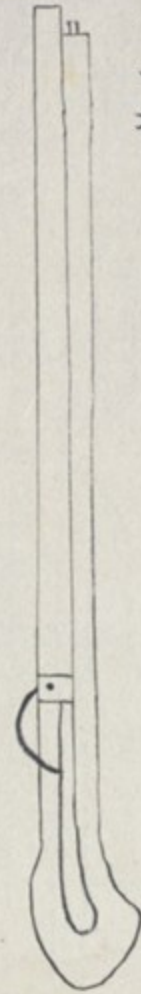
數二十本

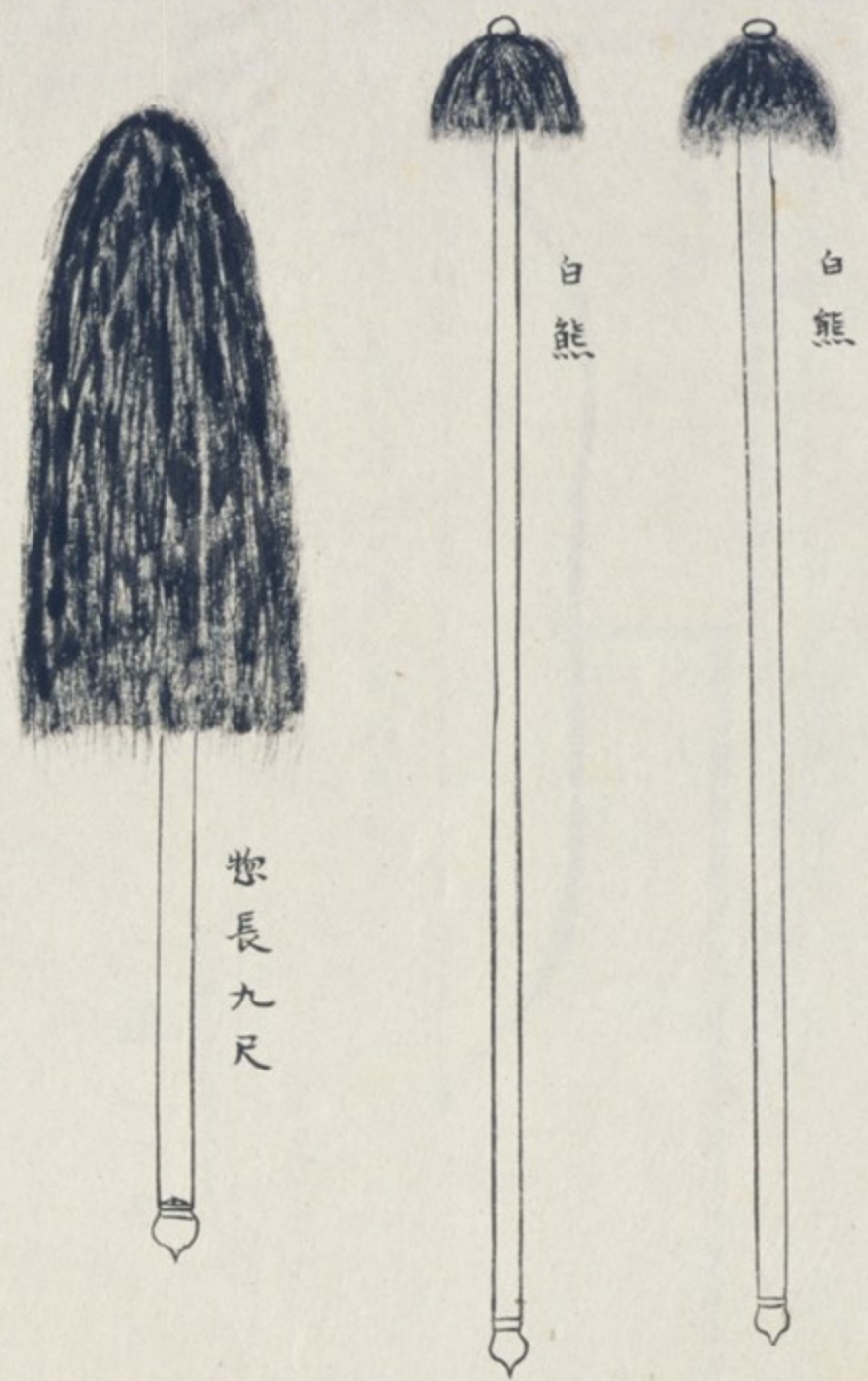
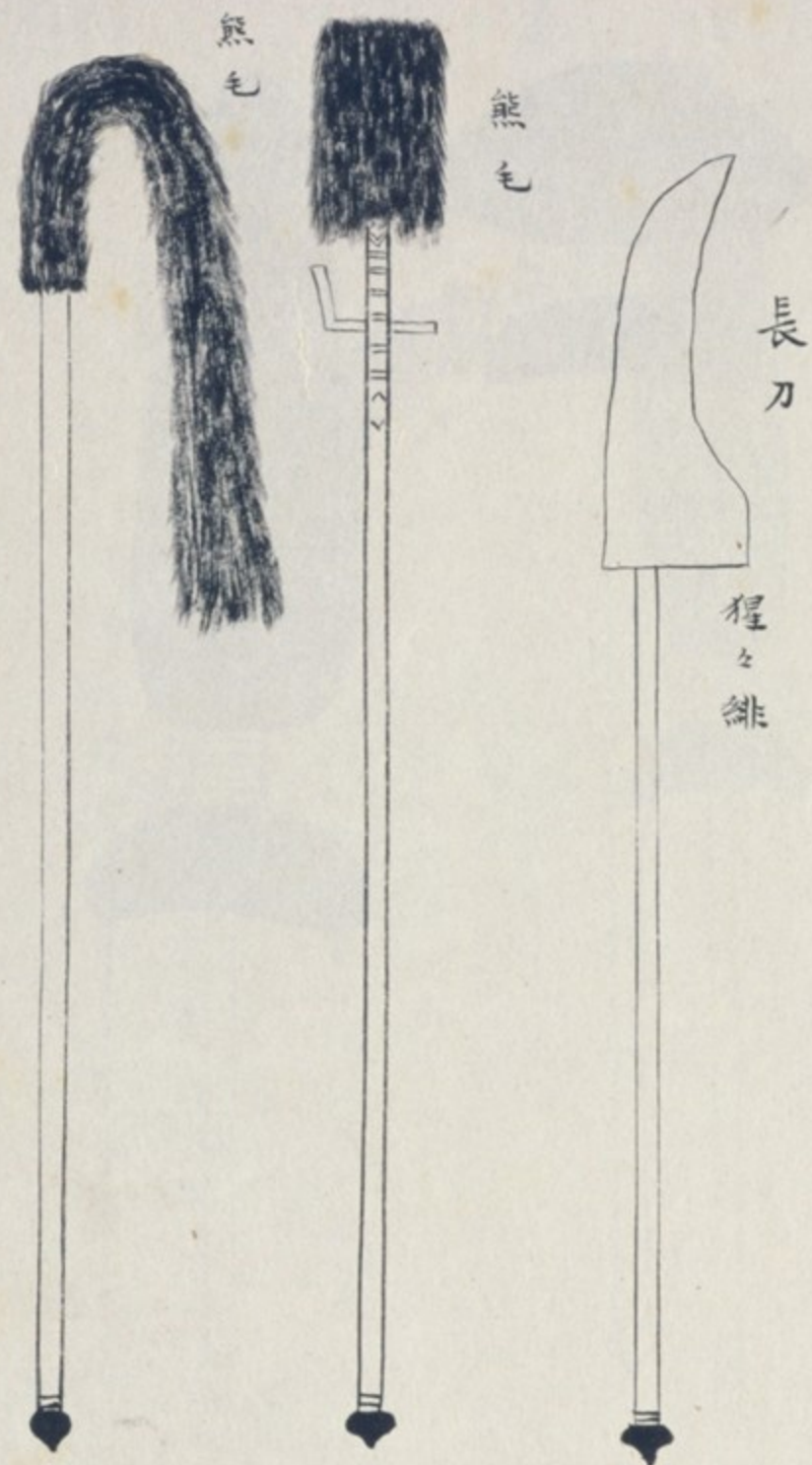
持弓十挺

靱三ツ割菱紋角添



鉄炮十五挺





京都府立総合資料館所蔵

合印



カンバン

家中地燈合印三ツ菱御紋朱ニテ上ニ付ル
替地燈合印朱ニテ菱中程ニ付ル

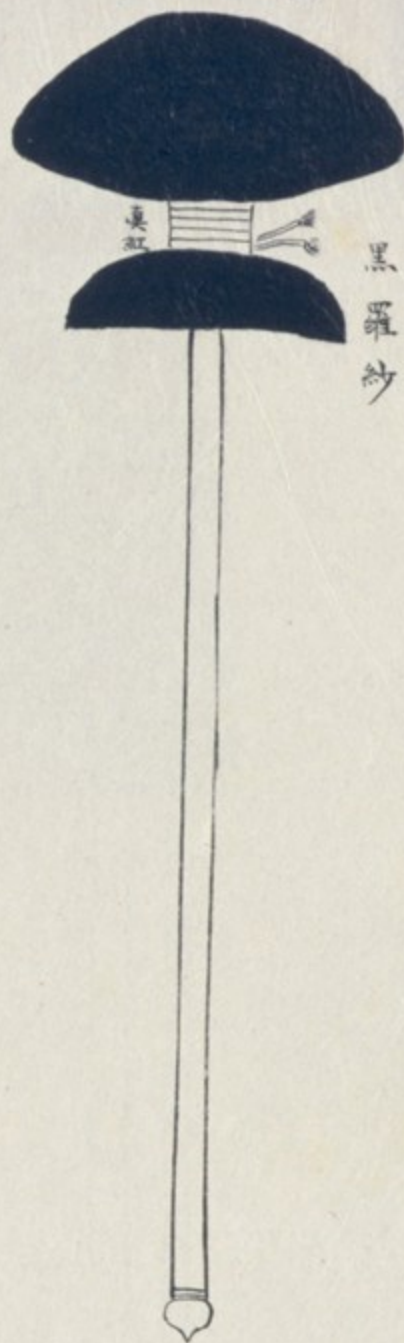
足輕中間紋所如此
給人以下火事羽織紋所ハ割菱

長柄傘



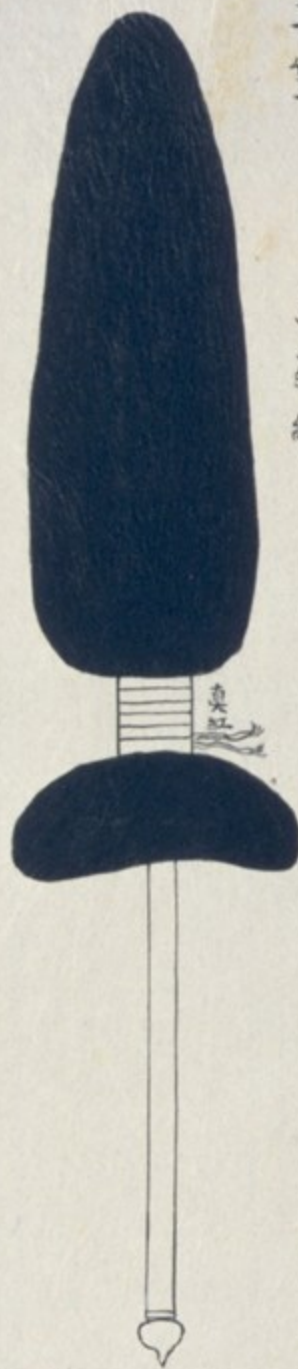
黒羅紗

笠 臺



黒羅紗

立笠



黒羅紗

領主ト人民トノ間ニ苛刻誅斂ヨリ紛擾ヲ生シ共
ニ傷ツキ俱ニ滅ブノ悲惨ハ往々之ヲ看ルナ
カ領主ト御士トノ間ニ權義ノ衝突ヲ來タシ相
互生命ヲ賭シテ相闘ガノ悲惨ヲ春平ノ世ニ顯出
ルトハ實ニ此稀ナル所ニシテ之ヲ當馬路村ニ於
テ賭ル杉浦出雲守正職ノ如キ名君アリテ内外無
事ナリシニ卒シテ幾バクナラズ一大騷動ヲ惹起
スルトトハナレリ正義辨ヲ蹇齋トス將軍家慶公
ノ御用取次御側役ヲ勤メ將軍ノ顧問トモナリ閣
老ト將軍ノ間ニ於テ周旋スル所少カラズ別示東
條一堂トノ問答ヲ見バ其ノ造詣スル一斑ヲ窺知
スルヲ得シ

西苗駕訴之事

西苗ノ輩ハ其ノ祖先カ世々任官シタルノ格式ヲ
守リ戰争ニ從事シタル遺風ヲ存シ家ニハ武器ヲ
藏シ出ヅルニハ兩刀ヲ腰ニシ平常白足袋ヲ穿ク
杯通常村民ニ有ルマレギ所業多キヲ以テ領主杉
浦内藏允其ノ治メ難キニ因シタルガ代官林甚矢
衛ナル者武威モテ之ヲ壓止セントヤ思ヒケン或
ル時ニ其ノ内ノ老令ノモノヲ召出シ其ノ不心得
ヲ叱責シ農民相應ノ分ヲ守ルベキ旨ヲ示シタル
ニ容易ニ従ハザルノミカ他領ノ百姓ガ領主ノ許
可ニ因ツテ帯刀スル如キモノナラズ數百年ノ習
慣古格ハ改メ難シナド頑強ニ申シ立ワルヲ以テ

其ノ主ナルモノ五名ヲバ村耆老ニテ召捕ラセ之
ヲ牢獄ニ投シ數日ニシテ歸宅ヲ許シ改心スルマ
デトテ手錠ヲ加ヘシメタリ是ニ因テ六十家ノ沸
騰喧噪ヲ惹起シ以爲ヘラク手錠ノ刑ハ古來年貢
未納ナドノ時科セラル、モノニテ今回ノ如キ下
ニ施スベキモノニ非ズ領主ノ所爲ソノ當ヲ得ズ
ト惣代ヲ授シテ領訴スレドモ容レラレズ仍テ中
川平右衛門外五名ヲ公儀直訴人トシテ出衆シ江
戶ニ赴カシメ領主ト至意ヲ戰ハシメント企テタ
リ當時ノ諺ニ領主ト迄ク兒ニハ勝タレヌトマテ
言ハル、ノ權威アルヲ顧ミス曲直ヲ幕府ノ決廷
ニ争ハントスル西苗ノ決心コソ勇マシケレ其ノ

西苗
志

時ノ老中ニ水野和泉守アリ公平ノ心ヲ操ルトノ
世評アリ且久シク京都ニアリテ所司代ヲ勤メ畿
内近傍ノ事情ニモ疎カラザルトノヲヨリ平右衛
門以下五名ハ其ノ役屋敷ニ依リ書付ト口上トヲ
以テ訴へ出デシニ受理セラレズ平右衛門懇請シ
テ曰ハク京都所司代御勤役中ヨリ下々ヲ御憐慈
下ニ置カレタル御尊名ヲ慕ヒ遙々參拜仕リタル
ヲナレバ枉ゲテ受理アラセラレタシ越訴シ奉ル
ヲハ御禁制ナルヲモ承知シ居ルヲナレドモ田舎
ノ者ニテ出訴ノ手續ヲモ辨へズ何卒吾等ノ真心
ヲ御取揚ゲ下サレヨト御取上ケ下サラヌ時ハ吾
等生キテ故郷へ歸ラント涙ト共ニ叙ベ立テシカ

ハ役人モ己ムヲ得ズ和泉守ニ陳述シ取り上ケ遣
ハス可キニ付キ勘定奉行へ出訴セヨトノ沙汰ア
リケレバ有リ難キ旨ヲ叙ベ旅宿へ歸リ相談シタ
ルニ左様ナ優長ナル手段ヲ取ル間ニ領主之ヲ漏
レ聞キ當路要處ノ方々へ賄賂ヲ爲シニハ却テ罪
科ニ處セラレ思フヲハ成ラズ世間ノ物笑トナラ
シ是レ從來多クアル所ノヲナレバ吾々生命ヲ投
出シ非常手段ニ出ツルヲ近路トスト便チ又願書
ヲ草シ領主不當ノ席々ヲ書列ニ幕府ノ大手門外
ニイミ居タルニ己ノ刻大手櫓ノ大鼓ノ響響ト打
出ヌヤ諸役人ノ鹵簿追々ト来ル大手門番ノ貴人
ニ對スル掛聲ハイヤ／＼ノ中ニ嚴メシキ行列ノ

町
成
志

進ニ来ルハ是亦有名ナル手腕家ナル老中有馬兵
庫頭ナレバ願フ所ト其ノ象輿ヲ目掛ケツカト
進ニ御願ガゴザリマスト許状ヲ竹頭ニ押ミ
タルヲ衝キ出シタリ元来駕訴中ノ過劇ナルモノ
故往々ソノ者ヲ死刑ニ處シ以テ後ヲ懲ラシムル
手段ナリシヲ以テ平右衛門以下五名モ生命ヲ賭
シテ爲シタル所ナリ然ルニ兵庫頭ハ其ノ許状ヲ
取上げ遣ハセト命シ駕脇ノ士シテ之ヲ取次ガセ
其ノ許状ヲ輿中ニ收メ且言フ其方共今晚吾ガ役
屋敷ニ来ルベシト而シテ行列ヲ進メ登城セラレ
又平右衛門等ノ喜ハ如何計リゾ宿屋ニ歸リテ祝
酒ヲ斟ミ急飛脚ニ托シテ其ノ趣ヲ在所ニ知ラセ

晩景ニ及ンデ約ノ如ク参郎シタルニ懇ニ指示シ
テ曰ハク其方ノ地頭内藏允ハ若年寄支配ナレバ
若年寄ニ進達セヨ如シ受ケ取ラザルニ於テハ此
ノ方ノ指圖ナリト云ヘト便々ソノ如クナシタル
ニ翌日若年寄ヨリ杉浦ノ分家ナル杉浦通市ニ嚴
命アリ本家内藏允百連レ評定所へ出頭スベシト
杉浦家ニテハ此ノ事領地代官ヨリノ急報モアリ
駕訴アリタル事ヲモ薄々聞キタルヲ速大下大騷
動ヲ爲シ彼レ是レ手ヲ廻ハシタレドモ今ハ手後
レニテ致シ方モ無ク出頭シタルニ原告ナル領民
ハ白洲ニ居并ビ許状ハ讀ミ揚ゲラレ領主ハ之レ
ガ答辯ヲ爲シタルモ言フ所前後齟齬シ事實摸稜

町
史
志

ナルヲ以テ直ニ判決ヲ下サレタリ其ノ辞ニ曰ハク武州狹川奥州佐藤領丹波馬路郷ハ古来百姓制外ノ地ニ之アリ候具ノ儀存知ナガラ自分了簡紀明仕候段不届ニ有之候依之内藏允屹度ニ可被仰付候トモ地頭儀故具ノ通ニ被差置候代官林甚兵衛ハ追放申付五ヶ所攝候様可申付候ト一同難有旨ヲ演ベ退出シ西苗ノ愁眉一時ニ展ビタレバ隨伴出府シタル六十一名モ共ニ歸國シ此ノ事何時ニカ遠通ニ聞コハ西苗ノ聲望大ニ揚ガレリ

中川祖靈社ノ棟札寫

慶長元丙申年

中川刑部大輔重義二十代嫡孫

貞統親王

義光

頼主

中川櫻津守從五位重政入道兼直判

清和天皇

經基王

頼義

中川祖靈社建立中川氏祖神之神殿(宇武運長久子孫繁榮之所)

八月大吉祥日

別當大先達

清淨院判

人見中川ハ國中ノ舊家トシテ門閥ノ巨擘トシテ一方ニ雄視スルノ姿アリ其ノ廟ニハ人見ニ於テ橋詰兄ヲ祀リ中川ニ於テ六孫王經基及ヒ藤原鎌足ヲ祭り歳時ノ享薦懈ラズ而シテ兩家相親ニ相互婚娶シ血統牽聯シ恰一家ノ如シ一村ノ法式亦多ク西姓ヨリ出テ村役亦多ク西姓ヨリ出テ馬路ノ西姓カ西姓ノ馬路カヲ疑ハシムルノ概アリ西姓ノ族政ナルモノアリ西姓中ヨリ各三名ノ古老ヲ擧ゲ之ヲ掌ルソノ第一席ノ者ヲ一筋ト稱ヘ具

丹波志

ノ權ヲ經轉セリ具ノ族家政ハ純然タル野武士
ノ風ヲ具ハ鎧兜弓箭刀槍ヲ貯ハ一歩門戸ヲ出ヅ
ルヤ必ス一カヲ佩ビ他村他方ニ赴クトキハ双刀
ヲ帶ス其ノ田ヲ耕シ山ニ樵スルニモ一刀ハ之ヲ
腰ニス其ノ貧ニシテ他姓即チ小番小者ト稱セラ
ル、者ノ家ニ雇ハル、時ニハ雇主ノ家ニ入り今
日モ遣ツテ來タゾノト言ハハ雇主兩手ヲ番
ハ腰ヲ屈メテ走り出デ御苦勞様デゴザリマスト
云フ其雇賃ノ如キモ雇主ノ與フルガ儘ニシテ涼
潔ナルガ上ニ正直ナルモノカラ往々此ノ横平モ
ノヲモ備ヒタリトゾ具ノ武術練習所ニハ而姓中
ノ先輩之ヲ教習スルアリ弓術ハ代々免許以上ノ

人ヲ出シ具ノ術ヲ失ハズシテ兩郡弓箭組ノ師範
トモナレリ現今ノ師範ヲ中川録左衛門トス著者
ト舊好アリ七十有餘ニシテ寸的ヲ百間ノ外ニ射
中ス而シテ又學師ヲ聘シテ常ニ講習ヲ怠ラズ著
者モ數年之ニ從事セリソノ學課ハ主トシテ漢學
トス兩姓ハ斯ク文武ニ勵ムト云モソノ他ノ村民
ハ之ニ興カルトテ得テ故ニ人文ハ兩名ノ間ニ集
注シ從テ植方又加ハルニ至レリ
嘉永安政年間外國船ノ海洋ニ漂泊往來スルアリ
テ四方騷然タルヤ領主杉浦家モ幕府ノ徵發ニ應
シ兵後ニ服セザル可ラズ而シテ泰平ノ餘幕府ノ
軍役ニ應カバキノ士卒無ク兵登亦乏シ幕府ノ制

丹波
志

タル千石高ニハ人数ニ十三名持槍ニ本弓一張銃
一挺トス杉浦家祿八十石ナルヲ以テ二百有餘ノ
士卒ヲ備ヘガル可ラズ而ルニ常備具ノ五分ノ一
ガニ無シ幸ニモ領地ニ此ノ野武士的人民アルヲ
以テ急ニ之ヲ東都ノ邸ニ徵シカラ勞セズ資ヲ要
セズシテ軍備ノ充實ヲ得常ニ同旗下ノ義殺スル
所トナレリ何ンゾ知ラシ是ゾ後日主從間禍機ノ
伏スル所ナラントス

天下少康瘼夷ノ沙汰モ輟ミ江戸ノ固メモ不用ト
ナリ而姓モ歸邑スル秋トハナリシガ領主ノ慰勞
ハ以テ而姓ノ役ノ苦ニ酬エルニ足ラズシテ而姓
壯士ノ憤恨ヲ胚胎シ機アラバ衆ジテ以テ領主ニ

穀イントノ志念ヲ養ヒ出セルニ領主及ビ具ノ臣
ニシテ之ヲ知ラガルハ怒ムベキノ極ミトヤ云ハ
シ嘉永安政ヨリ海内兵ヲ談スルモノ日一日ヨリ
多ク志人爲スアルノ時ハ来レリ兩名ノ壯士豈ソ
レ黙止スルアラシヤ此ノ時ニ當リ水戸前中納言
ノ子一橋中納言慶喜卿ノ上京スルアリ好機逸ス
可ラズトシ請フテ之ガ臣列ニ加ハル卿ハ水戸ヨ
リモ附ケ人許多アルベキナレドモ當時水戸ハ武
備ニ汲々スルヲ以テ本藩ニ充實スル且且ラズ一
橋家ハ徳川ノ分派ナルモ三卿ナルモノ、一ニシ
テ別ニ領地ヲ附セラレガル家系ナルヲ以テ臣家
トテ多クハ有ラズ故ヲ以テ大ニ新附ノモノヲ迎

町
城
志

ハタルニ因リ西名モ其ノ内ニ數ハラレタルナリ
此ノ事略ハ成リシトシテ領主ノ探問スル所トナ
リ以爲ヘラク領地ノモノニシテ一橋ノ臣タラン
乎徳川旗下ノ士ト同列ニ比セラル是ノ如クナラ
シニハ領主ト看ラ比スルニ至ラン施政ノ一大妨
礙ナラント乃急ニ令ヲ再設ニ下レ馬路村ノ代官
ヲシテ抑止セシム應ズ成制セントス愈抗ス即
チ暴カモテ禁遏セント首魁ヲ逮捕シテ獄ニ下ス
而苗ノ騰氣ニ熱度ヲ加ヘ今ヤ一小闘ヲ開カント
スルヤ京都ノ新選組ナルモノ、爲ニ捕送セラレ
六角ノ獄ニ投セラル、モノ數名アリ拷掠百端以
テ後ヲ懲サントスルニアリ新選組ナルモノハ浪

士ノ團結ニシテ佐幕黨トナリ町奉行ノカ以テ京
都ヲ治ムルニ足ラザル故之ガ佐ケヲ爲シタルガ
今ハ其ノ勢力奉行ノ上ニ出テ逮捕監禁ノ意ノ
儘ニナスモノナリ此ノ一劇ヨリ較シテ鎮靜ニ歸シ
タルガ如キモ其ノ内容ヲ窺ヘバ之ニ較シテ
念ハ隱然強キヲ加ヘタリ此ノ時ニ於テ鎖港攘夷
ノ論ヲ主張スル輩ヤ討幕勤王ノ議ヲ操縦スル曹
ガ踵ヲ接シテ捕ヘラレ六角ノ圍圍ニアリ其ノ中
ニ虚無僧ノ本寺ナル明暗寺ノ住職アリ長門藩士
河内山半吾アリ同志相憐ニ出獄後相提携セント
ノ内約カヘ秘密ニ交換セラレ半吾ハ許サレテ自
由ノ身トナルモ住職ハ赦サレズ呻吟ヲ獄内ニ産

ネツ、アリシ具ノ後半吾ハ勤王家ノ一ナル京商
鳩居堂熊谷氏ノ香料ニ供スル杜松根ヲ掘リ生活
セルヲ住職出牢ノ後之ヲ馬路ノ虚無僧取締所ニ
入レ私ニ消息ヲ通ハセ居タリ詔換リテ慶應二年
三月十八日長藩士ノ桂小五郎即チ木戸準一郎孝
允暗夜而衣滲漚トシテ来リ両苗ノ勤静ヲ探リテ
篤志家五人ヲ歴訪シ秘密條約ヲ結ビ夜ヲ犯シテ
去ル而モ代官ハ知ラズ近傍諸藩モ知ラズ木戸ノ
後来ルモノ廣瀬兵助西郷吉之助黒田嘉右衛門等
アリ秘密條約ノ大款ニ云ハリ有志輩西國大名ノ
共ト相合シテ幕軍ヲ襲ヒ京都ヨリ逐ヒ出スベシ
若シ能ハザル時ハ天皇ヲ擁護シ防長ヲ以テ畿甸

トセン又一説ニハ山陰道ヲ往還ノ路トシ山陽道
ニ出テ藝備ニ藩ヲ説キ進退ニ便セン是亦能ハズ
シハ伐漏ヲサルノ有志者ト官軍丈ニテモ此ノ地
ヲ經過シテ長州ニ落チント此ニヨリ両苗ハ兵食
ノ準備ニ汲々タリ代官ハ薄々此ノ舉アルヲ察知
スルヤ河内山半吾ノ退居ヲ命シタリ半吾ハ竊ニ兩
苗ト再會ヲ期シ夜ニ入りテ京ニ至リ機ノ至ルヲ
待チタルニ恰好ニ慶應四年正月三日幕官淀伏見
烏羽ニ敗レ総督西園寺氏即夜馬路ニ下リ人見立
之進ノ宅ニ入ル中川祿左衛門子第ヲ帥ヒテ奉護
ス正月ノトトテ村中ノ若者相集リテ遊戯スル所
ハ官軍入レリトノ説アリ前ニ逐ハレタル河内山

河内山
志

王は若狭山口に奔り、舟名に人数を用ひ、
あはれ御座り、明日は舟に上り、御座りて
下事

其志軍正月日 官軍報事 判

馬路村有古里代

今之立、起、
中川流、
中

右文中ニアル弓箭組ノ下ハ船井郡迄論中ニ示ス
若狹藩歸国ニ際シ官軍トノ關係ハ多紀郡福住村
記事卷看アルベシ

馬路村有古里代

栗田船井支那之徳川領旗中飲農長鎮接米全
永綿等之儀中付事

但薩藩手付ノ所ハ御村ノ分ハ臨ミ

官軍報事 判

右文中薩藩手付トアルハ薩磨藩ヨリ御村ノ處分
ヲ爲セシモノヲ云フ當時官軍中勢アルモノハ薩
長土三藩ニシテ各自諸方面へ出兵シタルハ具ノ
衝突ヲ豫防シタルナリ

今度

勅使隨從御妙ト云々

且下ハ一先銀之圖之、此指返ハ

以沙汰ノ事

正月廿四日

寺宇藩御討判

丹波志 郷士中

京都府立総合資料館所蔵

右ハ西丹ノ地方大半平定ニタルニヨリ宮津ニ於テ出カサレタルモノ御守衛役所トハ弓箭組ヲ支配スル新設軍衛

馬路御士西苗中

右丹波天田郡銚持米全封ノ以 作付々々桑

田船井五拜同様示傳以 作付々々條現在辻取

潤々々彦馬菴陣迄下中出カ事

三日 官軍執事判

右ハ官軍凱旋山陽道通過ニ付兵庫ヨリ出ダサレタルモノ

馬路御士五苗中

右定達而桑田船井西郡澳摺米全封方以

作付々々々

初便所改路之上何々々々何々

々々送カ出カ條福運々々々々何々出カ事

々々々

三日 官軍執事判

前同時ニ出カサレタルモノ

山陰道方鎮持役出カ之市神運池台等々々相

励々々不格感敵々々々御一回失費々々少事

以今年々々末一度限以 定カ也

辰正月 判

中川 御士中

右ハ丹後ニ久美濱縣ヲ置テ徳川直轄地旗下士ノ

京都府立総合資料館所蔵

支配地ヲ管轄セシメラル、ニ付キ馬路ヲモ其ノ
管下ニ置キ西苗ノ所管ニタル所ヲ引渡スニ降ニ
ラ出ガサレタルモノ

右七通書付ク写記懸キテ處々お懸キニ付
此ニ之を保衛スルモノ也

明和七年七月

西園寺公望判

右八年ヲ經テ事實ノ信誼ヲ失ハシテテ恐レ其ノ
證明ヲ求メタルニ對シ興ヘテレタルモノ

北越出洛中彈丸硝薬乃衛テ當リ粉骨忠節相
勵シ及神妙ニ至存ハ因テ其賞金子若干お遣
ル也

己十二月

西園寺公望

中川謙次郎 人見八郎 人見惣左衛門 中川百助

中川定太郎 人見彦太郎

右ハ山陰道鎮撫引續奥越征討アルニヨリ西園寺
氏ニ從ニタルニヨリ下賜セラレタルモノ

感状

茲而人見原右衛門為七騎ノ内抽移骨係系神妙
也仍感状此件

元暦元年三月廿日

頼朝 判

人見四郎との

右原書破失古紙重代ノ寫有リ

當國條約ノ幅内ニ地事處忠節於此ニ今取本
所家人藏テ有下也依申頼朝此件

京都府立総合資料館所蔵

山名内通正十二口、夜多野宿客陣處僅一撥馳
而大款即時進嵐山名右京討及津妙、至多所
手此款法度、傷 伊威石河處也依執道此件

永六、九月廿七日

高國 判

人見幸四郎 改

右原書燒七

丹州船井新世市村代、之儀、條、多如卷
下之地、乃、以、松、以、忠、節、所、當、以、仍、執、道、此、件

八月十七日

高國 判

長坂位高少院 (人見幸四郎事)

伊波お宇川表女親之時、多比額御之名、忠節
痛、可、力、戰、功、以、松、園、川、十、郎、可、力、成、意、公、共、謹、之

天文十八 七月五日

國貞 判

人見一族中

可早領丹波國船井郡地頭職、事
右全ても知り、多如件

永祿元年六月十日

義輝 判

中川四郎 改

右本書出羽秋田藩中川宮内少将

今後於馬表及一戰、其、比、款、御、依、之、境、數、多、到、來
津妙、之、城、收、以、所、可、御、軍、馬、車、等、要、也

九月二日

法性院信玄 判

右原書紛失

敵塔進、火急、裝、補、卷、法、陣、中、陣、所、川、詰、寄、越、所

志の晝夜分機仕以冬身中事小下者為塔不可
有能ハ之条下所及所機者ハ為中御ハ依五程
十卷迄覽ハ證之

七月五日

義景 判

人見馬陣

至表馬子仕役馬陣（上機）ハ作誠ハ事代戰功事法
歎馬動ハ盛入〇〇ハ酒法宮事作〇可達ハ
屬平均ハ〇〇標以忠勅中事ハ事代并分國生
外ハ〇〇馬馬事代ハ〇〇勅事ハ〇〇安夕ハ中
編ハ程以古事ハ進馬材ハ〇〇馬ハ〇〇證之

永 〇〇 〇月〇日

義景 判

人見一 〇〇 中

討捕歎之歎取臣又伍名官名之書ハ共具承命
少備心書好馬事名以名卷之進者事不御馬動
ト為以可ハ知右事候所要ハ其十ハ日以候者
中會ハ〇〇〇〇〇〇

十月五日

義景

人見即立命

為加塔中川事由之ハ事代ハ〇〇〇〇〇〇〇〇
令之ハ扶助ハ物如件

三〇〇
〇月〇日

信長 判

中川源兵衛尉

右京書往古遺後園中川快隆之文ハ送了ナリ
永ハ在傳ハ由進留取夕ハ〇〇付ハ所ハ久辰ハ事

京都府立総合資料館所蔵

六月廿七日に出る

一十月廿八日に出る

一南園記の地をみる

以上

天正八年

中川駿河守

秀吉 判

丹洲地を圍傳但之糧料馬之飼已矢誤地
至茶下下好之船之但合人数少中船少船
好之亦好之好之海上遊早之着居之
中船中使之使下使下知事也

天正十年

丹洲國傳中

信春 判

今後於朝鮮國海軍之軍中使之働事此
珠之味来之刻強欲之人味方進外年之
表一人或人討取之人捕之林妙之云
歎十古成面而明白也

又深元 七月十六日

清正 判

人見又之進後

其三月大関守方之條守之條守之條守
子心人へ使去年八月以五ヶ条守之條守
嘉兵衛名渡居之條守之條守之條守
して其條守之條守之條守之條守
中名護倉下条守之條守之條守之條守
其之條守之條守之條守之條守

京都府立総合資料館所蔵

地下くろく地交曲り者也

子原部年 西月日 判 (秀次)

中川小島海尉との

お音信辨りて遠河原に祀着し、早川谷た西門
了りしは

七月十日 判

中川海河了海

右原書文久四甲子年幕府へ差出し紛失

宛り 知行分り事

一高五百石 東本領 花堂村の内

一高五百石 大野領 津波村

一高五百石 日領 五本古村

一高四百石 之志井八合 西方 小和日の内

一高百七十九石 大野領 井乃口村

一高百七十九石 之志井八合 之志井 下長原村の内

一高百五十四石 西方 藤枝村

一高百五十四石 之志井八合 石守領 片倉村の内

合 四子石

秀次六年 西月日 判 (豊臣)

中川長之助 成

明智光秀手筒云通

今度二條本館より村五郎而自身分り得しは働澤
以強勇し至且又諸長し首級被討捕し跡若床
家中に御書目頼り者言ひ至子孫迄一可中何れ

少歳世傳為室屋吹とて方今之民之運を感戴し從
其村方門相と申し加障之能弊習とて之を憂ひ漸
之弊を矯むし小前之者引之方お最の能を遂破務
勉勵外ハ村民ハ風俗を正し人情を厚とし内ハ亭
懐之者ハ家族和睦ハ取寄に各一村譽を稱賛得獨
ハ趣多聞高妙とて之を自當と爲す

明正土年六月五日 京都府

池尻 天満宮 指定社ナリ 末社 自天 蛭子 稲子 別当 社官寺

百五十石 五十八軒 天保

福壽山文意寺 本寺 散々 坐像一尺 脇土 兼坊 地所 坐
連座像

畑野村

畑野村 大字 十ヶ畑 土ヶ畑 廣野
本村ハ郡ノ最西端ニ在リ東北船井郡ノ西本梅村
ニ界シ東ハ郡ノ本梅村ニ續キ北方山系ヲ隔テ、
又船井郡ニ接ス之ヲ坐猿ニ譬フレバ南東田郡總
ニ出右取ニ當ル隣國隣郡ノ歴迫ヲ受ケ不等長方
形ヲ爲シテ延長ス大約一里半山路數岐行人迷フ
新村名ハ三部落ノ文字ヨリ成ル大正二年人口四
百七十七ヲ數フ國中人口稀薄ノ部分ニ屬ス
十ヶ畑 天保度高七十九石内二十九石仙洞御料
五十石法常寺領人口四十
西山神社 午頭天王ヲ祭ル六月七日祭禮 大正
手檢査指定神社ノ内トナル

京都府立総合資料館所蔵

庚申堂

大梅山法常寺 京都妙心寺末 臨濟宗 本尊釋迦坐像 三天開山佛頂國師後水尾天皇ノ勅創寛永十八年三月建立普請ニ同帝ノ宸殿ヲ移ス勅使門モ亦同シク賜材ヲ用エ本堂ハ後櫻町天皇ノ勅宣ヲ以テ明和九年造營セラレ開山堂ハ光格天皇ノ勅宣ニ由リ寛政五年建造セラル鎮守社ハ後水尾天皇御下賜延寶五年ノ建營ニ係カリ大正年間檢定特別保護建造物トナル明正天皇寛文二年詔アリ月次ニ聖壽萬歳ノ祈禱ヲ修セシム靈元天皇延寶六年三月開山ノ國師孫ノ宸翰ヲ賜フ同五年紫衣地大本山ノ寺格ヲ賜フ爾後列聖列后ノ宸牌ヲ

安奉シ東福門院ノ御歸依寺トナル後水尾天皇御在世中御齒一枚ヲ以テ御陵代トシ又尊影ヲ賜フ真敬法親王ノ描キ玉フ所

此ノ地ハ元來園部藩侯小出氏ノ所領ナリシガ本山創立ニ際シ本郡ノ大井村ト交換セシメ當地ヲ仙洞御料ニ編入シ皇室ノ賦役ヲ免除シ本山ノ勤役セシメラル靈元天皇貞享二年以前ハ御料租ヲ皇室ヨリ割キ賜ハリ同年以後御内帑ヨリ米八石ヲ賜ヒ孝明天皇慶應元年ヨリ明治三年マデ金六拾兩ノ年金下賜アリ御修理料聖壽御祈禱料ノ下賜モアリ其ノ上御大葬ゴトニ參朝シ御獻香回向ヲモ行ヒ御遺物御遺ノ拜受アリ 歷朝ノ御大

京都府立総合資料館所蔵

禮ニハ參朝拜賀シ年頭ニモ拜賀セリ明治七年前
 例内道場讀經參向ヲ廢セラレ金百圓ノ下賜アリ
 九年特恩モテ毎年金百圓ノ下賜恩命アリ明治七
 年妙心寺ノ所屬トナリタルモ特殊待遇トナセリ
 末寺十個檀徒數家アルノミ同十年出火本堂敎使
 門幸ニ免ル寶物什器ノ庫中ニアルモノ亦同シ之
 ヲ示ス左ノ如シ

後水尾天皇尊影 皇子真敬法親王御画 御遺品
 添ハ賜ハル

右宸積靈元天皇 一軸

時ありて去りてむす一花子之々一花も咲けり子ハ
 桃園天皇尊影 筆者御繪所某 一軸

後水尾天皇宸翰額面 二軸

同御製和歌 二軸

宸筆釋迦名跡

管公名跡

御銀碗

女房奉書

東福門院御下賜 唐錦打敷 唐製御年 珊瑚珠
 七寶鈔珠數

明玉天皇御下賜 紐紙金泥經文 一軸

後光明天皇御下賜 御製和歌 二葉 御文章

一軸

後西院天皇御下賜 御製和歌 二葉

丹波志

靈元天皇御下賜 宸翰國師蹄 一軸 孔雀香爐
 一個 御愛硯 一面
 櫻町天皇御下賜 御褥 一枚 御圓鏡 一面
 桃園天皇御下賜 御燈臺 一基 御置物 一個
 後櫻町天皇御下賜 紺紙金泥宸翰心經 一軸
 御圓鏡 一面
 後桃園天皇御下賜 桃園天皇御冠 一具 御燈
 臺 一基
 光格天皇御下賜 御花瓶 一口 御燭臺 一對

相野村

盛化門院御下賜 御香臺 一個
 仁孝天皇御下賜 大陶花瓶 一口
 孝明天皇御下賜 大陶磁青磁花瓶 一口
 新朝平門院御下賜 御卓 一基
 後陽成天皇伏見天皇光明皇后孝明天皇御宸翰 合四軸
 寺格二関スル勅書繪旨 十七通 皇族及華族ノ書画台翰合旨書狀 數十點
 金岡筆 十六善神寶物取調局ノ鑑査快アリ 北殿日筆 十六羅漢 同前
 類雅筆 達磨 聖一國師ノ賛アリ 牧溪筆 章旆天 雲舟筆
 釋迦 李福筆 寒山拾得 揮幽筆 三幅對 唐織觀音 淳化
 法帖
 右ノ外皇室皇族華族等ヨリ寄附什器ハ畧ス
 關山圓師髮塔銘 一卷 真敬親王之ヲ製衣シ尊超法親王之ヲ書ク 逸記

相野村

手鑑 俊成卿九十賀詞 一冊

開山佛頂國師傳畧

國師諱ハ文守拜ヲ一絲トス參議岩倉具亮卿ノ第
三子ニシテ後光明天皇靈元天皇ノ外戚タリ後水
尾天皇ノ御母后中和門院ニ重ハ内墜タルヲ八歳
ヨリ十二歳ニ至ル門院深ク佛法ヲ信ゼサセラレ
師ノ運培ニシテ出世ノ器アルヲ見給ヒ命ジ相國
寺ノ雪岑長老ニ參禪セシメラル習禪四年ニシテ
業大ニ進ム時ニ年十又八後水尾天皇ソノ器量ヲ
聞キ皇太子ノ賓客タラシメントノ睿詔アリ師一
篇ノ文章ヲ獻シ之ヲ固辭シ十九歳ニシテ澤菴禪
師ノ和泉ニ在ルヲ聞キ往參ス更ニ槇尾山俊律師

畑野村

ニ投シ祝髮受具ノ典ヲ受ケ毘尼ヲカメ習ヒ二十
歳又澤菴ニ東都ニ從ヒ遂ニ其ノ堂奥ニ入ル然レ
氏年齒僅ニ二十一太ガ童ンゼラレズ京ニ歸リ愚
堂ノ印可ヲ得西ノ廂ニ閑夢菴ヲ初建シテ幽處ス今
ノ洞雲寺コレナリ近衛應山公鳥丸光廣卿等ノ孰
キ問フモノ多ク且又院使來往シ宮掖延見ノ命ア
リ從フテ其ノ名聲ヲ進ヒ來ルモノ日月ニ増益ス
ルヲ以テ煩ニ堪エズ意ヲ決シ此ノ地ニ退ク初メ
師カ毎朝托鉢スルヤ路ヲ京西ニ取り諸村落ヲ經
過ス千々畑ノ農人山内喜左衛門常ニ京都ニ來往
シ屢々コレニ途ニ逢フ風儀方正ニシ行止皆モセ
ズ遂ニ一語ヲ交ヘ深ク感ハル所アリ其ノ來リテ

丹波志

村内ノ古庵ニ住持タシテラ舊ム師ハ修行中ニア
リトテ之ヲ辞ス爾後幾度カ此ノ地ニ来リ山上ノ
草庵桐江院ニ入り潛居九年ニシテ本寺ヲ創建シ
住持三年四方ノ雲衲居士群至參集ス數ク召辟セ
ラレテ後水尾天皇ノ法問ニ奉答シ小堀遠州藩本
招花坊板倉宗室ト相交ル方外ノ友皆知名ノ士ナ
リ勅賜莊田ハ之ヲ辭シ御賜ノ絹帛モ之ヲ服用セ
ズ鐘樓僧堂ノ營築費用ハ之ヲ奉受シ靈源寺ヲ京
北ニ營築シ師カ入京止錫ノ所トス寛永十八年當
寺成ル上皇御書ノニ大額ヲ賜ヒ皇太后東福門院
ヨリ金縷帳ヲ賜ヒ太上皇第一皇女ヲシテ師ニ就
キ落飾セシメ給フ大通文智大姊ト云フ後ニ南都

圓照寺ノ開山タリ

寛永二十年某歲三十六知徳並ニ進ミタルモ猶自
己未到ノ點アリトセラレタルニヤ大圓寶鑑因禪
師ノ室ヲ叩キ請益スルニ一問一答機語投合ス因
師左右ニ謂フ他ハ是レ再來ノ人ナリ老僧亦他ニ
若カスト遂ニ嗣承セシメ證明ノ記ヲ與フ文ニ曰
ハク
祖師日不因師悟者萬中希有若自己以縁會合得
聖人意即不用參善知識文奇禪人乃其人也早明
了自己竟不因人求此故坐石上處樹下閑居過日
者年久矣老僧曾一見早知過量見矣他日狹路相
逢直以向上鉅鎚驗之恰如金剛不破壞又雖事々

畑野村

門坡誌

施陷虎機猶具師子返擲機又以平常語話子細勘
檢之與老僧見處不異如兩鏡相照於中無影像真
吾家種草也他日建法幢立宗旨運濟往來報佛祖
恩實不辜負老僧意祝々

寬永甲申七月初三日 正法山主愚堂東寔書

寬永二十年ノ秋江州高野永源寺ヨリ使僧來リ請
シテ已マズ曰ハク吾ガ圓應禪師ノ傳法今師ヲ煩
ハカン席ヲ空フシテ待ツト師峻拒スルモ留連旬
日請フヲ愈切ナリ強ラ應ジ普山スルニ及ンデ瘞
類ヲ復ス太上天皇ヨリ釋迦飲光慶喜ノ三像ヲ賜
ニ大殿ニ安ク文室褊狹ナリ皇太后内帑ヲ以テ更
造セシメ給ヒ永源中興ノ業成レリ住持スル丁四

畑野村

年同年宿病發ス太上天皇勅シテ京ニ入ラシメ御
醫ヲシテ診藥救治セシメ給フ治後歸山シ翌正保
三年三十九齡春初病復發ス詔アリテ京ニ入ラシ
ム應セズ左右之ヲ勸ムレ氏諾セズ詔シテ御醫ヲ
山中ニ賜フ馬山ノ温泉ヲ汲マセテ賜ヒ浴セシム
ルモ治セズ三月十九日泊然トシテ寂ス全身ヲ瑞
石山ノ後ニ窆シ遺骨遺髪ヲ此所ニ收メ塔ヲ測點
ト云フ語録アリ世ニ行ハル
師常ニ太上天皇ヲ稱シ奉リ佛心天子ト云フ延寶
三年三月勅シテ國師號ヲ賜フ宸翰ニ云フ
朕昔萬機之暇頻呂看涼一綵守和尚入對具定能
息慮冥慧能照真朕於此師法恩甚大實不愧古德

丹波志

活道人矣耶故謚曰定慧明光佛頂國師

延寶三年三月十九日

寬文六年聖牙一枚ヲ賜ヒ詔ス曰ハク朕ガ百歳ノ後ニ永ク山門ニ留置シ厚ク護持セヨト今以テ法皇御像ノ中ニ奉安セリ

朕不忘靈山之記薊專歸少林之宗猷專創靈源法常ニ箇之禪寺恰如兩翼也永傳開山一絲遺範莫謾隨他門非是繼人我情偏為宦法流也願皇風永扇佛日增輝子々孫々莫使吾願力空特涂翰以期劫石之無窮耳

寬文十二年三月十九日

法皇又近衛家ハ兩寺外護ノ院宣ヲ下シ給ヒ靈元

天皇ハ庭田右中將重條卿ヲシテ勅願寺ノ綸旨ヲ下サル其ノ文ニ曰ハク

當寺為勅願寺宜令專佛法之巨益奉祈
聖祚之洪基者
天氣如此悉之以狀

延寶六年五月廿九日 右中將 重

法常寺住持禪岩御房

第三世禪岩ヨリ十二世桂林ニ至ルマデノ住持ハ勅請ノ宣旨ヲ蒙ル三世ハ再任ノ宣旨アリ

法常寺住職事所有
勅請也宣奉祈 國家安全
寶祚長久者

畑野村

丹波志

天氣如此悉之以狀

年月日

職事花押

法常寺和尚禪室

同天皇ヨリ賜フ所ノ宸翰ニ曰ハク

虛堂先師十七世之孫大國寶鑑國師上足之弟子
一絲守和尚者先皇深歸依之恩常百參得去延寶
六年之春當三十三回之忌辰故為酬思謝德諡曰
定慧明光佛頂國師爰靈原法常之兩寺者國師開
基之禪刹先皇勅額之靈地也寔如鳥之兩翼也永
專佛法之紹隆可禱皇基之無窮仍更添愚翰者也

貞享二年八月十九日

測點塔下

同天皇貞享三年紫衣地ノ諭旨ヲ賜フテ曰ハク

大梅山法常禪寺者佛頂國師開基之禪刹 後水
尾院御願之蘭若也 是以為住持之輩者須着紫衣
刷入院儀式位次等相並南禪第一之上刹大徳寺
妙心寺前後可守年月也 門徒相互專佛法紹隆宜
奉祈禱寶祚之長久之由
天氣如此仍執違如件

貞享三年七月十三日

左中將 武

法常寺住持禪巖和尚禪室

師ガ短命ナリレニ付キテノ一疑問ハ皇室ノ衰微
其ノ極ニ達シ諸儀ヨリ日常ノ御事共敷慮ノ如ク
ナラズ師ノ入見スル毎ニ歎息セラレ後水尾天皇

畑野村

丹波記

丹波
法常皇寺
方丈



ニ内奏スル所アリ此ノ重漏レテ所司代ノ耳ニ入
リ幕府ノ嫌忌スル所トナリ遂ニ毒セラレテ痼疾
トナリタリト然ラザレバ強壯ノ心身モテ安シゾ
中途挫折ノ事アラシヤ其ノ病中殊渥ノ御待遇ヲ
垂レサセラル、ノ前示ノ如キ亦故アルニヤ
師ノ餘藝トシテ詩書畫茶事アリ小堀遠州瀧本坊
ナド深契アリ風流僧ノ名ヲ馳セタリ其ノ華押止
ヲ用テ達磨ノ畫贊ナド在リ

内務省直轄寺トナレルハ明治十三年ナリ
師ノ命名スル八景ハ

九路樵歌

後山ヲ九路峯ト呼ブ登路九系アルヲ以テナリ

千村春雨

ナケ畑村ハ寺前ニアリ

畑野村

大徳山

法常寺

桐江山月

桐江山中ノ地名 前文ニ示セリ

竹溪野梅

寺前ノ竹林 今尚フノ梅アリ

屏嶺新晴

天屏嶺ハ寺ノ東ニ聳ツ

聖巖老樹

屏山坐禪ノ故址

劔峰臘雪

劔峯山ハ百齊ノ日羅道場ノ故迹

帶水流澗

一衣帶水村中ヲ流ル

右ハ前示辰筆勅額ノ寫

堂前ノ一大^高石ハ名ツケ萬年岩ト曰フ岩下ニ清泉アリ帶錦橋^コニ架ス

大梅十二景

九路峯 千偈水 降大室 島心軒 聖者岩 伽藍廟

荷衣沼 松花堂 飛雲閣 厚玉林 桐江庵 羅浮苑

くわんおんまのまをいよ、あふくそよ

見のりの常子たはぬ山了 近衛内前公

強さきをくへのたかやま代も

つねあり、やくほのたけ火 伏見文秀女王

末寺 神慮山東林菴 本尊聖觀世音 惠心作

西林菴

真如菴

大字土ヶ畑 高八十石七斗五升八合 園部藩領

人家二十五戸 天保年間ノ水帳人別帳 明治二十

三年人口三十

東南ノ谷川西北ニ向テ流レ園部川ノ一源ナリ

八幡大神社 九月十日 舊曆祭禮ナリ産土神トス

觀音大士ノ堂アリ

萬祥山寶勝寺 禪宗曹洞派舟井郡下新江 摩氣龍穩

寺末開山鏡山和尚 本尊釋迦如來

土地ハ本郡ノ最南端部中ニ在リ一山脈ヲ間テ、攝

津トシ北ニ一山脈ヲ間テ、西本梅村トシ溪間ノ小

邑ナレド田畠少シトセズ左レド作米以テ百口ヲ育

フニ足ラズ薪炭木材ノ裕ナラテ以テ生計ヲ助資ス

京都府立総合資料館所蔵

ルニ足ル細長キ所ヲ谷ニ沿ヒ原ヲ過キ五十町ニシ
テ大字廣野ニ千ヶ畑ニ至ル一部落ノ小戸數ニシテ
一校ヲ設ケ其ノ負擔ヤ輕カラズ而モ能ク耐ク地勢
ノ不便コレヲシテ然ラシム亦己クテ得ガルトリ初
設當時苦情多カリシモ今ハ言ハズナリヌ
大字廣野元高六十九石文久度三十九石九斗一升五
合 園部落領 天保頃二十餘戸明治十年十四戸
氏神千ヶ畑ニ在リ

愛宕社アリ

古城山栖雲菴 禪宗臨濟派法常寺末本尊釋迦如來
路程標示ニ畑野村元標假標トアリ西面ニ大阪府能
勢郡根根莊村字天王迄二里十二町トアリ東面ニハ

本梅村中央迄一里二十五町トアリ

廣野川アリ邑中ヲ流ル土ヶ畑ノ一水源ト共ニ攝津
ニ入ル一山脈ヲ間テ、豊能郡石野ニニ十六町ニテ
連ス之レヲ攝津街道又大阪街道トス
全村ノ利源ハ野ニアラズシテ山ニアリ畑ニアラズ
シテ林ニアリ廣野ト云ヒ千ヶ畑エケ畑ト云フモ畑
野ノ幸無シ然レドモ其ノ利材ヲ出ダスニハ人戸半
背ニ藉ラガリ可テズ休ムノ亭無ク宿ノ借ルベキ無
シ故ニ法常古刹ヲ尋テルノ客往々空腹夜途ノ苦ヲ
免レズ

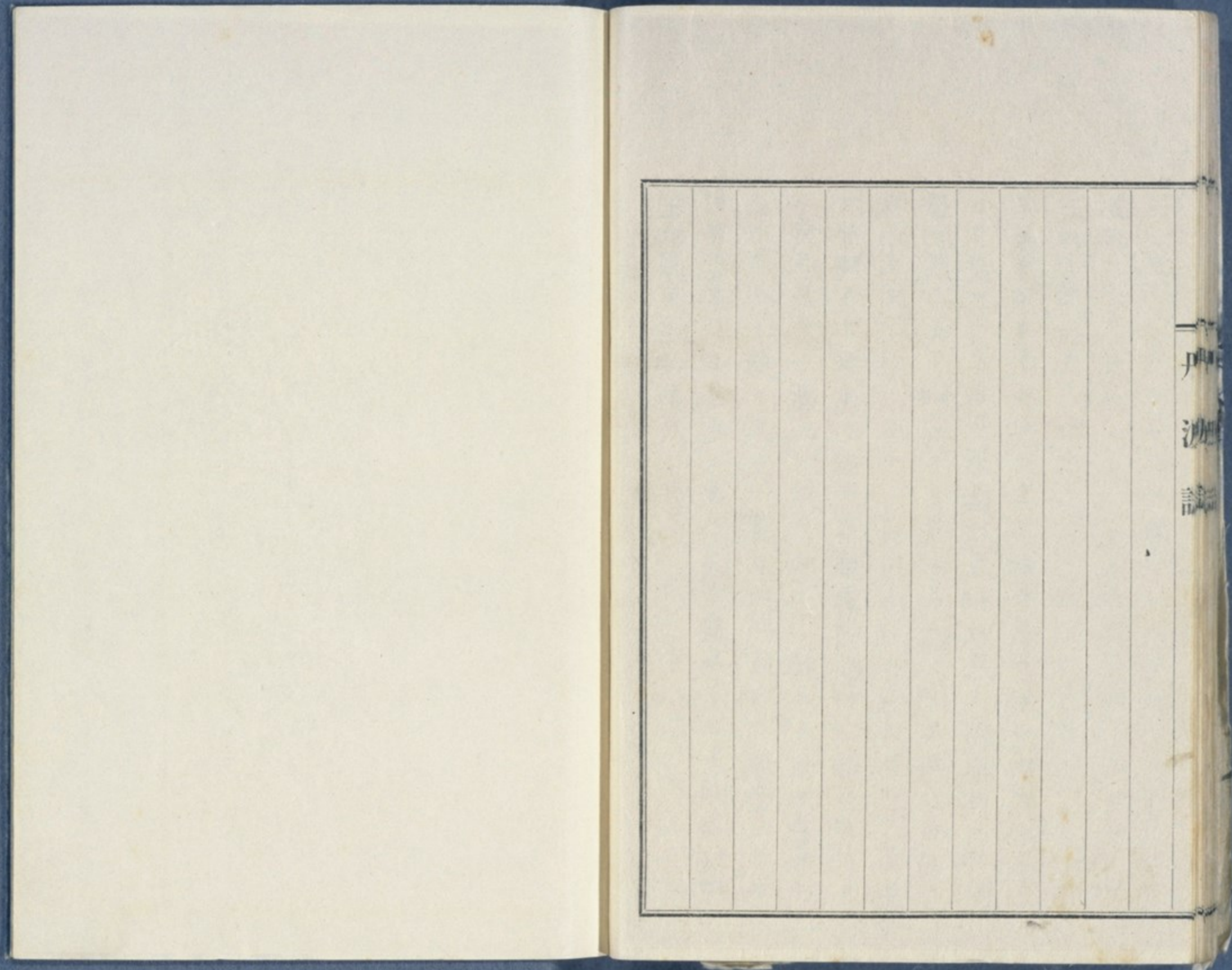
東方ノ小山路十八町下リ終ル所ニ西加舎アリ千ヶ
畑ヨリスレバ少シク登リテ大ニ降ル 加舎ヨリス

レバ之レニ反ス山脚ニ開クベキ荒地アリ工夫セバ
 灌溉スベキ流泉アリ 千ヶ畑エケ畑ハ往々山ニ浴
 二家ヲ設ク其ノ北面ニ天ヲ衝カントスルノ一峰ア
 リ是レゾ半國山ニシテ山址ハ大半船井郡ノ地アリ
 故ニ此ノ山ノ話ハ該郡誌中ニ出ダスベシ此ノ山ヘ
 登ルノ路千ヶ畑ヨリスルモノ緩ニシテ且近レ然ル
 所以ハ千ヶ畑ノ地タル平松赤熊中野大河内大谷垣
 生八田等ノ地ニ比スレバ數等ノ高地ニ在ルヲ以テ
 ナリ己ニ登リ路ノ一段ヲ越エタルバナリ法常寺ニ
 詣テ歸路ヲ寺ノ東ヨリ取り登ルモ可ナリ而シテ山
 ヲ下ルニハ各自其ノ便ニ從ヒ前ニ示セル平松以下
 ノ諸邑ニ入ル亦可ナリ

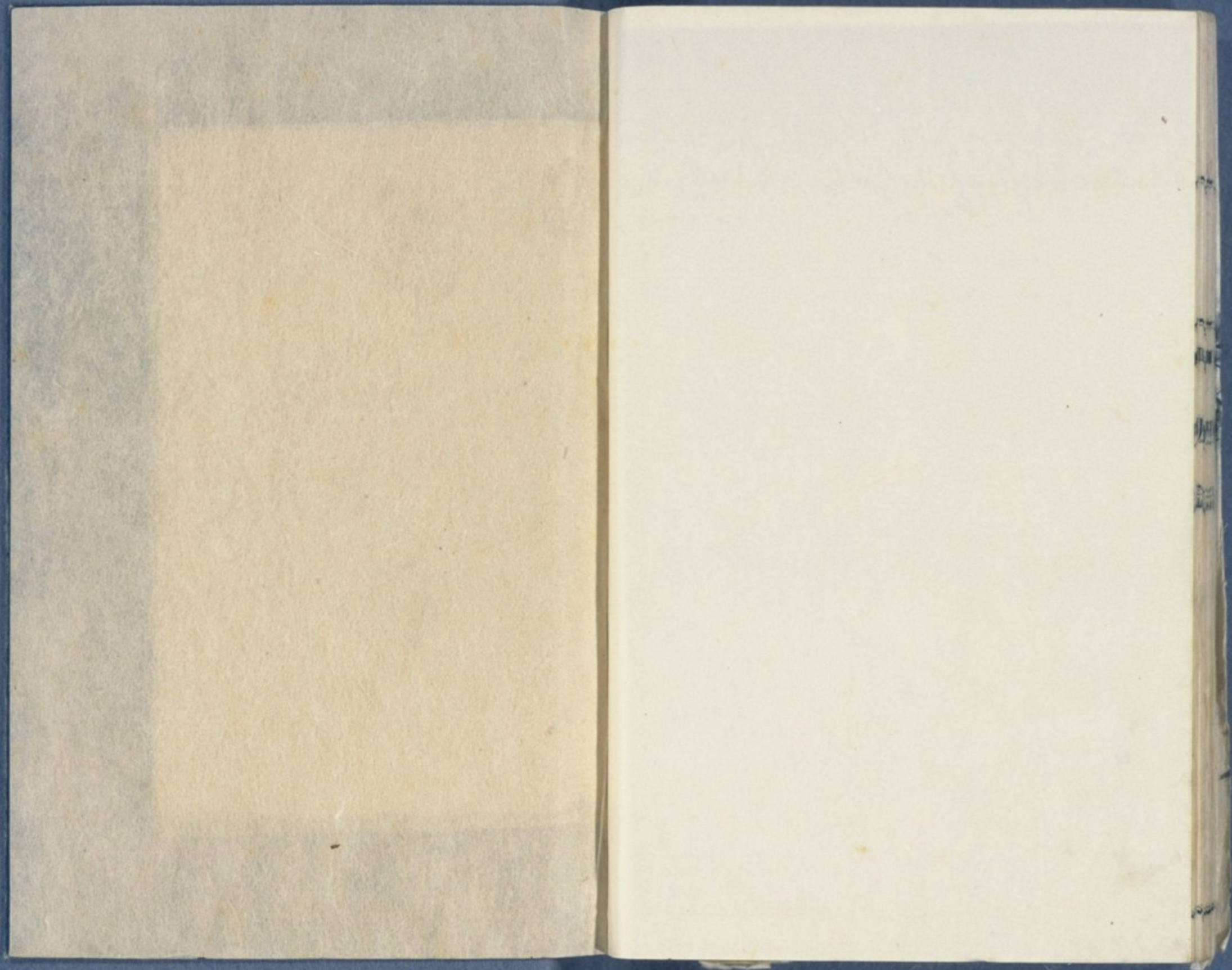
産物胡黄連撥割炭

胡黄連畧シテ黄連ト云フ漢方藥品トシテ鎮痛緩和
 ノ功アリト稱セラル一貫匁四五錢ヨリ騰貴シテ二
 十錢ニ昇ルハ豊凶ニ由レルナリ根ヨリ葉ニ至ルマ
 デ苦味アリ黄連ノ圖ハ天田郡河合村ノ部ニ出ダス
 蘇キ見ヨ
 撥割炭ハ土ヶ畑ノモノ最上品ニシテ火力ノ熾シナ
 ル丁炭中ノ玉トシテ金吹屋銅吹屋ニ需要セラレタ
 リ石炭用ニテハニ至リ形勢衰へガルト得シキ

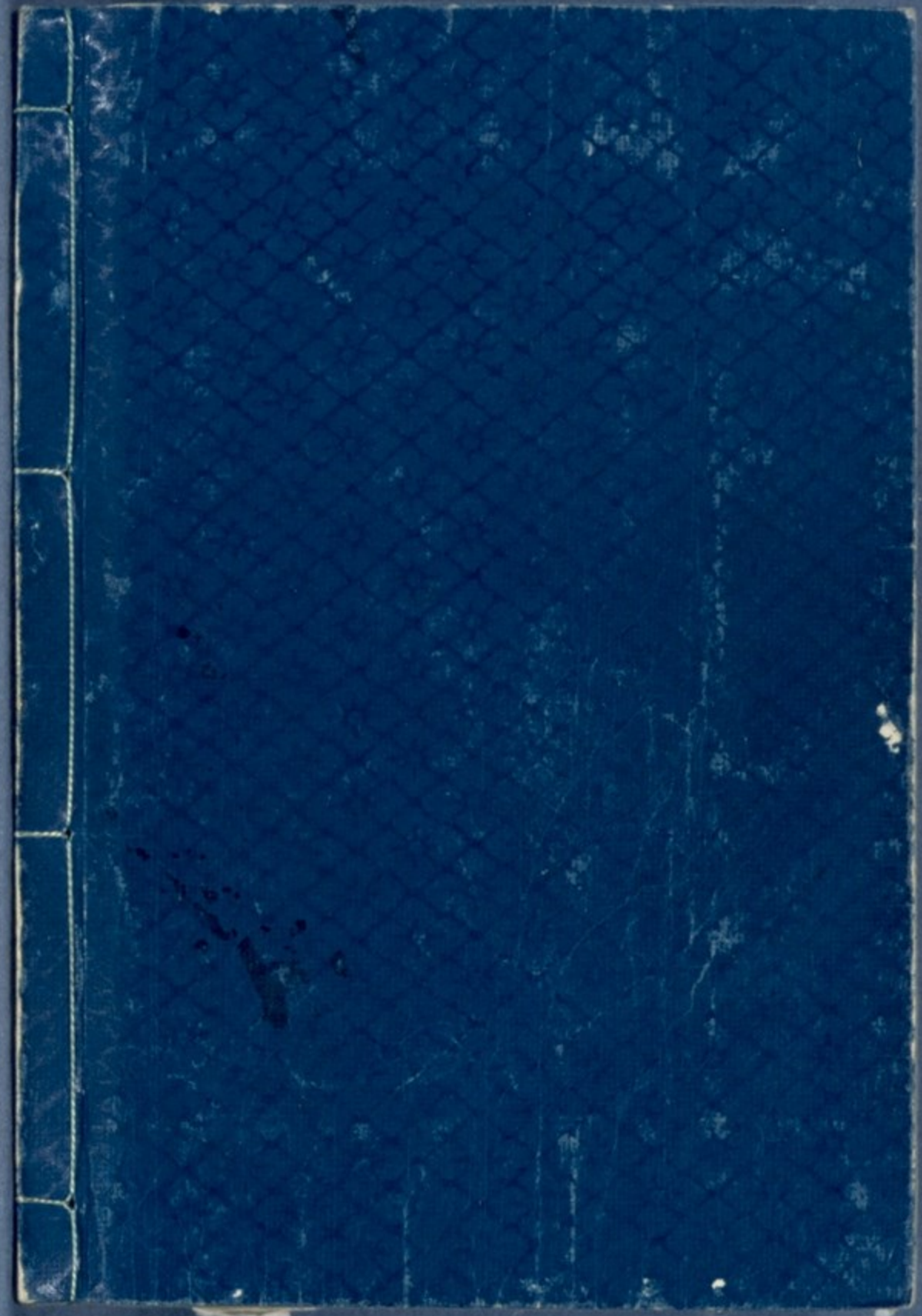
京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵